３．クロス集計および分析結果

以下のグラフは、主に困窮度別に示している。

３－１．基本情報

（１）経済状況

困窮度別に見た、経済的な理由による経験（保護者票問 7）

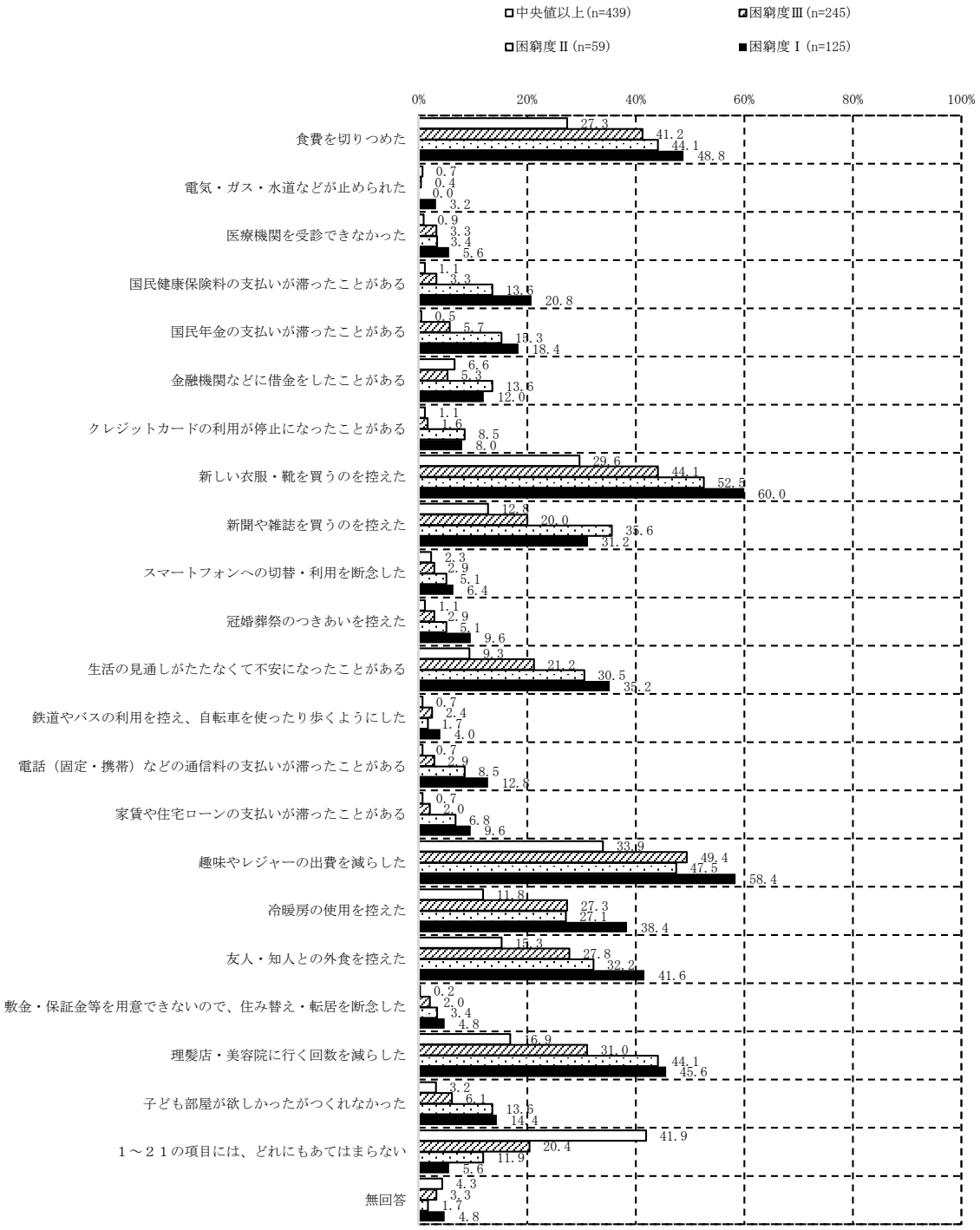

図 110. 困窮度別に見た、経済的な理由による経験

※「困窮度」については、図 6 参照。

困窮度別に経済的な理由による経験について見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「国民年金の支払いが滞ったことがある」18.4%（中央値以上群に対して、40.4 倍）、「敷金・保証金等を用意できないので、住み替え・転居を断念した」4.8%（中央値以上群に対して、21.1 倍）、「電話（固定・携帯）などの通信料の支払いが滞ったことがある」12.8%（中央値以上群に対して、18.7 倍）、「国民健康保険料の支払いが滞ったことがある」20.8%（中央値以上群に対して、18.3 倍）、「家賃や住宅ローンの支払いが滞ったことがある」9.6%（中央値以上群に対して、14.1 倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。また、「どれにもあてはまらない」は、中央値以上群で 41.9%なのに対して、困窮度Ⅰ群において 5.6%だった。

困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験（保護者票問 13）

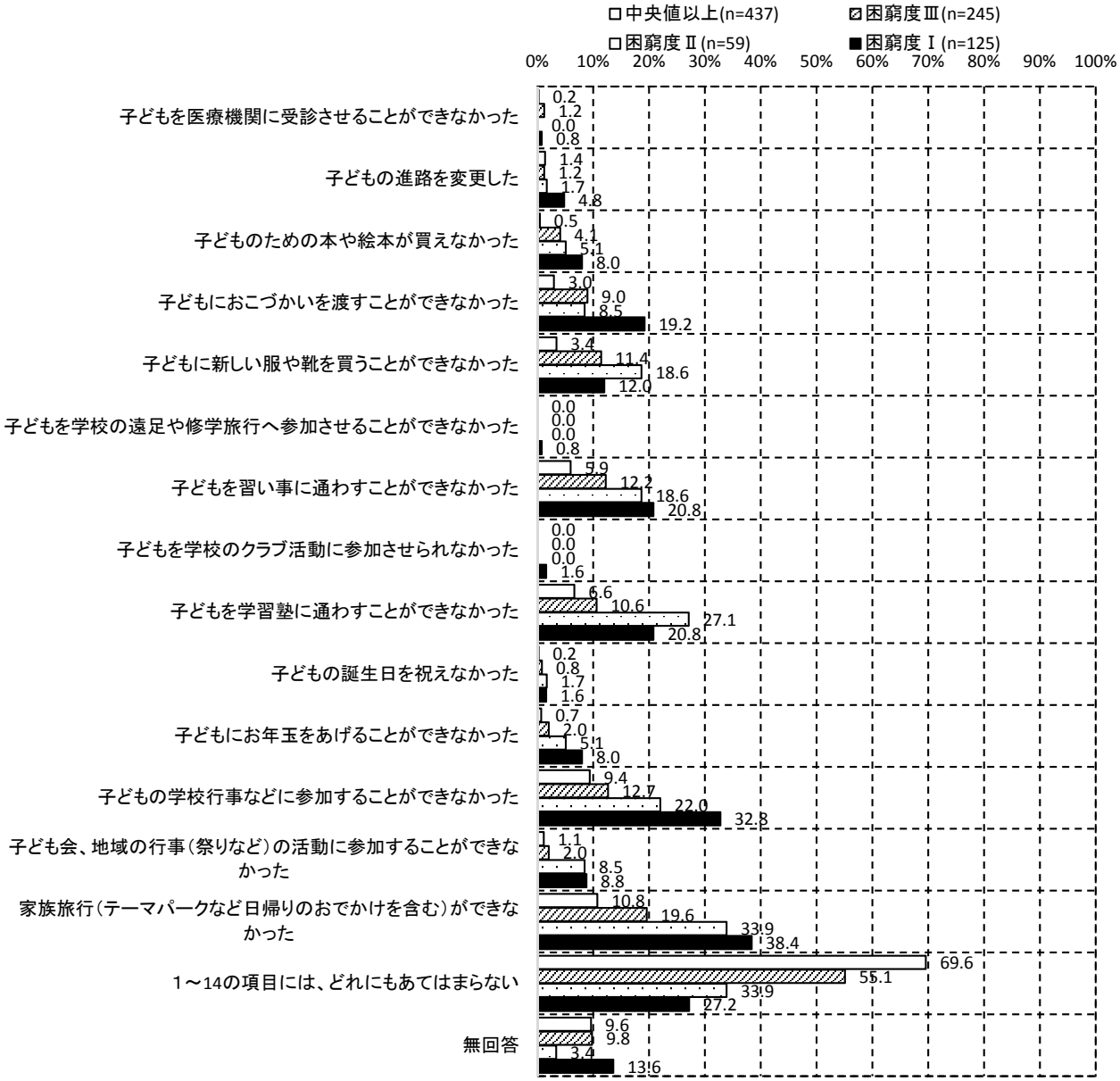

図 111. 困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験

困窮度別に子どもへの経済的な理由による経験について見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「子どものための本や絵本が買えなかった」8.0%（中央値以上群に対して、17.5 倍）、「子どもにお年玉をあげることができなかった」8.0%（中央値以上群に対して、11.7 倍）、「子ども会、地域の行事（祭りなど）の活動に参加することができなかった」8.8%（中央値以上群に対して、7.7 倍）、「子どもの誕生日を祝えなかった」1.6%（中央値以上群に対して、7.0 倍）、「子どもにおこづかいを渡すことができなかった」19.2%（中央値以上群に対して、6.5 倍）、となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。また、「どれにもあてはまらない」は、中央値以上群で 69.6%なのに対して、困窮度Ⅰ群において 27.2%と低かった。

困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるもの（子ども票問 22）

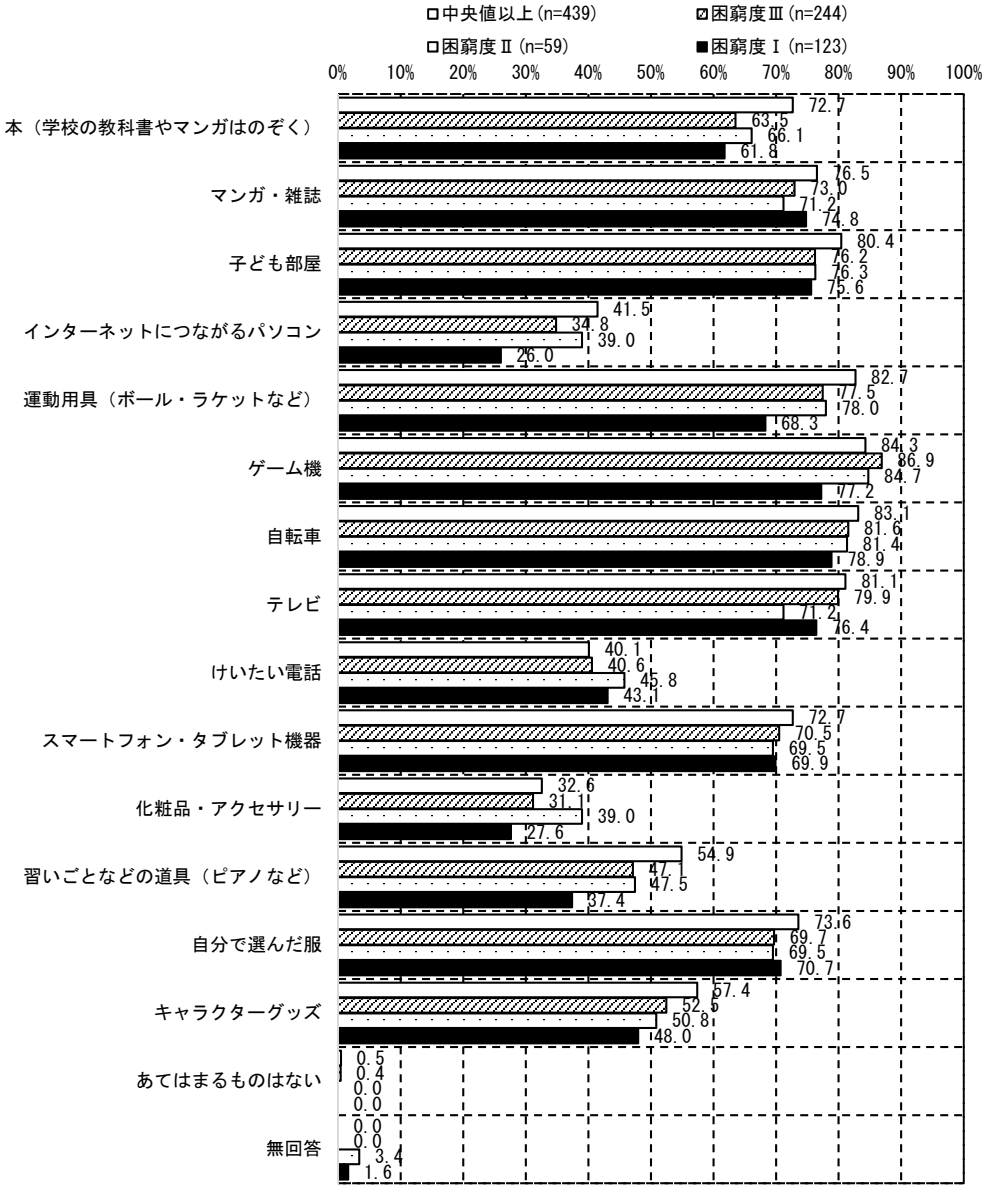

図 112. 困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるもの

困窮度別に子どもの持っているもの、使うことができるものを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、中央値以上群の数値を挙げると、「インターネットにつながるパソコン」41.5%（困窮度Ⅰ群に対して、1.6 倍）、「習いごとなどの道具（ピアノなど）」54.9%（困窮度Ⅰ群に対して、1.5 倍）、「運動用具（ボール・ラケットなど）」82.7%（困窮度Ⅰ群に対して、1.2 倍）、「キャラクターグッズ」57.4%（困窮度Ⅰ群に対して、1.2 倍）となり、中央値以上群において高い項目、すなわち困窮度Ⅰ群においては低い項目が複数みられた。困窮度が高く、これらを持っていなかったり、使ったりできないことは、子どもの生活や将来に影響を及ぼす可能性がある。

困窮度別に見た、経済的な理由による経験の該当数の平均（保護者票問 7）

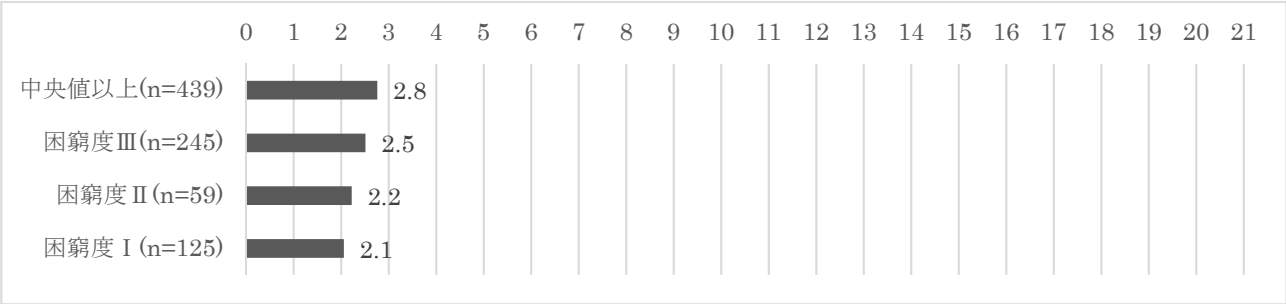

図 113. 困窮度別に見た、経済的な理由による経験の該当数の平均

経済的な理由による経験として示した 21 個の項目のうち、該当すると回答された数について、困窮度別に平均値を算出した。その結果、困窮度の高さに関係なく、経済的な理由による経験の該当数は２～３個であることがみられた。

困窮度と経済的な理由による経験の該当数についてさらに詳細に検討した結果、該当なし（どれにもあてはまらない）、１～６個に該当、７個以上に該当、の３群に分けることができた。図 159 および図 161 では、これらの結果と体や気持ちで気になることとの関連を示している。これは、最低限度の生活に必要なものの１つである健康を、所得を基に計算される困窮度だけでなく、具体的な充足の程度と関連して把握するためである。

困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験の該当数の平均（保護者票問 13）

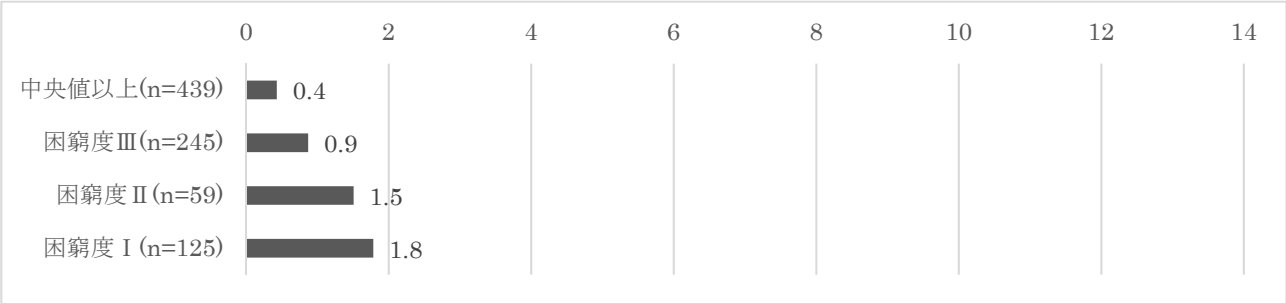

図 114. 困窮度別に見た、子どもへの経済的な理由による経験の該当数の平均

子どもに関して経済的な理由による経験として示した 14 個の項目のうち、該当すると回答された数について、困窮度別に平均値を算出した。

その結果、困窮度が高くなるにつれ、経済的な理由で子どもにできなかったことの該当数は多くなっていることがみられた。

困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるものの該当数の平均（子ども票問 22）

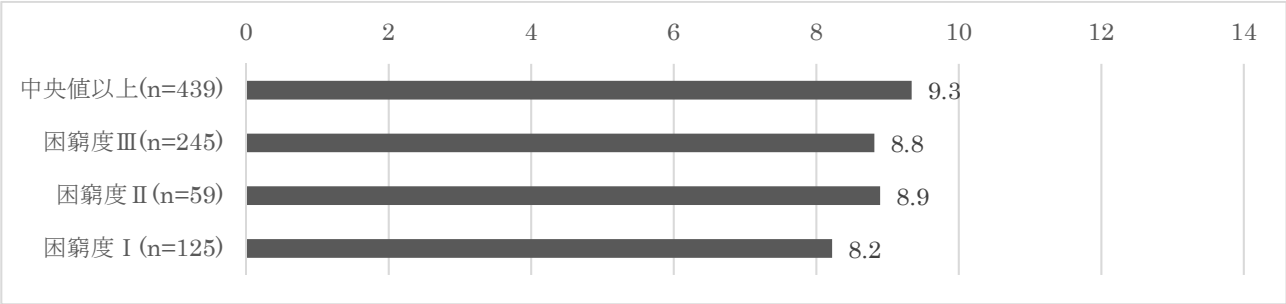

図 115. 困窮度別に見た、持っているもの、使うことができるものの該当数の平均

子どもの持っているもの、使うことができるものとして示した 14 個の項目のうち、該当すると回答された数について、困窮度別に平均値を算出した。
その結果、困窮度によって子どもの持ちもの、使えるものの該当数は困窮度が高くなるにつれてやや少なくなる傾向にある。

困窮度別に見た、世帯員の構成（保護者票問 3-2 より）

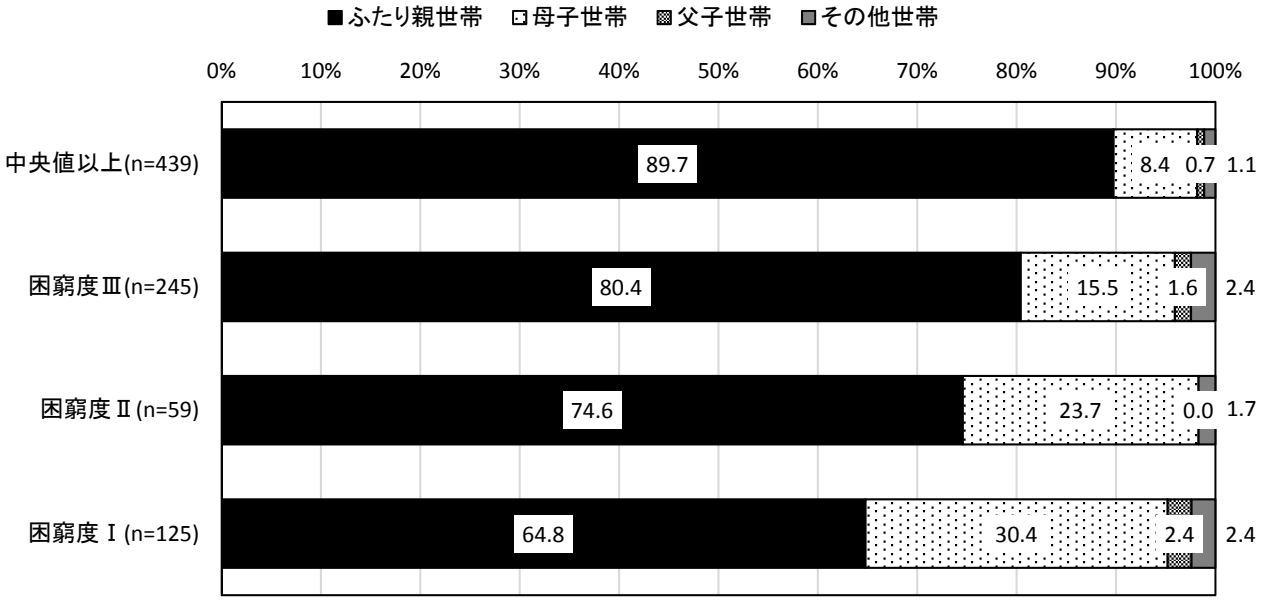

図 116. 困窮度別に見た、世帯員の構成

困窮度別に世帯員の構成を見ると、「ふたり親世帯」と回答したのは，中央値以上群が 89.7%であるのに対して、困窮度Ⅰ群は 64.8%だった。また、「母子世帯」と回答したのは、中央値以上群が 8.4%であるのに対して、困窮度Ⅰ群は 30.4%だった。

世帯構成別に見た家計状況（保護者票問 6-1）

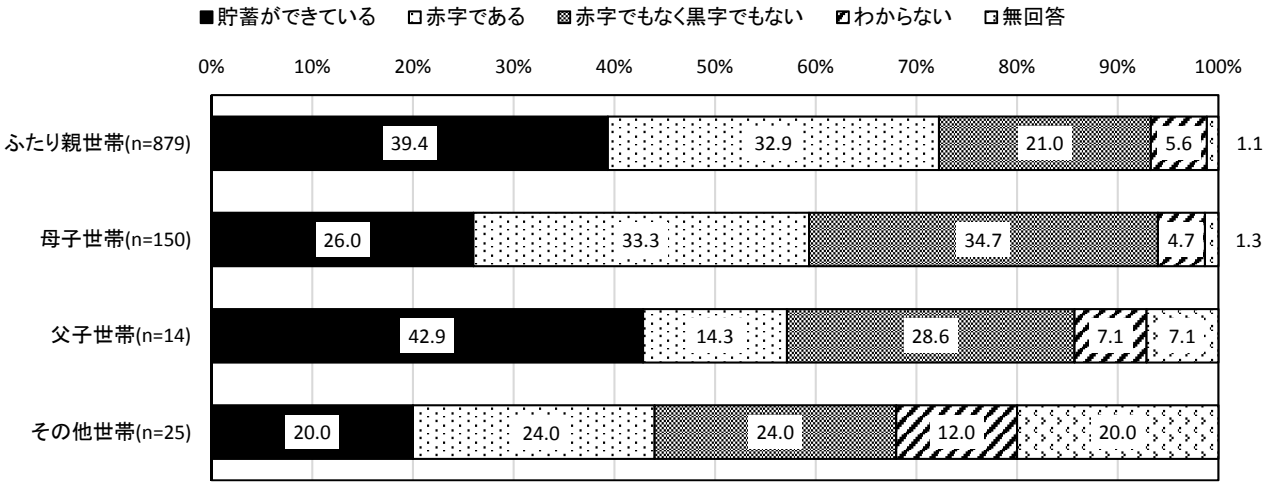

図 117. 世帯構成別に見た家計状況

世帯構成別に家計状況を見ると、「貯蓄ができている」と回答したのは、ふたり親世帯では 39.4%であるのに対して、母子世帯では 26.0%だった。また、「赤字である」と回答したのは、ふたり親世帯では 32.9%であるのに対して、母子世帯では 33.3%だった。

困窮度別に見た、介護または介助の必要な方（保護者票問 3-1-2）

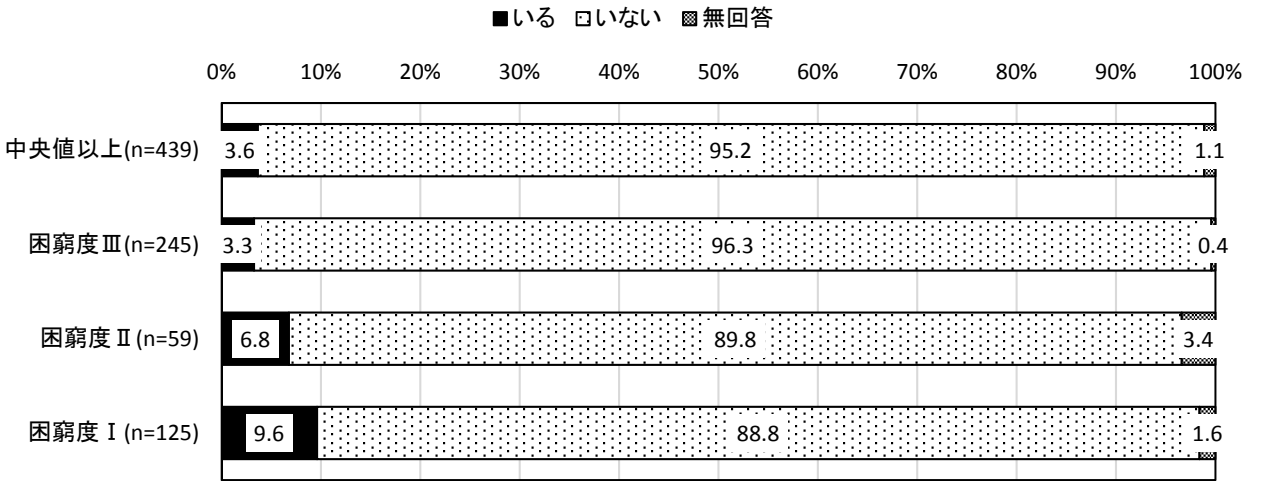

図 118. 困窮度別に見た、介護または介助の必要な方

困窮度別に介護または介助の必要な方を見ると、困窮度が高くなるにつれ、介護・介助の必要な方がいる割合が高くなっている。

困窮度別に見た、子どもの人数（保護者票問 3-1-3）

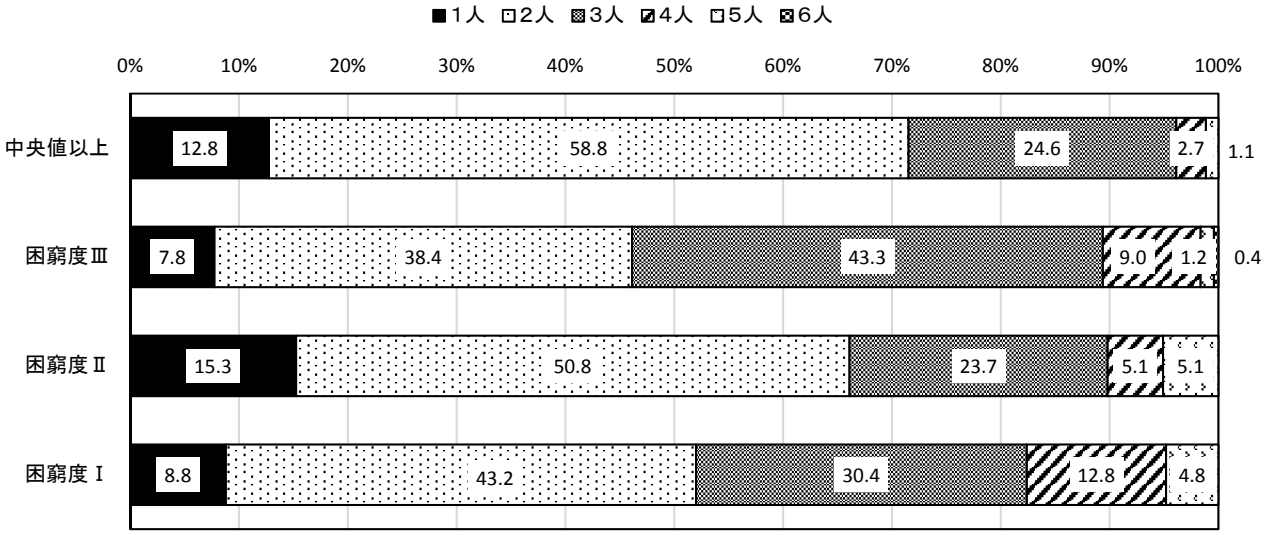

図 119. 困窮度別に見た、子どもの人数

困窮度別に子どもの人数を見ると、中央値以上群において 3 人以上が 28.4%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では、48.0%と高くなっている。

困窮度別に見た住居（保護者票問 4）

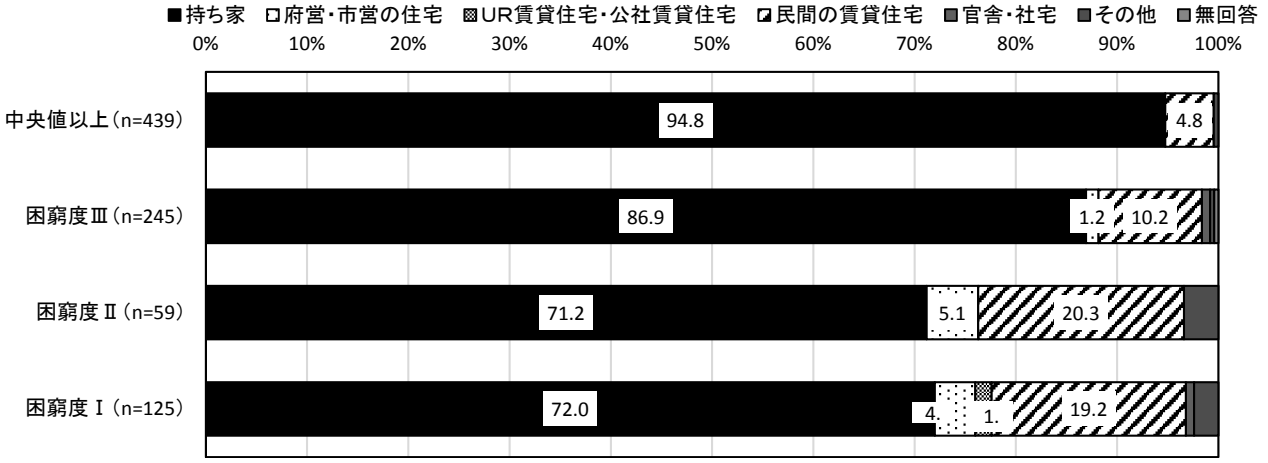

図 120. 困窮度別に見た住居

困窮度別に住居を見ると、困窮度が高まるにつれ、持ち家の保有率は低くなっている。中央値以上群では、「持ち家」と回答した割合は 94.8%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では、72.0%にとどまっている。

困窮度別に見た、自家用車の所有（保護者票問 5）

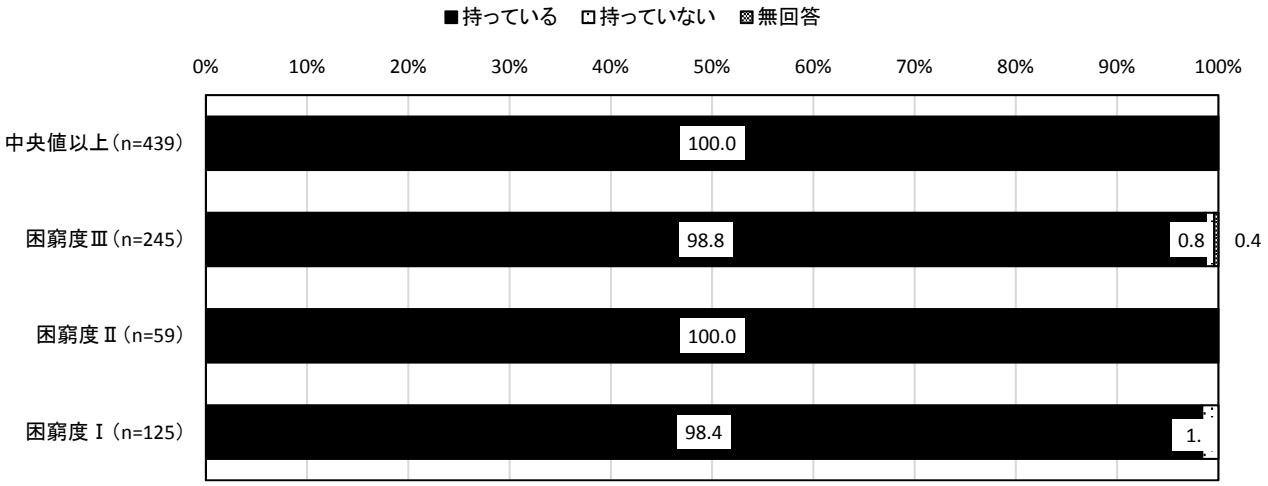

図 121. 困窮度別に見た、自家用車の所有

困窮度別に自家用車の所有を見ると、困窮度と車の所有率に差は見られなかった。

困窮度別に見た家計状況（保護者票問 6-1）

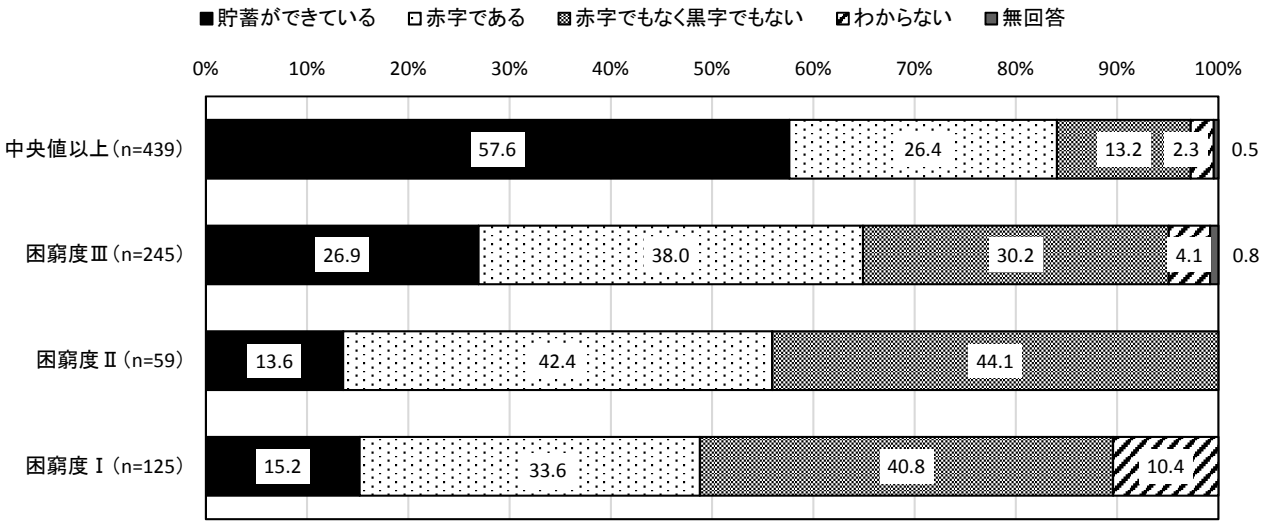

図 122. 困窮度別に見た家計状況

困窮度別に家計の状況を見ると、困窮度が高まるにつれて、「貯蓄ができている」と回答する割合が低くなる傾向があり、逆に、「赤字である」と回答する割合が高くなる傾向がある。中央値以上群では、「赤字である」と回答した世帯の割合は、26.4%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では、33.6%であった。

困窮度別に見た、子どものための貯蓄（保護者票問 6-3）

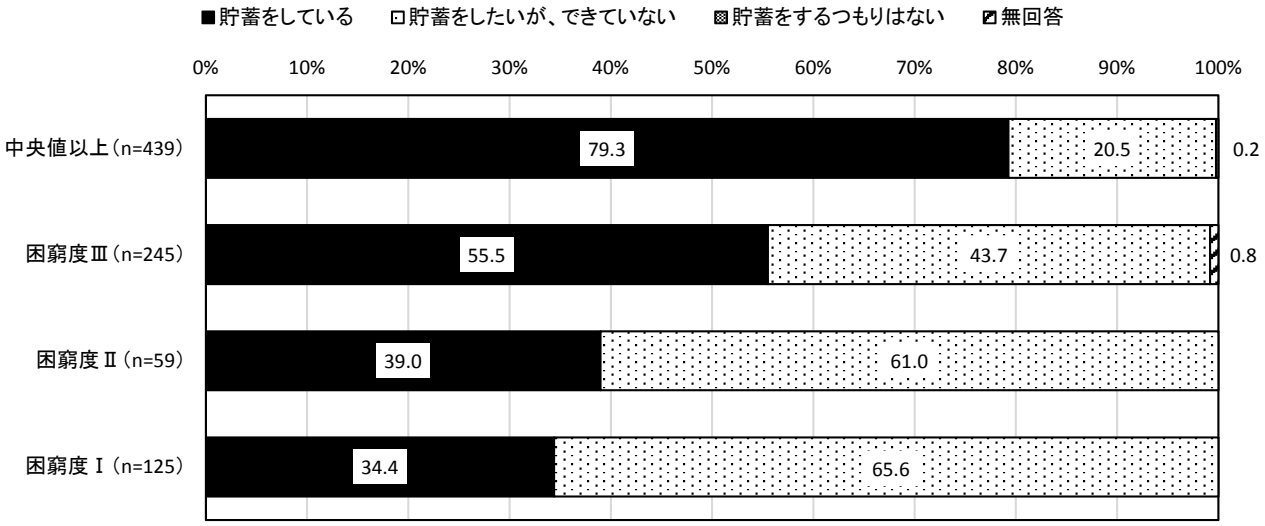

図 123. 困窮度別に見た、子どものための貯蓄

困窮度別に子どものための貯蓄を見ると、困窮度が高まるにつれ、「貯蓄をしたいが、できていない」という回答の割合が高くなっている。中央値以上群では、「貯蓄をしている」と回答する割合が 79.3%を占めたが、困窮度Ⅰ群では 34.4%にとどまり、「貯蓄をしたいが、できていない」と回答する割合は 7 割弱にのぼる。

困窮度別に見た、おこづかいの金額分布（子ども票問 17-1）

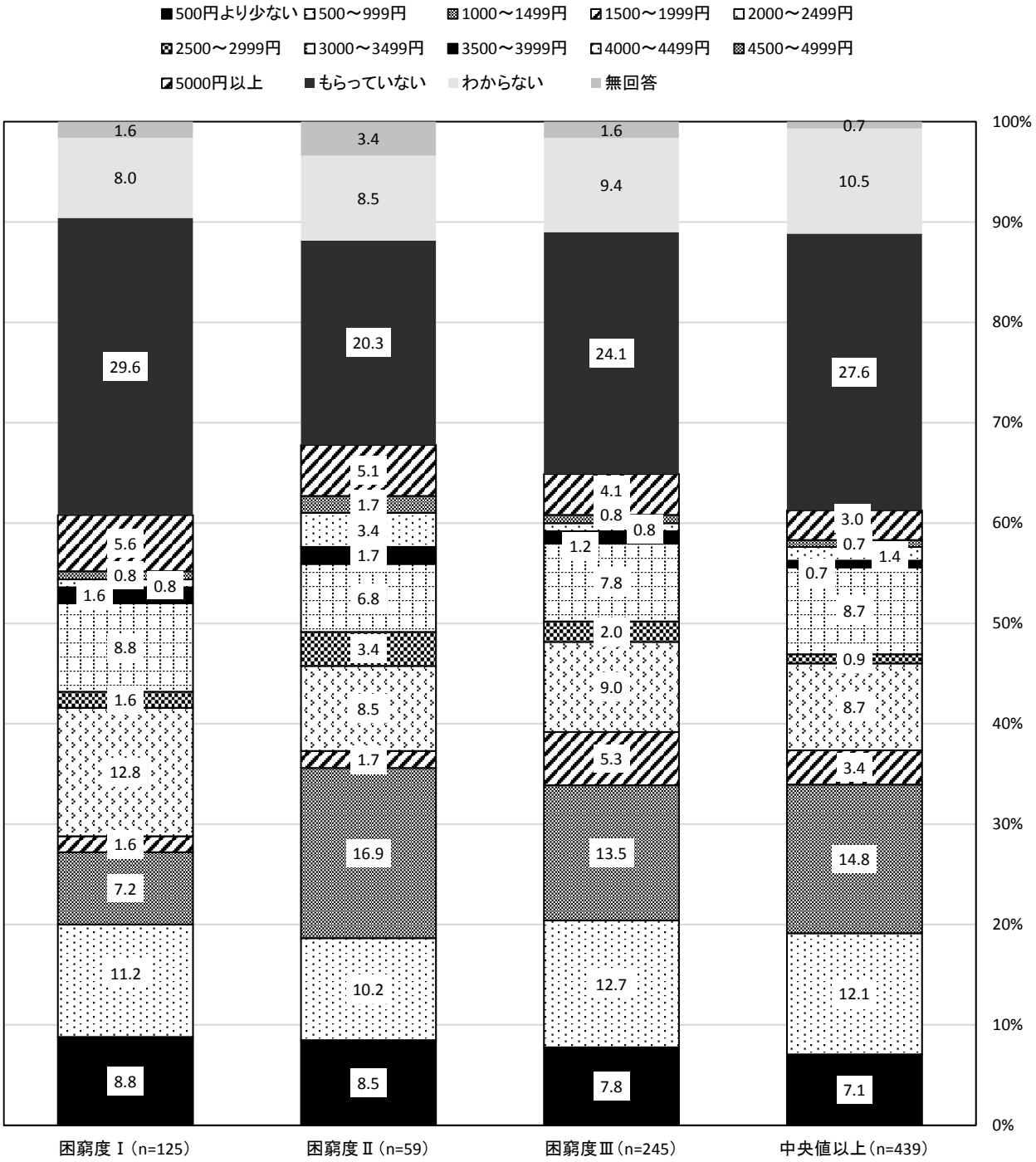

図 124. 困窮度別に見た、おこづかいの金額分布

困窮度別におこづかいの金額分布を見ると、困窮度Ⅰ群において、「もらっていない」と回答した割合が若干高かった。おこづかいの金額は、必要な物を親に購入してもらっているかなどの詳細をみる必要がある。

困窮度別に見た、おこづかいの使い方（子ども票問 17-3）

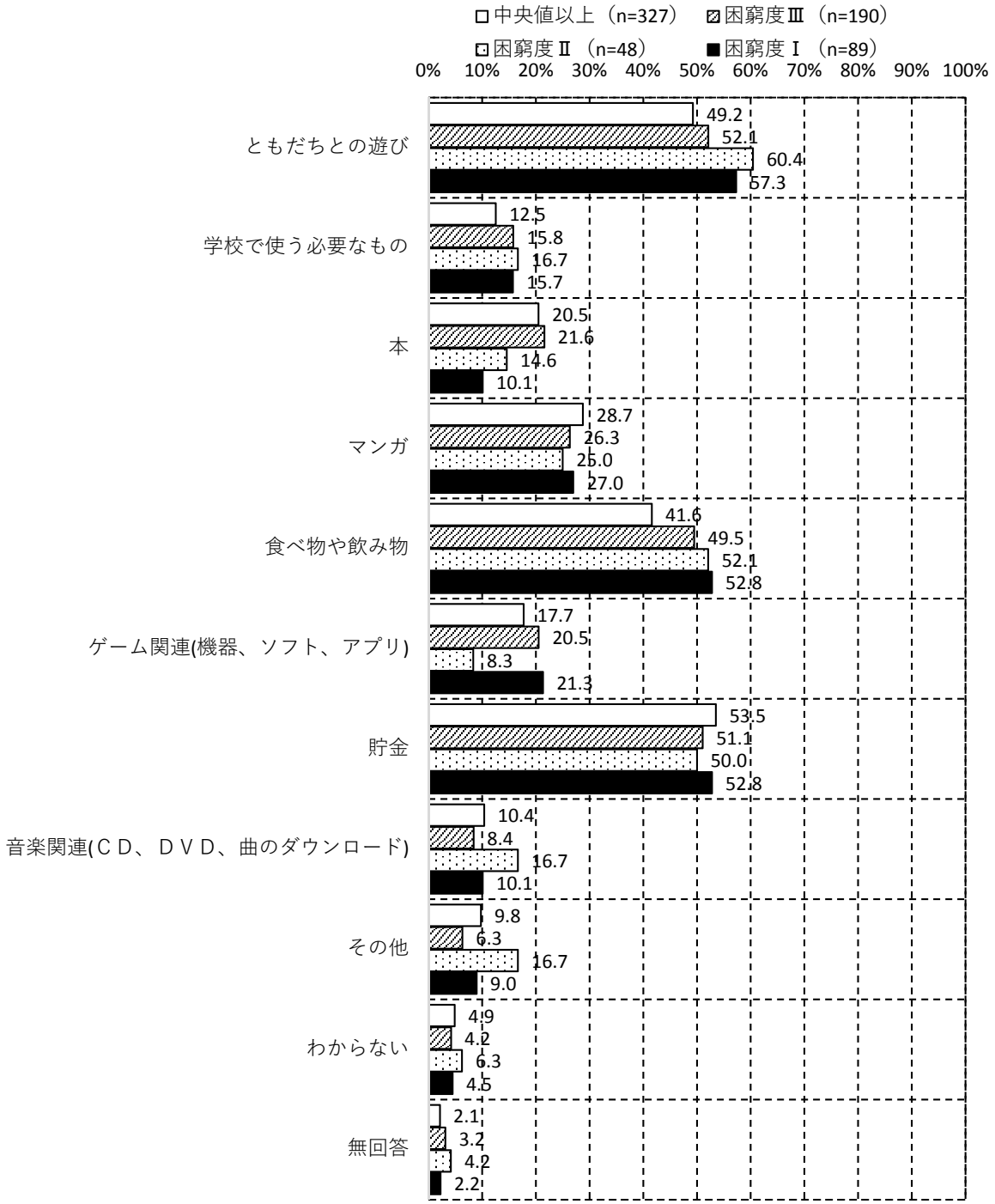

図 125. 困窮度別に見た、おこづかいの使い方

困窮度別におこづかいの使い方を見ると、「本」は困窮度Ⅰ群が最も低くなっている。困窮度が高くなるにつれて、「食べ物や飲み物」が高くなっている。

＜経済状況に関する考察＞

経済的理由で生じた生活上の困難について、「通常であれば可能な生活」を基準として設定された質問項目の「どれにもあてはまらない」回答者の割合は、中央値以上群で 41.9%であったが、困窮度Ⅰ群では 5.6%であったように、困窮度が増すほど、経済的理由による生活上の困難が増していることがうかがえた。特徴的なこととして、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰの群では、各種料金の支払いに困難があることが確認された。例えば困窮度Ⅰの群では、「国民年金の支払いが滞ったことがある」18.4%（中央値以上群に対して、40.4 倍）、「敷金・保証金等を用意できないので、住み替え・転居を断念した」4.8%（中央値以上群に対して、21.1 倍）、「電話（固定・携帯）などの通信料の支払いが滞ったことがある」12.8%（中央値以上群に対して、18.7 倍）、「国民健康保険料の支払いが滞ったことがある」20.8%（中央値以上群に対して、18.3 倍）、「家賃や住宅ローンの支払いが滞ったことがある」9.6%（中央値以上群に対して、14.1 倍）といった項目が高かった。これらは、国民年金という将来の生活に関するもの、国民健康保険料という健康に関するもの、敷金・保証金、家賃、住宅ローンといった住まいに関するもの、さらには、電話などの通信料という周囲の人々とのコミュニケーションに関するものである。いずれも現代の日本社会で基本的な生活を送る上でなくてはならないものであり、こうした基本的な生活に関する保護者の困窮が示された。

また、子どもの生活が、世帯の経済状況の影響を受けていることが示された。困窮度Ⅰ群では、「子どもにお年玉をあげることができなかった」8.0%（中央値以上群に対して、11.7 倍）、「子どもにおこづかいを渡すことができなかった」19.2%（中央値以上群に対して、6.5 倍）といった子どもに対する直接的な経済的影響が見られた。さらには、子どもの成長に重要であると思われる多様な「体験」について、所得階層別の群間で格差があることが示された。例えば、困窮度Ⅰ群では、「子どものための本や絵本が買えなかった」8.0%（中央値以上群に対して、17.5 倍）、「子ども会、地域の行事（祭りなど）の活動に参加することができなかった」8.8%（中央値以上群に対して、7.7 倍）、「子どもの誕生日を祝えなかった」1.6%（中央値以上群に対して、7.0 倍）といったことを子どもが体験する貴重な機会が、中央値以上群と比して少ないという実態が明らかとなった。

自由記述で経済状況に関する回答をみると、「毎日の生活が苦しい。主人が固定給ではなく、日給でボーナスもない。（中略）国民健康保険が高すぎる。支払いが滞り、給料の差し押さえの通知が届くと毎日不安で眠れなく、息苦しくなる」のように、日々の生活の厳しさがうかがえられる。他方、子どもの進学への不安に関する内容も多くみられた。例えば、「子ども二人育てていくのにいくら必要なのか、自分たちの先々いくら必要なのか、働いても働いても日々お金の不安がある」「生活が切迫しているわけではありませんが、けっして余裕があるわけでもないので、将来子どもが進みたいと希望する進路に進める様に費用面での援助をちゃんとしてあげられるか心配になることがあります」。このように、日々の生活では困窮していない家庭においても、将来の進学費用について経済的な不安を抱えていることがわかる。

（２）家庭状況（制度等）

困窮度別に見た児童手当（保護者票問 27-3-1）

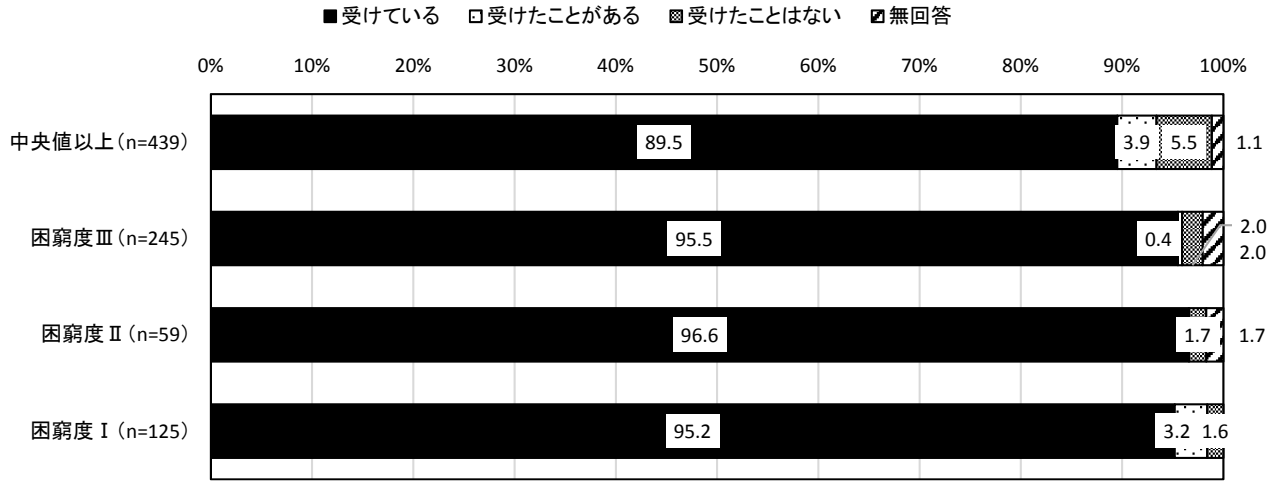

図 126. 困窮度別に見た児童手当

児童手当は多くの世帯が受給していた。困窮度別に児童手当の受給率を見ると、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ～Ⅲ群において、多くの世帯（95.2%～96.6%）が「受けている」と回答した。

困窮度別に見た就学援助費（保護者票問 27-3-2）

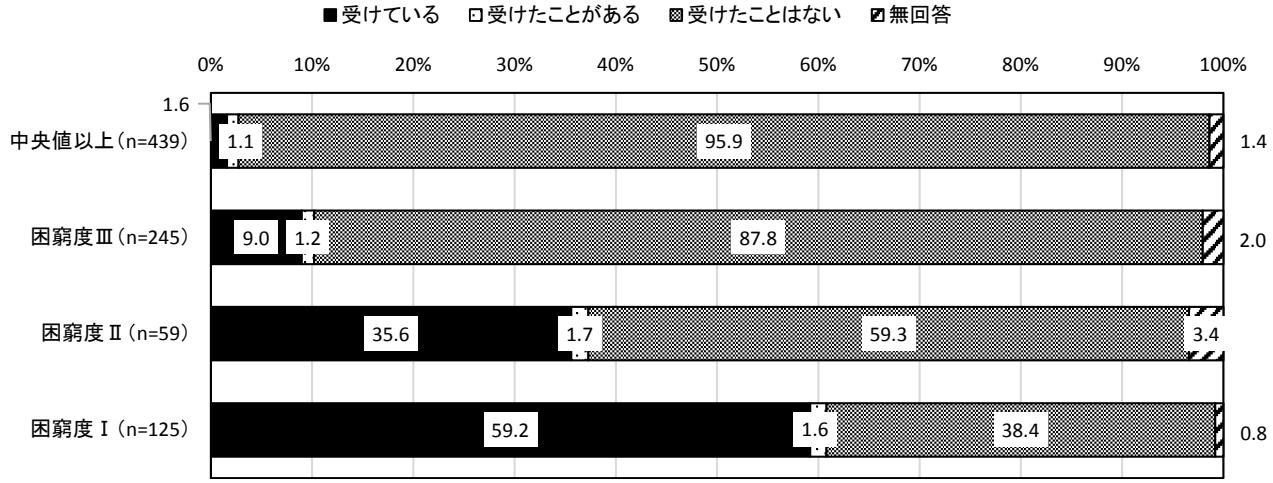

図 127. 困窮度別に見た就学援助費

困窮度別に就学援助費の受給率を見ると、困窮度が高まるにつれ、「受けている」の割合が高くなっている。

困窮度別に見た児童扶養手当（保護者票問 27-3-3）

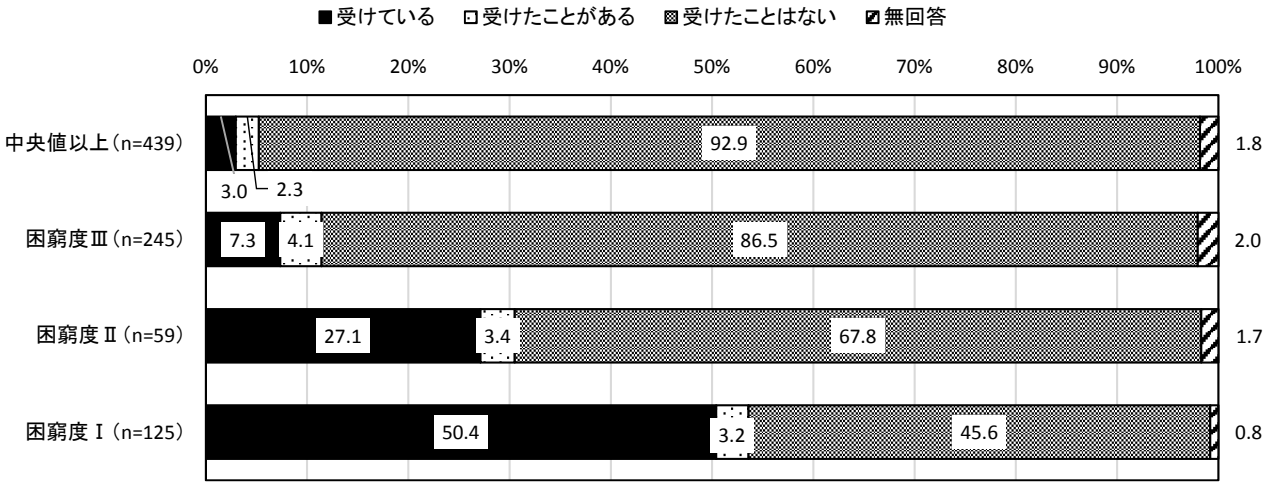

図 128. 困窮度別に見た児童扶養手当

困窮度別に児童扶養手当の受給率を見ると、困窮度が高まるにつれ、「受けている」の割合が高くなっている。

困窮度別に見た生活保護（保護者票問 27-3-5）

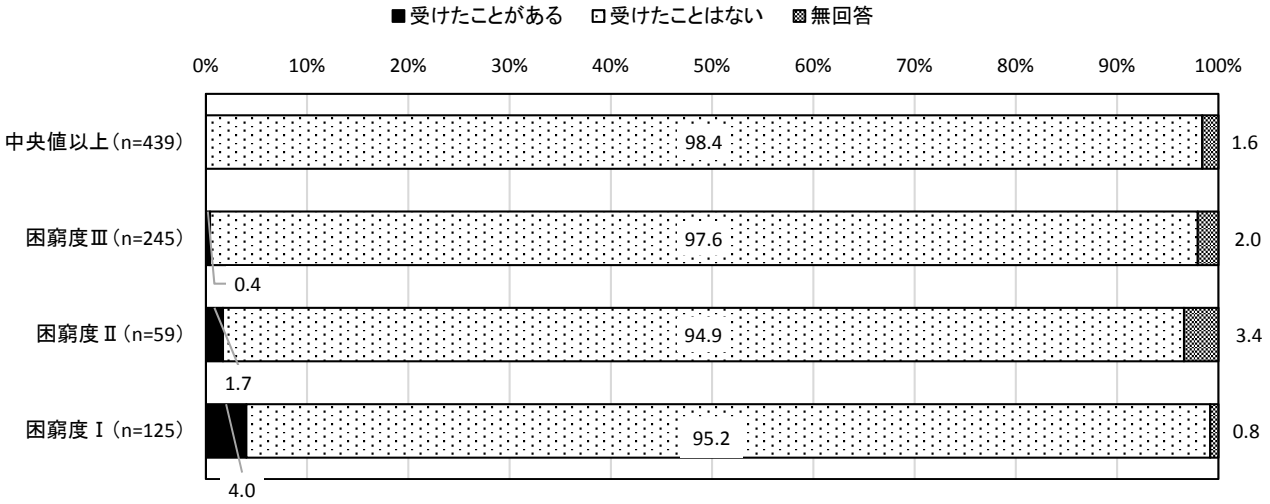

図 129. 困窮度別に見た生活保護

困窮度別に生活保護の受給率を見ると、困窮度Ⅰ群においては「受けたことがある」と回答した人は4.0%であった。

困窮度別に見た公的年金（遺族年金、障がい年金）（保護者票問 27-3-7）

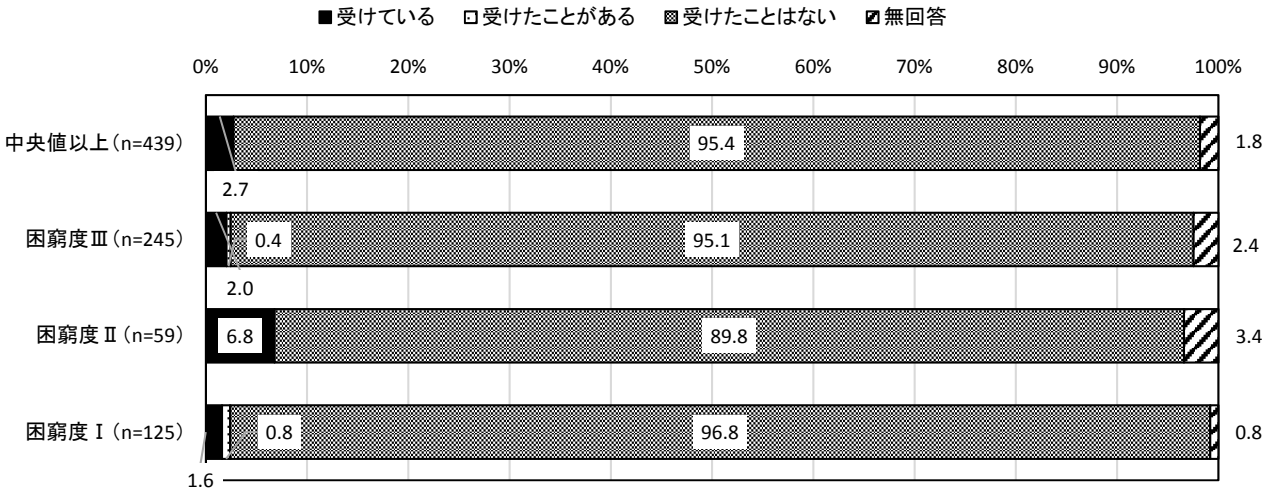

図 130. 困窮度別に見た公的年金（遺族年金、障がい年金）

困窮度別に遺族年金や障がい年金といった公的年金の受給率を見ると、困窮度 II 群においては「受けたことはない」と回答した割合が 89.8%と若干少なくなっているものの、困窮度による大きな差は見られない。

困窮度別に見た養育費（保護者票問 27-3-9）

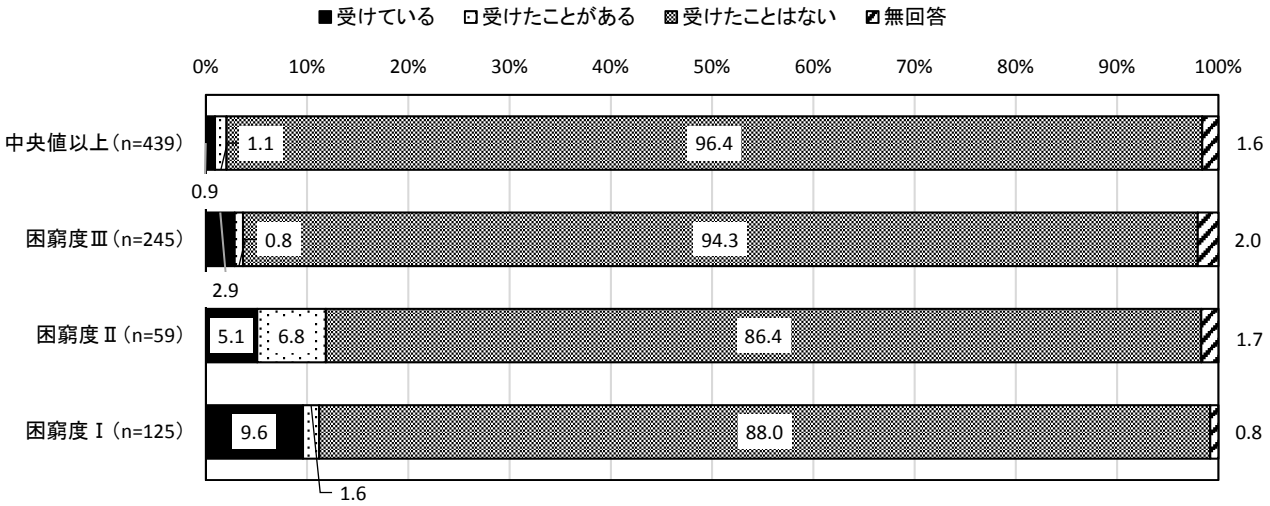

図 131. 困窮度別に見た養育費

困窮度別に養育費の受給率を見ると、困窮度Ⅰ群においては「受けている」と回答した人は 9.6%であった。

困窮度別に見た、初めて親となった年齢（保護者票問 19）

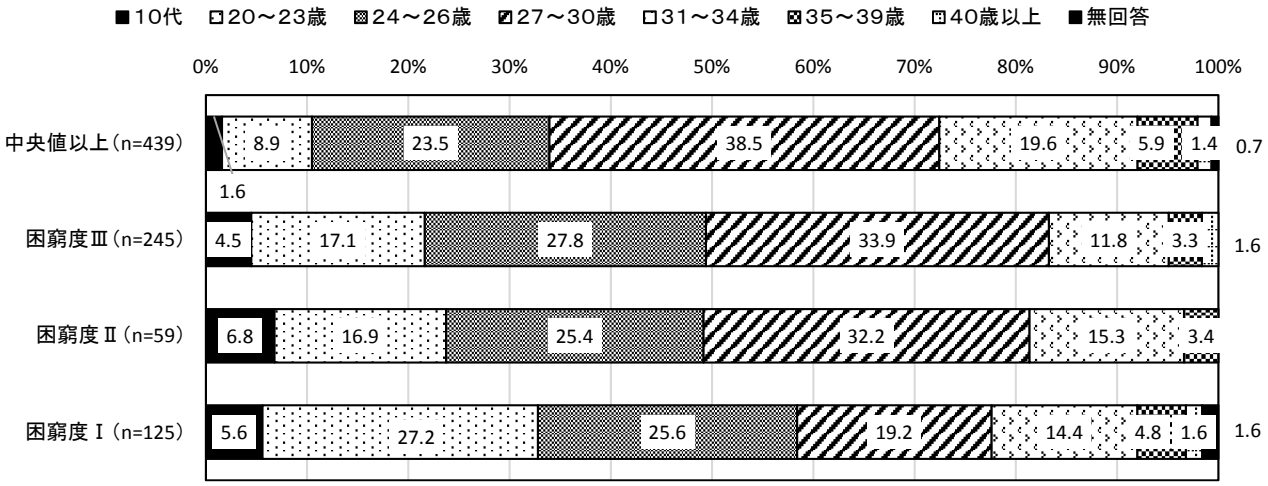

図 132. 困窮度別に見た、初めて親となった年齢

全ての回答者を対象に、困窮度別に初めて親となった年齢を見たところ、困窮度Ⅰ～困窮度Ⅲ群では、中央値以上群に比べて、10 代で初めて親となったと答えた割合がやや高い。

困窮度別に見た、初めて親となった年齢（保護者票問 19）※母親が回答者の場合に限定

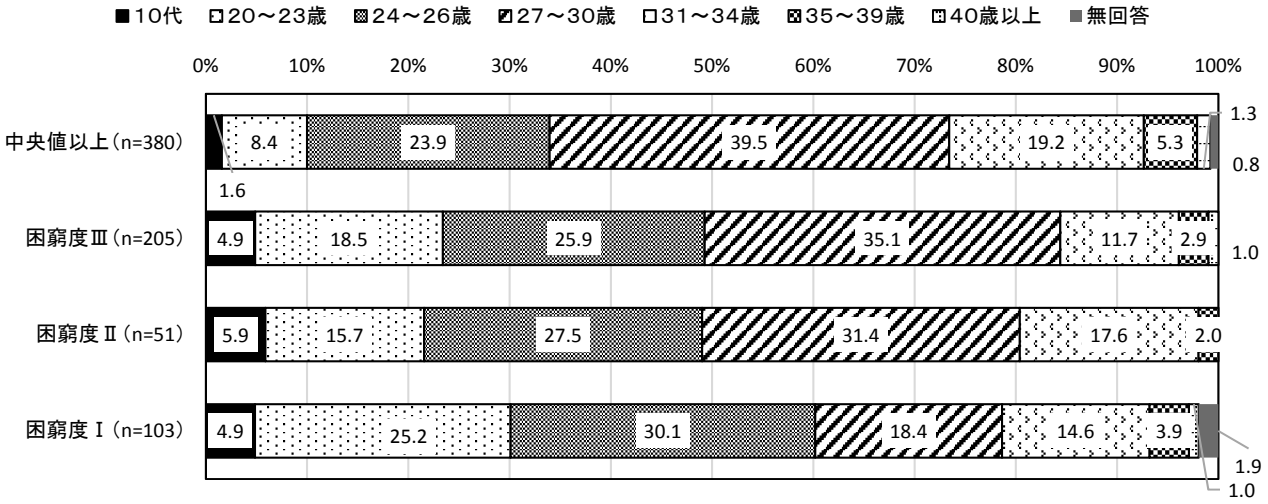

図 133. 困窮度別に見た、初めて親となった年齢

母親回答者を対象として、困窮度別に初めて親となった年齢を見た。中央値以上群と比して、中央値以下の群では、10 代や 20 代初めの頃に初めて親となったと答えた割合が高くなっている。若くして母親となった人の中には、経済的な問題を抱えている人がいる可能性がある。

初めて親となった年齢別に見た、母親の最終学歴（保護者票問 19×保護者票問 8）
※母親が回答者の場合に限定

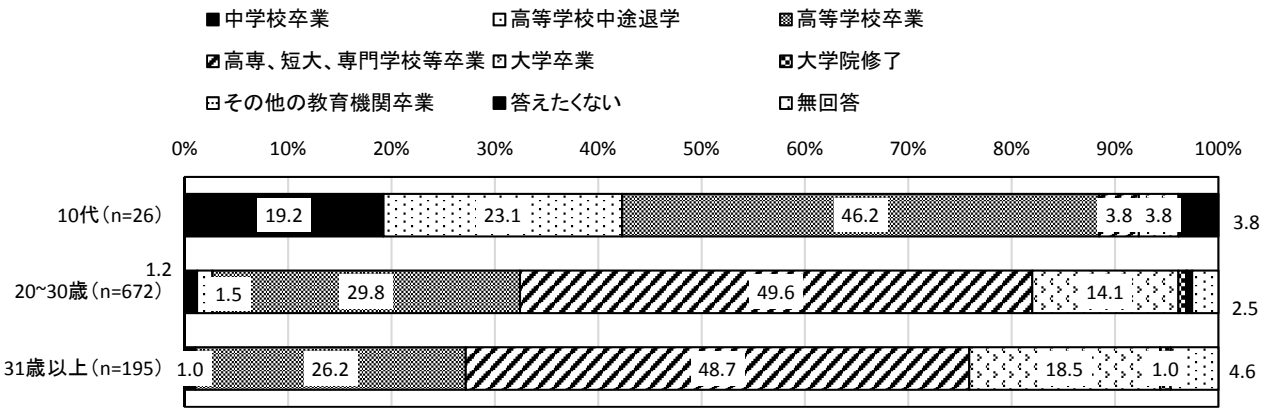

図 134. 初めて親となった年齢別に見た、母親の最終学歴

「初めて親となった年齢」を基準とし、10 代で初めて親となった 10 代群、平均出産年齢以下の年齢で初めて親となった平均以下群（20～30 歳）、平均出産年齢以上の年齢で初めて親となった平均以上群（30 歳以上）の 3 群を設けた（平均出産年齢については下記 URL を参照）。母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に母親自身の最終学歴を見ると、10 代群において「中学校卒業」または「高等学校中途退学」と回答した割合が高かった。

平均出産年齢：http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2017/29webhonpen/html/b1_s1-1-1.html

初めて親となった年齢別に見た、父親の最終学歴（保護者票問 19×保護者票問 8）
※母親が回答者の場合に限定

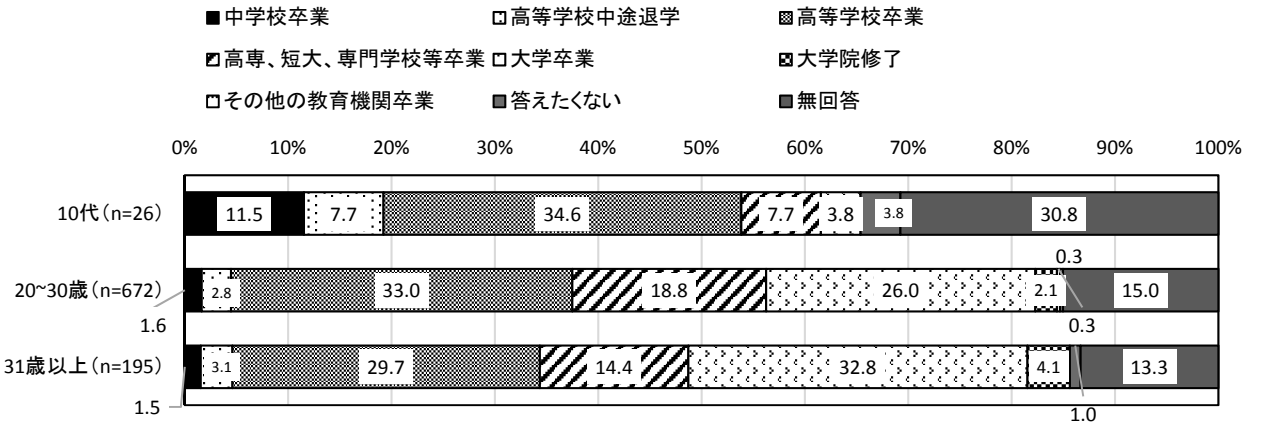

図 135. 初めて親となった年齢別に見た、父親の最終学歴

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に父親の最終学歴を見ると、10 代群において「中学校卒業」または「高等学校中途退学」と回答した割合が高かった。

初めて親となった年齢別に見た就労状況（保護者票問 19×保護者票問 9 より）
※母親が回答者の場合に限定

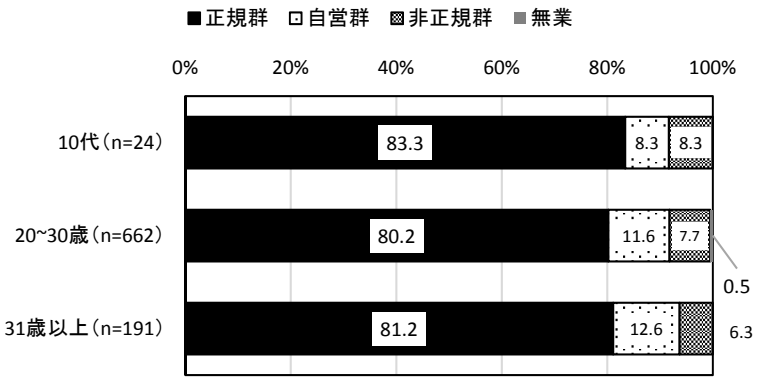

図 136. 初めて親となった年齢別に見た就労状況

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に就労状況を見た。就労状況は、選択肢を「正規群」、「自営群」、「非正規群」、「無業」に整理している。10 代群は他の群と比較して「正規群」および「非正規群」の割合が若干高かった。ただし、人数が少ないため結果の見方には注意が必要である。

初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票問 19×保護者票問 23）
※母親が回答者の場合に限定

＜橋本市＞

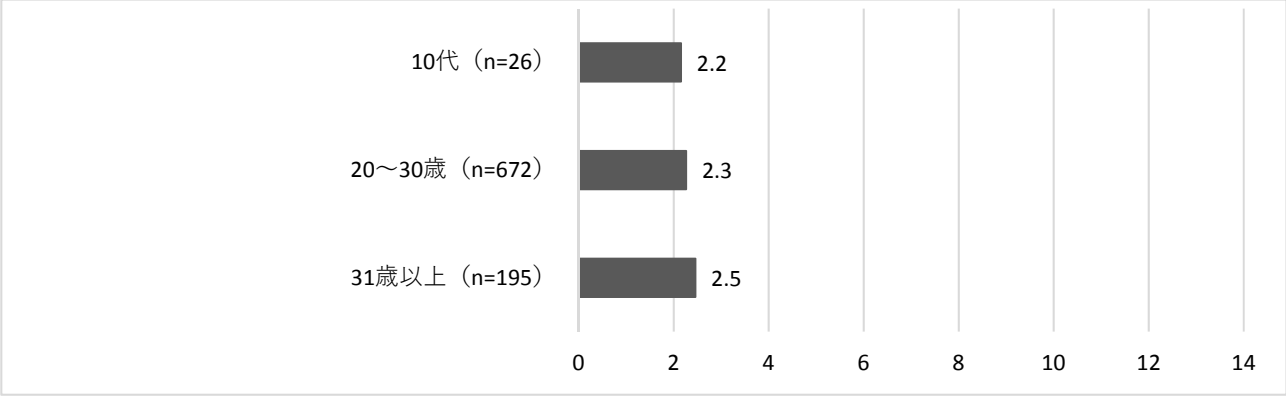

図 137. 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、年齢による差は見られなかった。

初めて親となった年齢別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと
（保護者票問 19×保護者票問 24）　※母親が回答者の場合に限定

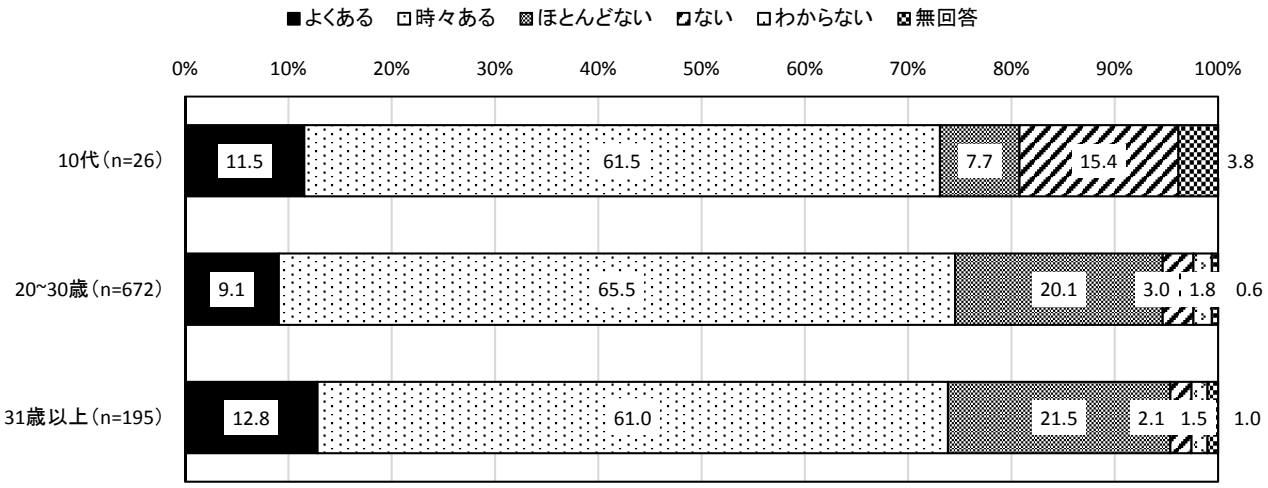

図 138. 初めて親となった年齢別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことがどの程度あるかについて見た。10 代群は、他の群と比較して、「ない」と回答した割合が高かった。10 代群は他群と比して人数が少なかった。

初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること
（保護者票問 19×子ども票問 21）　※母親が回答者の場合に限定

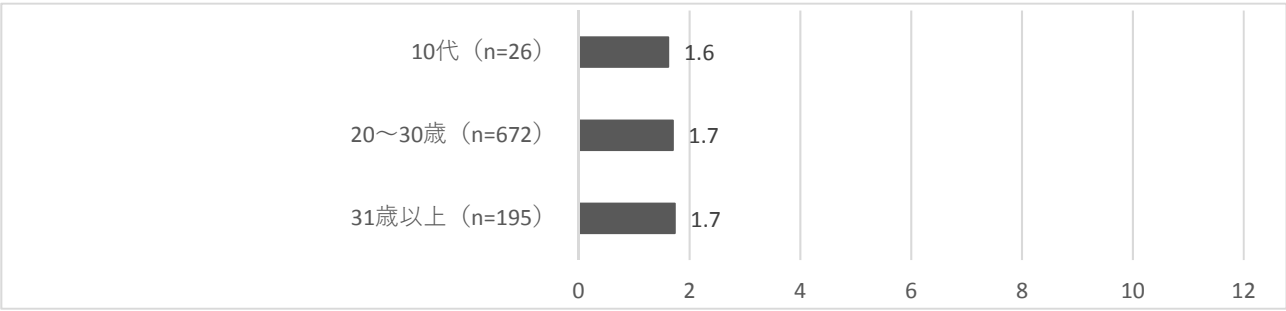

図 139. 初めて親となった年齢別に見た、自分の体や気持ちで気になること

母親回答者を対象として、初めて親となった年齢の各群別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、群間で大きな差は見られなかった。

住居別に見た家計状況（保護者票問 4×保護者票問 6-1）

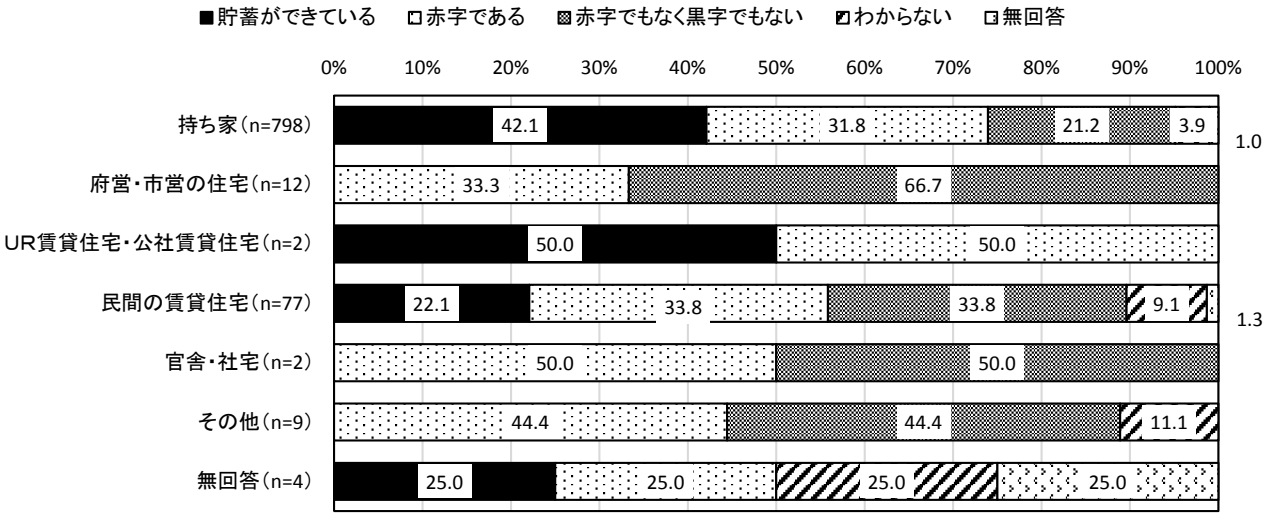

図 140. 住居別に見た家計状況

住居別に家計状況を見ると、「赤字である」と回答した割合は、UR 賃貸住宅・公社賃貸住宅（50.0%）や官舎・社宅（50.0%）、その他（44.4%）で高かったが、いずれも人数が少ないことから、詳細の分析は今後の課題としたい。

住居別に見た、子どものための貯蓄（保護者票問 4×保護者票問 6-3）

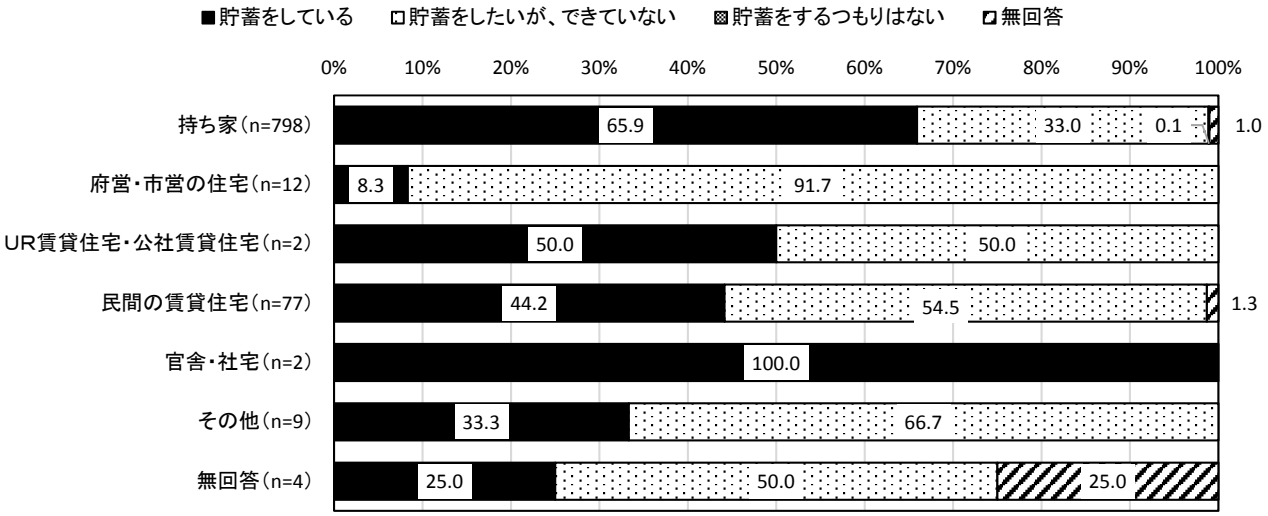

図 141. 住居別に見た、子どものための貯蓄

住居別に子どものための貯金を見ると、「貯蓄をしたいが、できていない」と回答した割合は、府営・市営の住宅（91.7%）やその他（66.7%）で高かったが、少人数のため注意が必要である。また、民間の賃貸住宅（54.5%）においても高かった。

＜家庭状況に関する考察＞

困窮状況と子どもに関連する制度の観点から、社会保障制度の利用状況について見ていくこととする。まず、児童手当は、困窮度によらず大半の世帯が受給しているものの、困窮度Ⅰ～Ⅲ群においては、児童手当の受給率が 95%を超える高い値となっている。一方、就学援助制度の利用率は、困窮度の高まりに従い高くなっているものの、最も利用率の高い困窮度Ⅰ群においても、38.4%すなわち 4 割近くの世帯によって利用されたことがないという状況である。同様に、児童扶養手当についても、利用率は、困窮度の高まりに従い高くなっているものの、最も利用率の高い困窮度Ⅰ群においても、45.6%すなわち 4 割以上の世帯によって利用されたことがないという状況である。さらに、生活保護および公的年金（遺族年金・障害年金）の受給率は、困窮度Ⅰ群においてもわずか数%にとどまっている。こうした各制度の要件は異なる基準ではあるものの、まずは制度の周知を図ることにより、困窮層がこうした制度に確実につながる仕組みを作ることが必要である。養育費については、公的な給付ではないものの、その受給率は、現在受給中の世帯と過去に受給したことのある世帯を合わせても、困窮度Ⅰ群、Ⅱ群ともに、約 1 割にとどまることから、各家庭の諸事情に配慮しつつ養育費の確保に取り組むことが必要であると考えられる。

母親が回答者の場合について、初めて親になった年齢を困窮度別に見ると、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ～Ⅲの群では、初めて親となった年齢が 10 代および 20 代初期である割合が高くなっている。他の年齢群と比して、10 代群の母親では、最終学歴が「中学校卒業」または「高等学校中途退学」の割合が高い。しかし、就労状況は年齢による差がなく、学歴および就労状況との関連は強くはないようである。他の群と比較して、10 代群は、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことが「ない」と回答した割合が高かった。10 代群は他群と比して人数が少ないことから、詳細の分析は今後の課題としたい。住居別の家計の状況や子どものための貯金は、UR 賃貸住宅などの複数の項目において人数が少ないため難しい。

自由記述における家庭状況に関する回答をみると、手当等に関する要望が多く見受けられた。例えば、「収入の額により児童扶養手当が打ち切られました。決して多い収入額ではないのですが、ギリギリの所で制限された様です。もう少し、制限額をゆるくしてほしい」や、「ひとり親に対しても援助を全くうけられません。頑張っているひとり親に対してもう少し援助があればなと思います」といったものである。また、医療費についても、「3 人目についての補助、援助が少ない。所得に応じてわずかな所で医療費補助をもらえていない。3 人目については所得関係なしに考えてほしい。少子化に対し、3 人以上を出産した家庭にはもっと手厚く対応してほしい」という回答があり、家族構成によって異なる手当ての必要性が求められている。

３－２．雇用

困窮度別に見た就労状況（保護者票問９より）

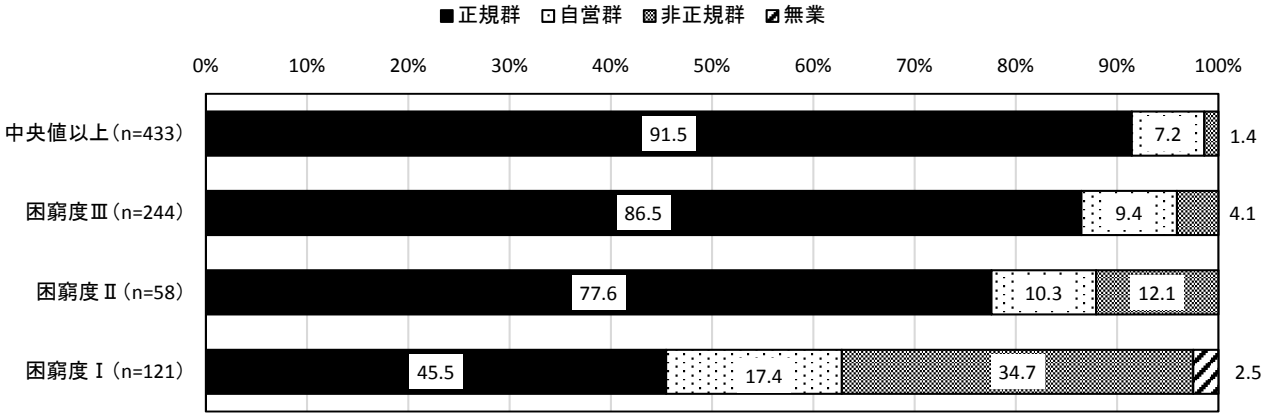

図 142. 困窮度別に見た就労状況

困窮度別に就労状況を見たところ、困窮度が高まるにつれて、「正規群」の割合が低くなり、「自営群」・「非正規群」の割合が高くなっていた。困窮度Ⅰ群においては他と比べて「非正規群」(34.7%)・「無業」(2.5%) の割合が高くなっている。

※就労形態は以下のように分類している。
父母あるいは主たる生計者に正規が含まれれば「正規群」（問９選択肢１）、
上記以外で、父母あるいは主たる生計者に自営が含まれれば「自営群」（問９選択肢４）、
上記以外で、父母あるいは主たる生計者に非正規が含まれれば「非正規群」（問９選択肢２、３）、
上記以外で、誰も働いていなければ（問９選択肢６、７）無業。
上記以外がその他　となる。

困窮度別に見た、母親の最終学歴（保護者票問 8）

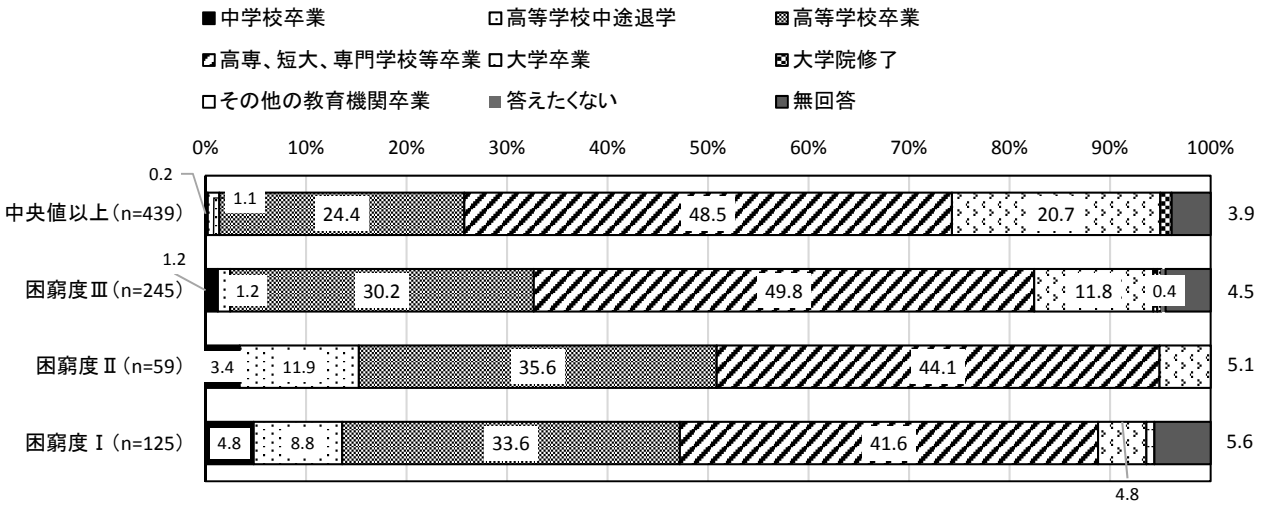

図 143. 困窮度別に見た、母親の最終学歴

母親の最終学歴を困窮度別に見たところ、困窮度が高まると、「中学校卒業」、「高校学校中途退学」の割合が高い傾向がある。特に、他群に比して、困窮度Ⅰ、II 群では、「大学卒業」の割合が低くなっている。

困窮度別に見た、父親の最終学歴（保護者票問 8）

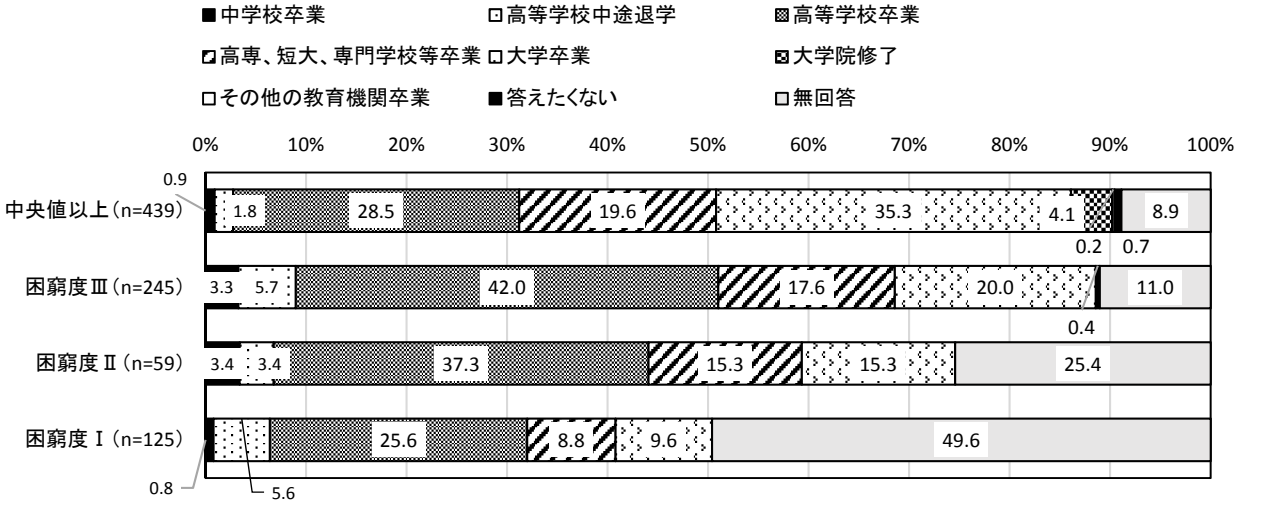

図 144. 困窮度別に見た、父親の最終学歴

困窮度別に父親の最終学歴を見ると、困窮度が高まるにつれ、「大学卒業」の割合が低くなっている。また、困窮度Ⅰ群では無回答の割合も 49.6%と高かった。

母親の最終学歴別に見た就労状況（保護者票問 8×保護者票問 9 より）

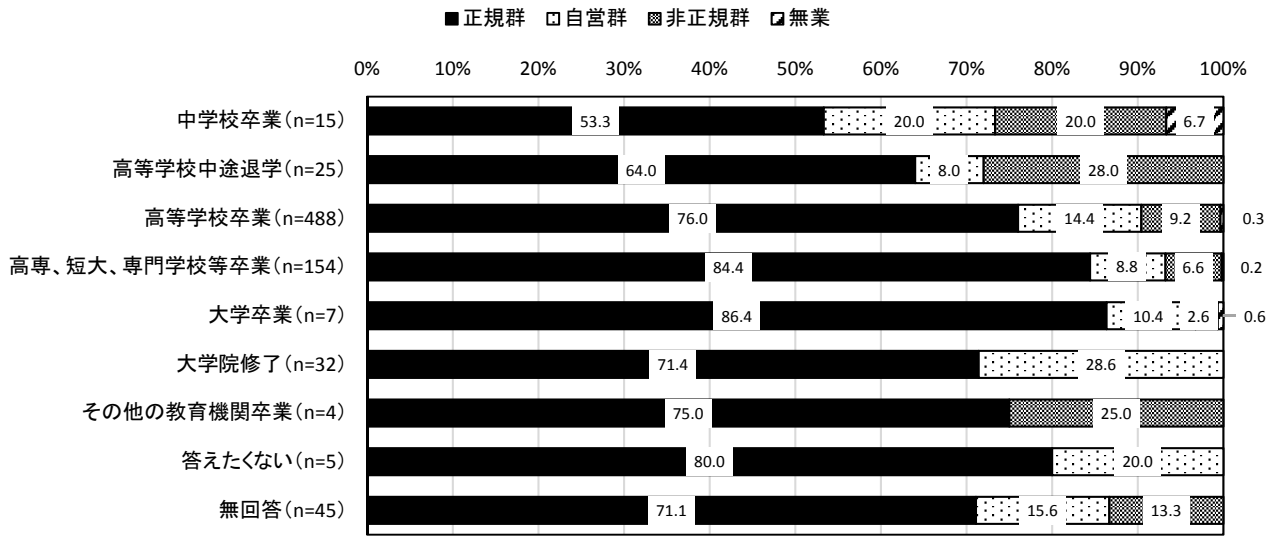

図 145. 母親の最終学歴別に見た就労状況

母親の最終学歴別に就労状況を見たところ、「大学卒業」までは、「母親の最終学歴」が高くなるにつれて「正規群」の割合が高くなっている。

父親の最終学歴別に見た就労状況（保護者票問 8×保護者票問 9 より）

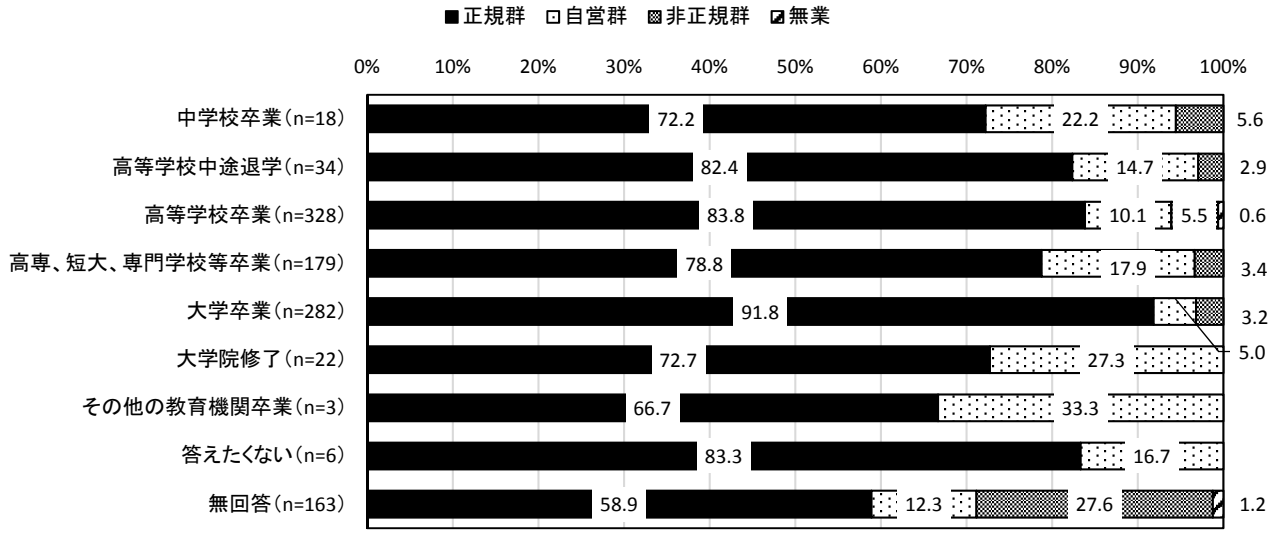

図 146. 父親の最終学歴別に見た就労状況

父親の最終学歴別に就労状況を見ると、回答に応じた群では、どの群でも「正規群」と「自営群」が大半を占め、「非正規群」は少なかった。一方、無回答の群では「非正規」の割合が高い。

世帯構成別に見た就労状況（保護者票問 9 より）

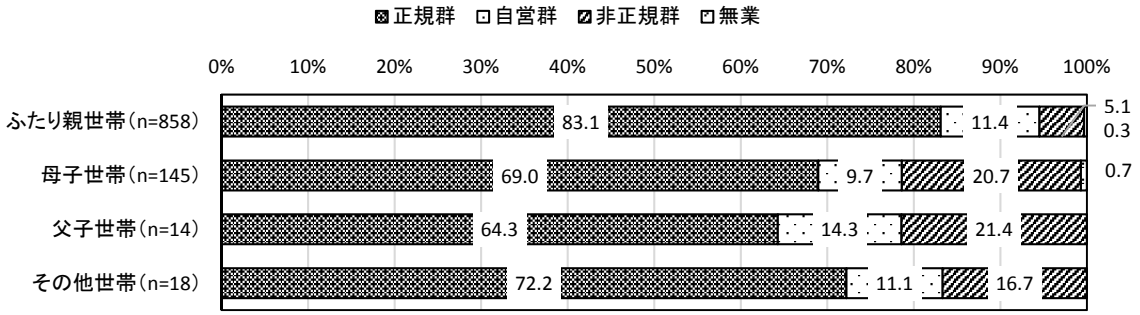

図 147. 世帯構成別に見た就労状況

世帯構成別に就労状況を見た。「ふたり親世帯」は「正規群」の割合が 83.1%であった。「母子世帯」は 69.0%、「父子世帯」は 64.3%と低くなった。「非正規群」は、「父子世帯」では 21.4%、「母子世帯」では 20.7%であった。

困窮度別に見た、生計の支えとなる人（保護者票問 27-2）

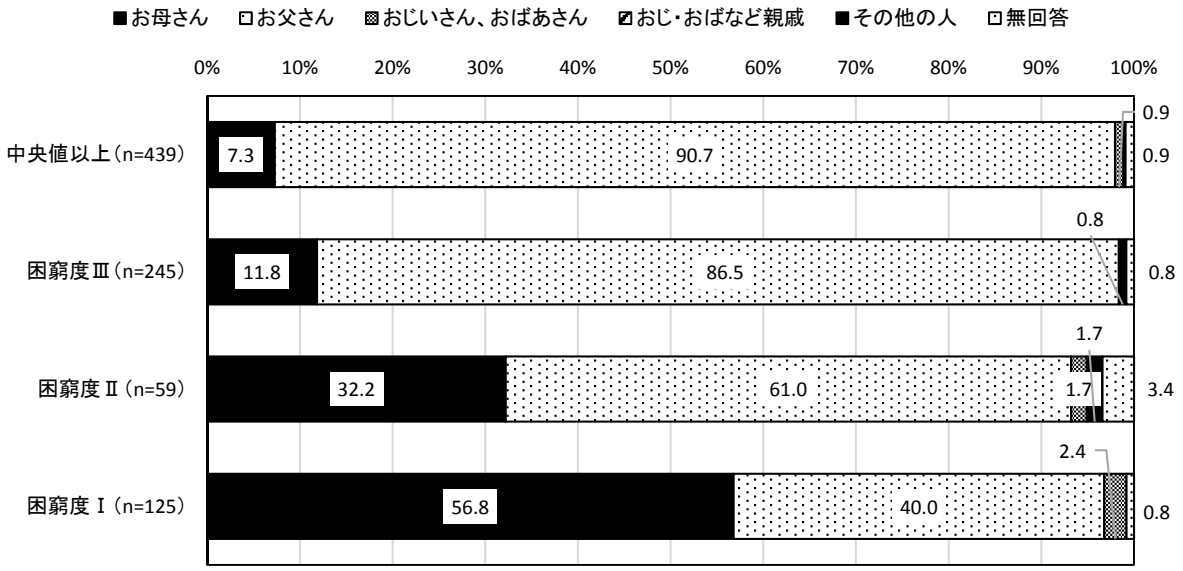

図 148. 困窮度別に見た、生計の支えとなる人

困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では「お父さん」という回答が多く、90.7%である。困窮度が高まるにつれ、「お母さん」という回答が多くなっている。困窮度Ⅱ群では「お母さん」という回答は 32.2%だが、困窮度Ⅰ群では 56.8%である。

就労状況別に見た家計状況（保護者票問 6-1）

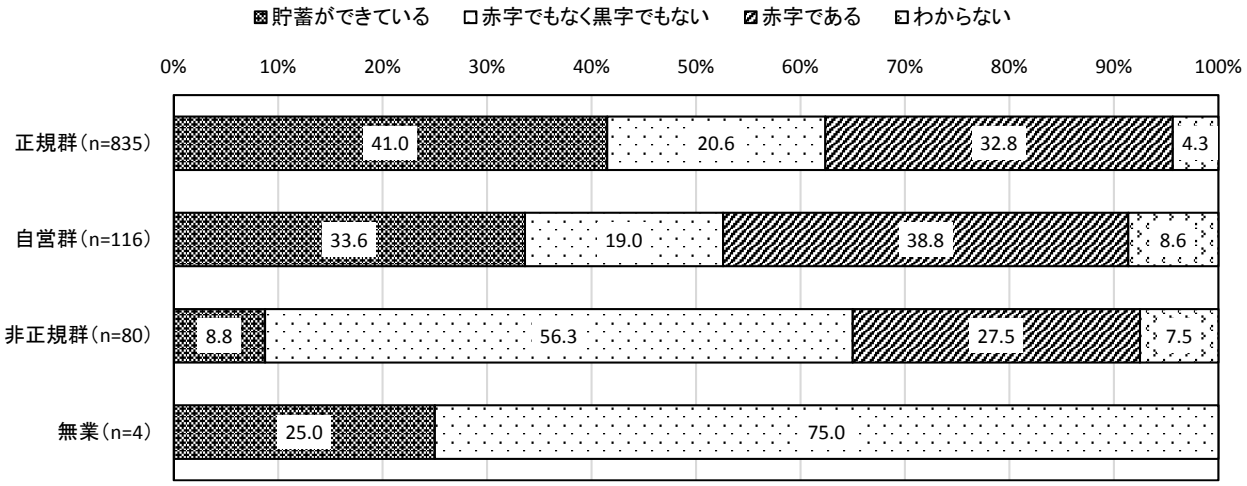

図 149. 就労状況別に見た家計状況

就労状況別に家計状況を見た。「正規群」および「自営群」は、他群と比して貯蓄ができている割合がそれぞれ、41.0%、33.6%と高かった。「非正規群」は、「赤字でもなく黒字でもない」と回答した人が 56.3%と高かった。

＜雇用に関する考察＞

本調査では、雇用形態と所得階層の関連が示された。たとえば、他群と比して、困窮度Ⅰ群は「非正規群」が 34.7%と高い割合を占めているように、就労状況は、困窮度が高まるにつれて、「正規群」の割合が低く、「自営群」・「非正規群」の割合が高くなる傾向がある。困窮度Ⅰ群の 45.5%は「正規群」であり、正社員ではあるが困窮度が高いというワーキングプアの問題があることがうかがえる。また、困窮度が高い群では「大学卒業」の割合が低くなっている。父親の最終学歴については、困窮度Ⅰ群では無回答の割合が 49.6%と高いことも注意すべきである。さらに、父親の最終学歴別に就労状況を見ると、他群と比して無回答の群では「非正規」の割合が高かった。

世帯構成の観点から就労状況を見ると、ふたり親世帯と比して、母子世帯、父子世帯、その他世帯は非正規雇用の割合が高かった。また、困窮度別に生計の支えとなる人を見ると、中央値以上群では父親という回答が 9 割であったが、困窮度が高まるにつれ、母親が生計を支えているという回答が多くなっており、困窮度Ⅰ群では母親が生計を支えている割合が 5 割を超えている。

さらに、就労状況別に家計状況を見ると、「正規群」および「自営群」では、貯蓄ができている割合がそれぞれ、41.0%、33.6%と高かったのに対し、「非正規群」では貯蓄ができている割合は 8.8%にとどまる。こうしたことから、特に非正規雇用となっているひとり親世帯等では、生活の安定度合が高くはない可能性が示された。

自由記述の雇用に関する回答では、「正職員の職に就くことが出来ず、パートなので将来が不安です。正職員の仕事を探したい」とあるように、正規雇用の職に就くことの現状がうかがえる。また、正規雇用であっても、子どもの教育費がかさむため、「経済的に大変でアルバイトを他に 2 つしています」という家庭も見られた。

困窮度別に見た、朝食の頻度（子ども票問 5-1）

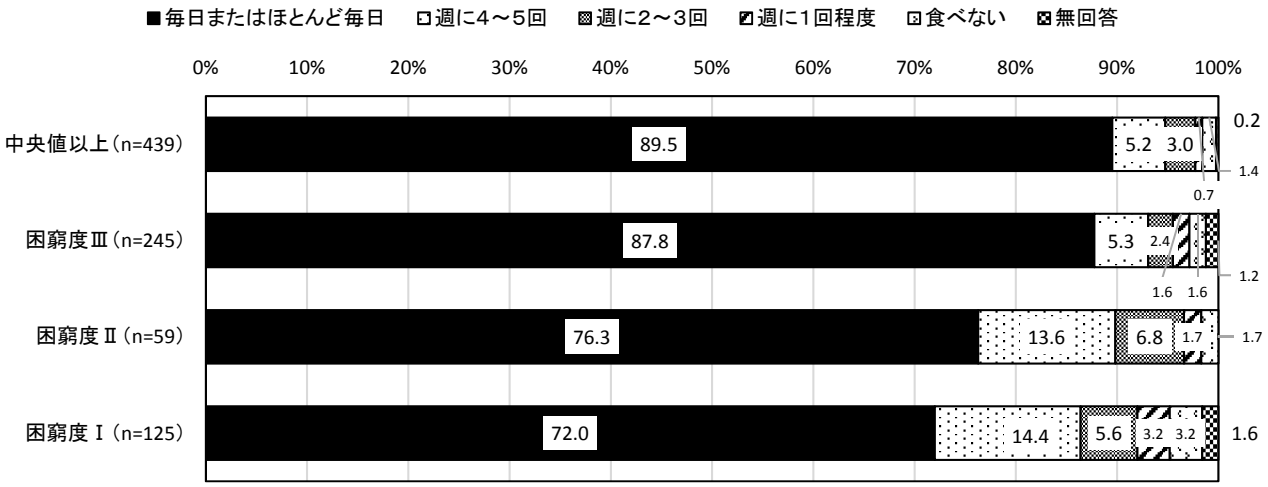

図 150. 困窮度別に見た、朝食の頻度

困窮度別に子どもの朝食の頻度を見ると、困窮度が高くなるにつれて、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる頻度が低くなった。困窮度Ⅰ群では、「週に 1 回程度」および「食べない」と回答した人の割合の合計が 6.4%と、他群に比べて若干高かった。

就労状況別に見た、朝食の頻度（子ども票問 5-1）

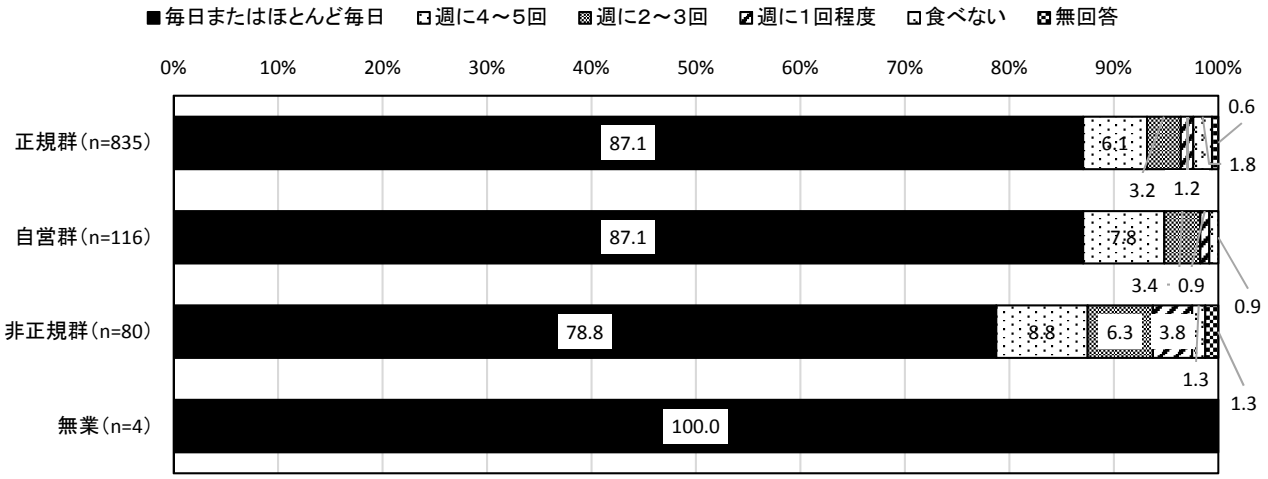

図 151. 就労状況別に見た、朝食の頻度

就労状況別に朝食の頻度を見ると、子どもが「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる割合は、「正規群」、「自営群」で 9 割弱、「非正規群」で 8 割弱であった。いずれの群でも、1~2 割弱の子どもが、「毎日またはほとんど毎日」は朝食を食べていない状態にある。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）
（子ども票 5-1×保護者票問 14-1）

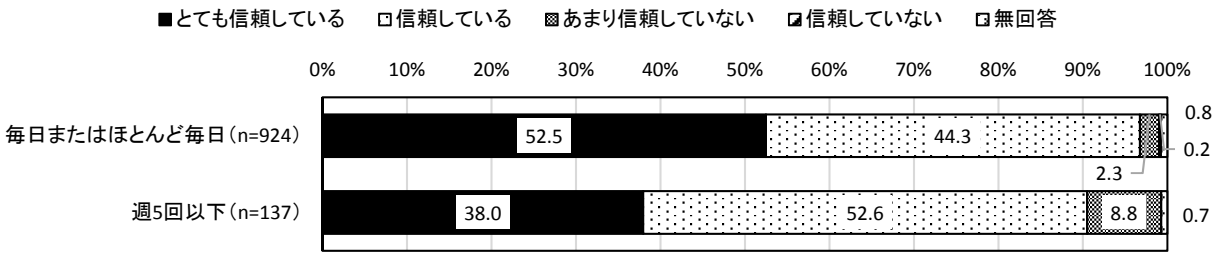

図 152. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、52.5%が子どもを「とても信頼している」と回答したのに対し、「週5回以下」では、「とても信頼している」と回答した人は38.0%と低かった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）
（子ども票 5-1×保護者票問 14-2）

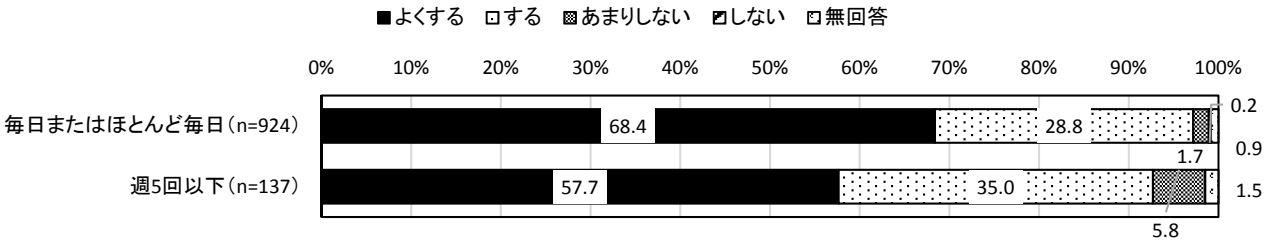

図 153. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見た。「毎日またはほとんど毎日」子供が朝食をとっていると回答した人では、68.4%が子どもと「よく会話をする」と回答した。一方、「週5回以下」では、「よく会話をする」と回答した人は57.7%であり、朝食の頻度が「毎日またはほとんど毎日」である子どもの保護者は、子どもとよく会話をする割合が高くなっている。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））
（子ども票 5-1×保護者票問 14-3）

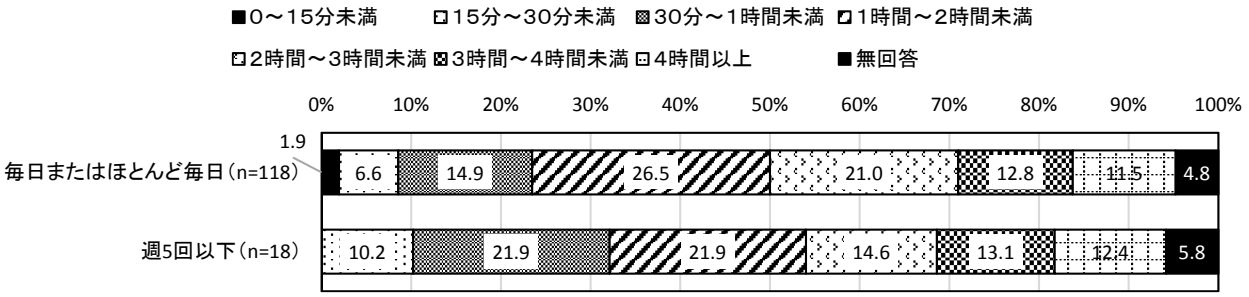

図 154. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））

子どもの朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見た。「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている子どもを持つ保護者は「１時間～２時間未満」と回答した割合がすべての選択肢の中で最も高かった。一方、「週 5 回以下」の人では「30 分～１時間未満」や「１時間～２時間未満」と回答した割合がすべての選択肢の中で高かった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））
（子ども票 5-1×保護者票問 14-3）

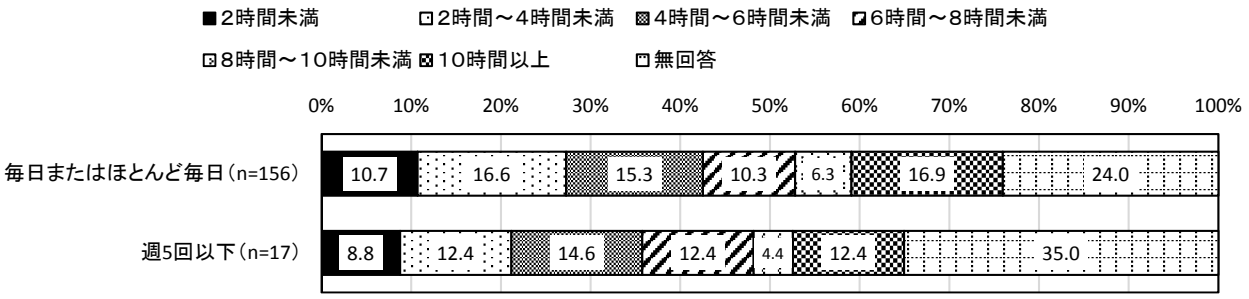

図 155. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、大きな差は見られない。「週 5 回以下」では無回答が多かった。

朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）
（子ども票 5-1×保護者票問 14-4）

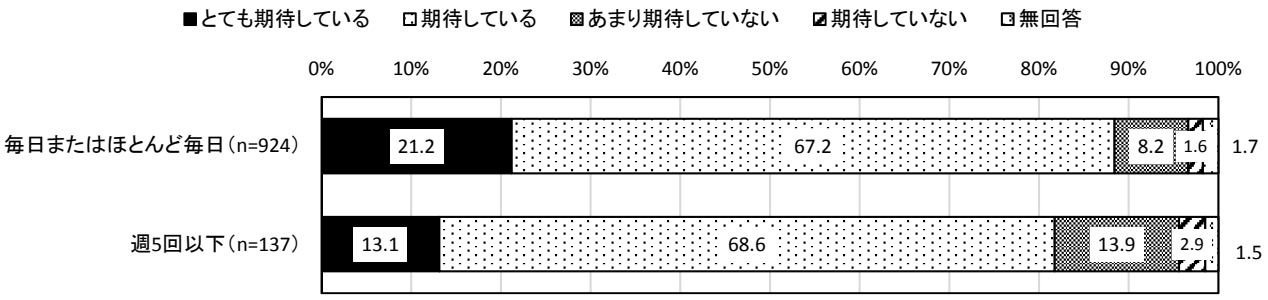

図 156. 朝食の頻度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人では、「とても期待している」と「期待している」を合わせると 88.4%と高かった。「週 5 回以下」の人では、「とても期待している」と「期待している」を合わせると 81.7%であった。「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている人のほうが「週 5 回以下」の人より、子どもの将来に対する期待がやや高い結果となった。

朝食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフエフィカシー）
（子ども票 5-1×子ども票問 23）

※「自分に自信がある」「自分の考えをはっきり相手に伝えることができる」「大人は信用できる」「自分の将来の夢や目標を持っている」「将来のためにも、今、頑張りたいと思う」「将来、働きたいと思う」の 6 項目について、それぞれ 4 段階で評価させ、その値を合計した得点を、自己効力感（セルフ・エフィカシー）得点とした。得点が高いほど、セルフ・エフィカシーが高いことを表す。

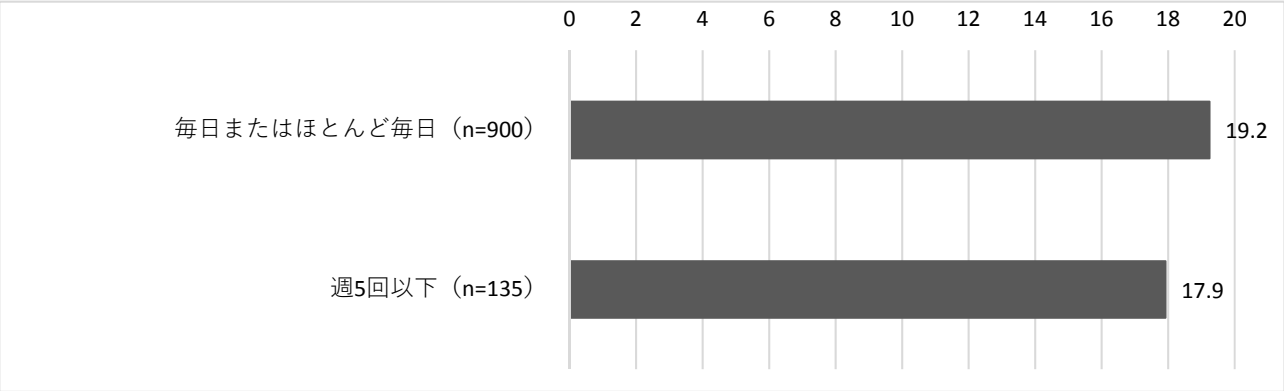

図 157. 朝食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフエフィカシー）

朝食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人では、19.2 点であるのに対して、「週 5 回以下」では、17.9 点であった。「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっていると回答した人のほうが「週 5 回以下」の人よりも子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高かった。

昼食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）
（子ども票 7×子ども票問 23）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 155 上の説明を参照。

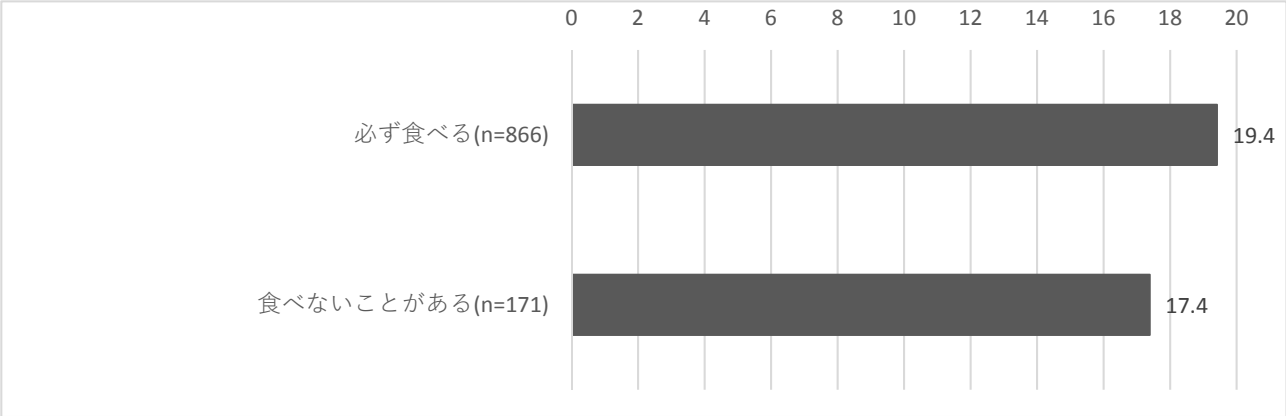

図 158. 昼食の頻度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が 19.4 点であった。これに対して、「食べないことがある」と回答した人は 17.4 点であり、昼食を「必ず食べる」と回答した人のほうが、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高い結果となった。

困窮度別に見た入浴頻度（子ども票問 8）

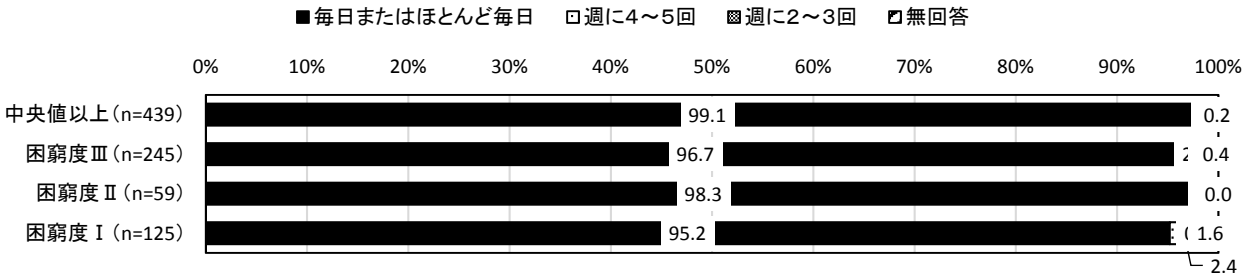

図 159. 困窮度別に見た入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると、いずれの群においても 9 割以上が「毎日またはほとんど毎日」と回答していたが、他群と比して困窮度 Ⅰ 群では、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合が若干低かった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども票問 21）

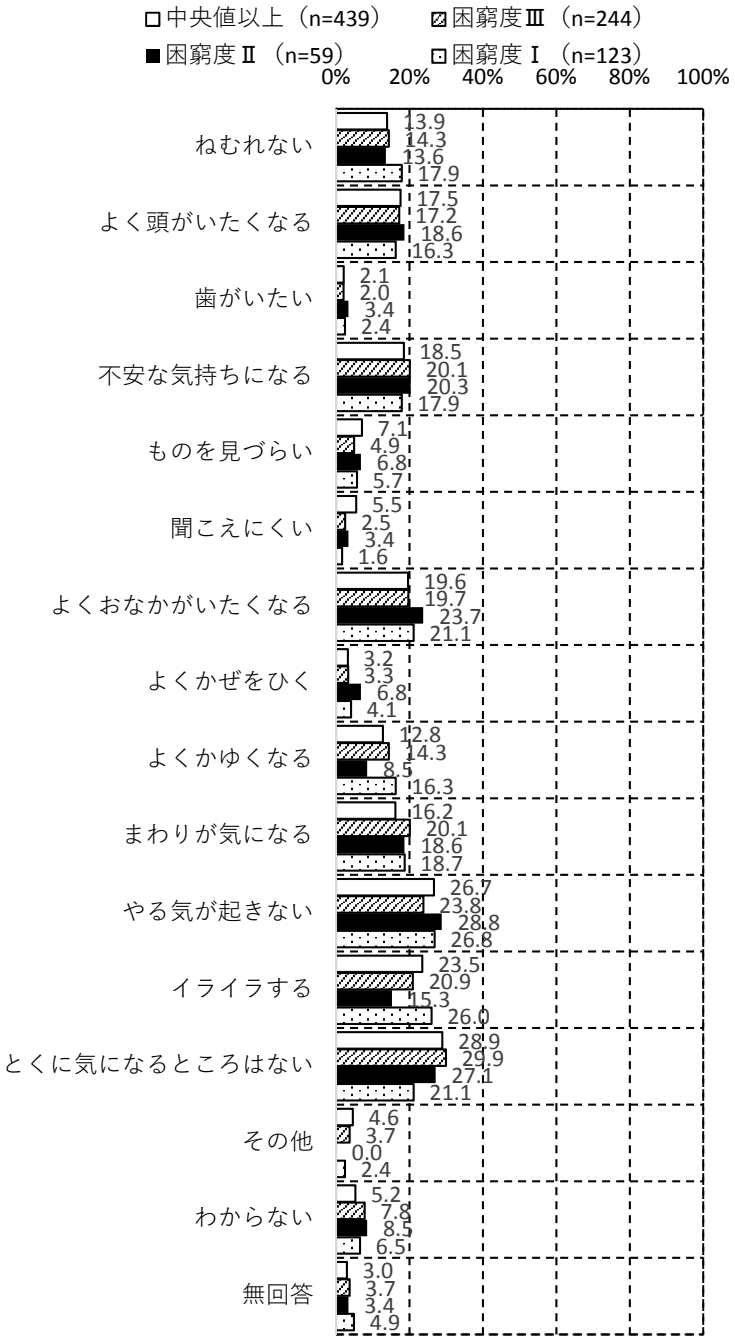

図 160. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども）

困窮度別に自分の体や気持ちで気になることについて、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「ねむれない」17.9%、「よくかぜをひく」4.1%、「よくかゆくなる」16.3%（以上、中央値以上群に対して、1.3 倍）など、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。一方、中央値以上群の数値を挙げると、「とくに気になるところはない」28.9%（困窮度Ⅰ群に対して、1.4 倍）であり、困窮度Ⅰ群より中央値以上群の方が、自分の身体や気持ちで気になることがないと回答した割合が高かった。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること
（保護者問 7×子ども票問 21）

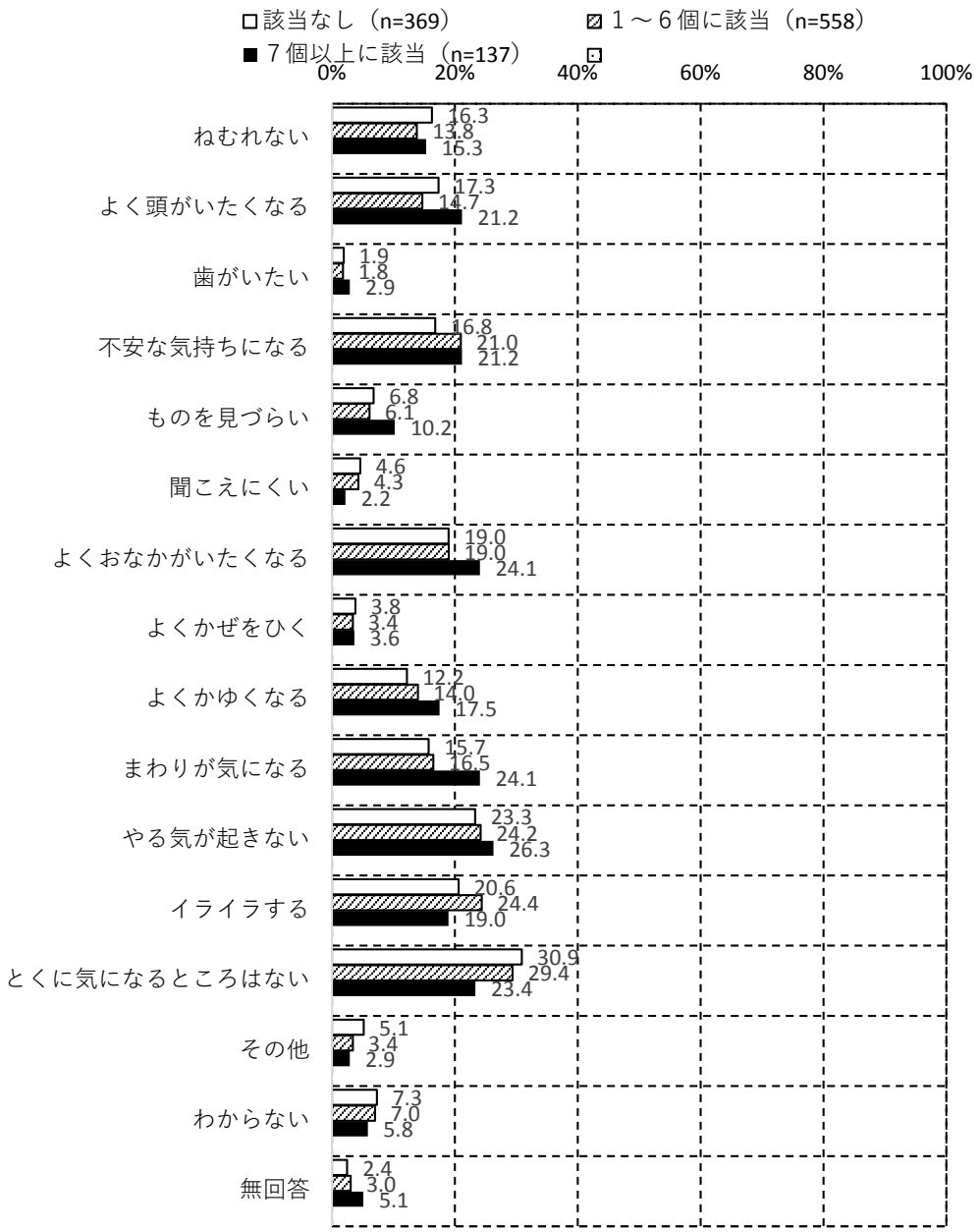

図 161. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども）

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることについて、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目すると、「7個以上に該当」と回答した人では、「歯がいたい」2.9%「ものを見づらい」10.2%「まわりが気になる」24.1%（いずれも、「該当なし」群に対して、1.5倍）であり、「該当なし」と回答した人より高かった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票問 23）

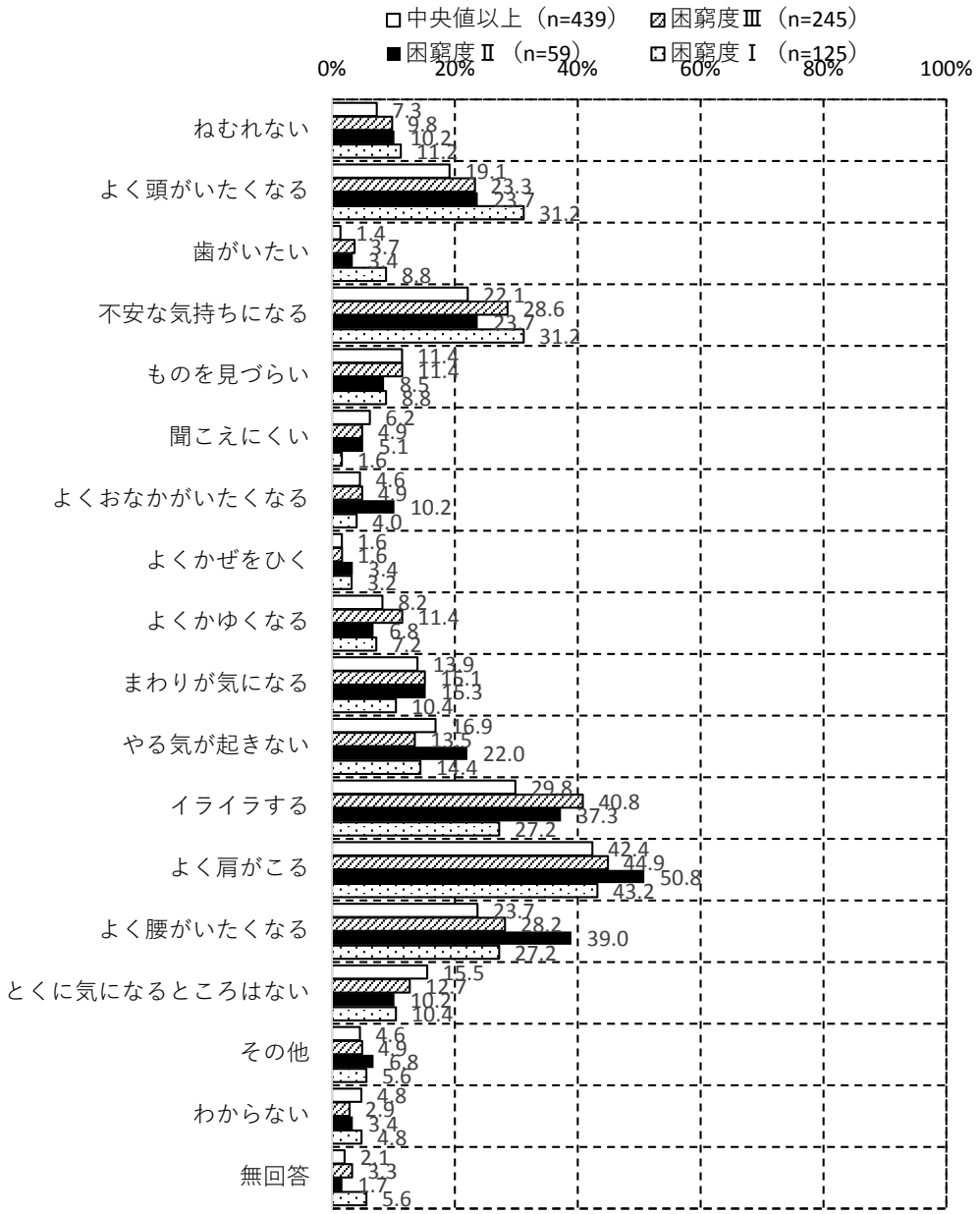

図 162. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者）

困窮度別に自分の体や気持ちで気になること（保護者）を見ると、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっている項目が複数あった。困窮度Ⅰ群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「歯がいたい」8.8%（中央値以上群に対し 6.4 倍）、「よくかぜをひく」3.2%（中央値以上群に対し 2.0 倍）、「よく頭がいたくなる」31.2%（中央値以上群に対し 1.6 倍）、「ねむれない」11.2%（中央値以上群に対し 1.5 倍）といった身体的な不調に加え、「不安な気持ちになる」31.2%（中央値以上群に対し 1.4 倍）といった心理的・精神的状況への影響もみられた。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること
（保護者票問 7×保護者票問 23）

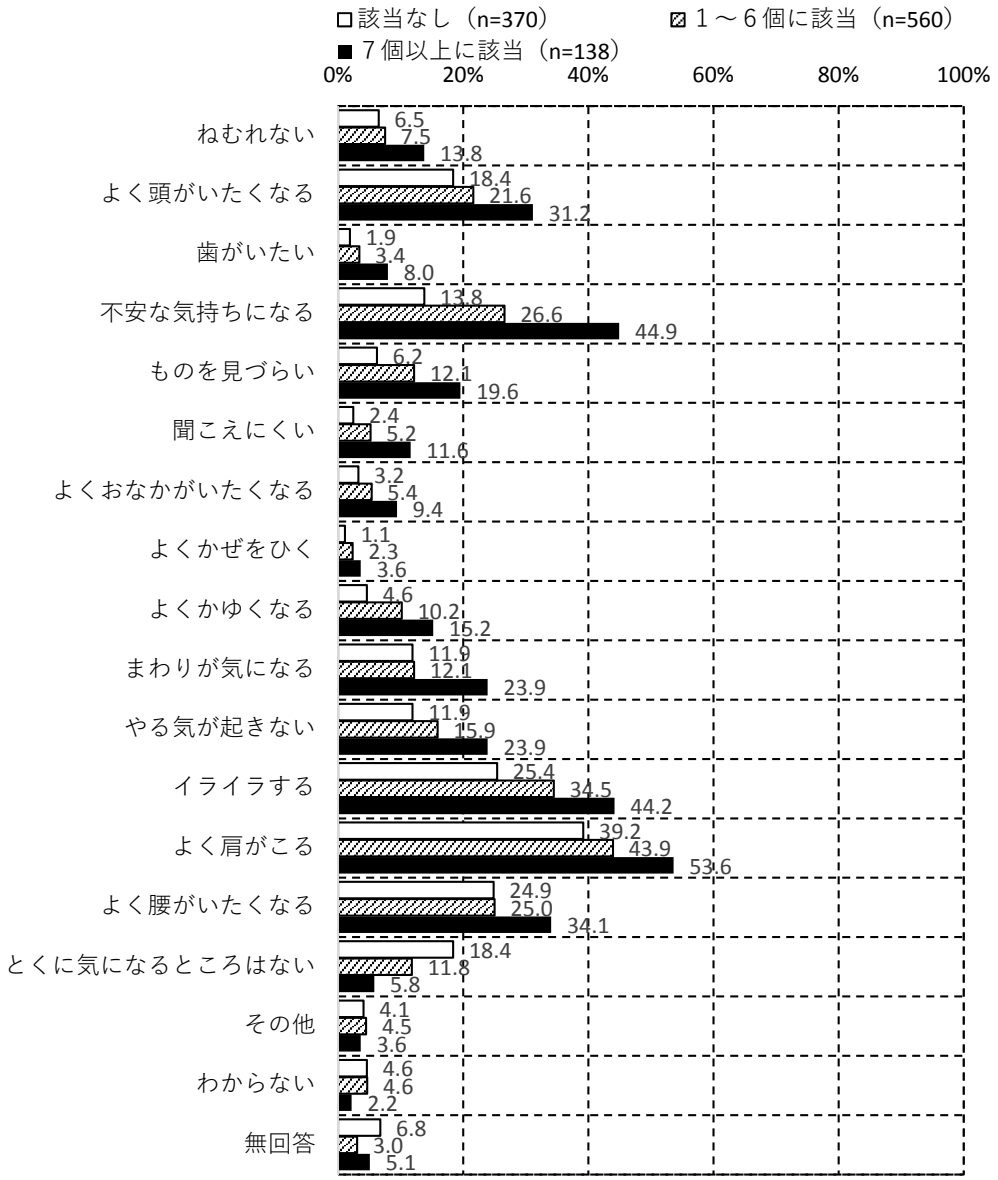

図 163. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者）

経済的な理由による経験（保護者）の該当数別に、自分の体や気持ちで気になることを見ると、「7 個以上に該当」した人は「該当なし」に比べて、不調を示すすべての項目において、自分の体や気持ちで気になることの項目の数値が高くなっている。「7 個以上に該当」群について、「該当なし」との差が大きい順に挙げると、「聞こえにくい」11.6%（「該当なし」に対して 4.8 倍）、「歯がいたい」8.0%（4.2 倍）、「よくかぜをひく」3.6%（3.4 倍）、「不安な気持ちになる」44.9%（3.3 倍）、「よくかゆくなる」15.2%（3.3 倍）となっている。身体的な症状だけでなく「不安な気持ちになる」といった心理的・精神的症状も生じている。

就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数（保護者票問 23）

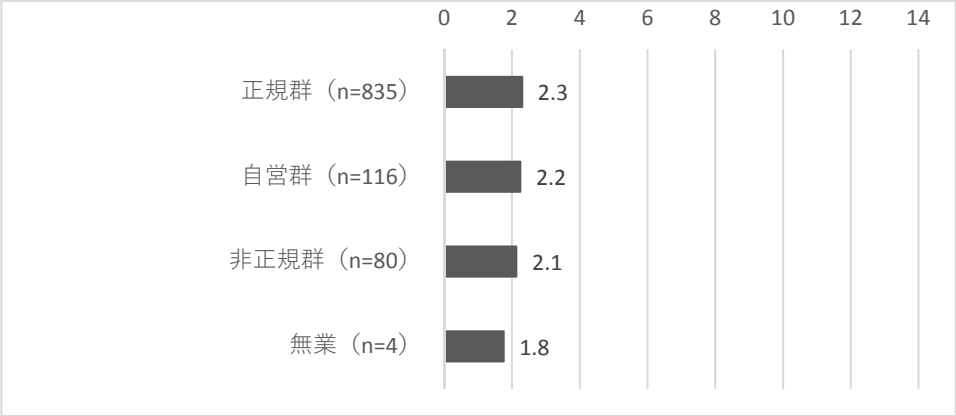

図 164. 就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数（保護者）

就労状況別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、大きな差は見られない。

就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票問 26）

※成田・下仲・中里他（1995）の特性的自己効力感尺度より「自分が建てた目標や計画はうまくできる自信がある」、「はじめはうまくいかない事でも、できるまでやり続ける」、「人の集まりの中では、うまくふるまえない」、「私は自分から友達を作るのがうまい」、「人生で起きる問題の多くは自分では解決できない」の 5 項目を抽出して使用した。それぞれの項目について、「そう思う」～「思わない」までの 4 段階で評価させ、5 項目の合計得点を大人の自己効力感（セルフ・エフィカシー）得点とした。得点が高いほど、セルフ・エフィカシーが高いことを表す。

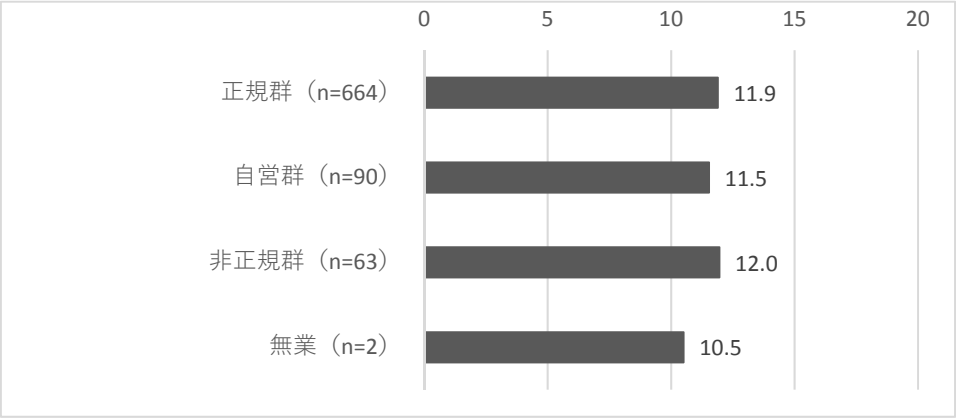

図 165. 就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

就労状況別に保護者のセルフ・エフィカシーを見ると、「無業」群でやや低くなっているが、就労状況による大きな違いは見られなかった。

就労状況別に見た、支えてくれる人得点（保護者票問 20）

※「あなたを支え、手伝ってくれる人はいますか」という質問について、「心配ごとや悩みごとを親身になって聞いてくれる人」「あなたの気持ちを察して思いやってくれる人」「趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる人」「子どもとの関わりについて、適切な助言をしてくれる人」「子どもの学びや遊びを豊かにする情報を教えてくれる人（運動や文化活動）」「子どもの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる人」「留守を頼める人」の 7 項目を提示した。それぞれの人物が「いる」か「いない」かで評定させたうえで、「いない」を 0 点、「いる」を 1 点とし、7 項目の合計得点を「支えてくれる人得点」とした。得点が高いほど、身近に支えてくれる人が多く存在することを表す。

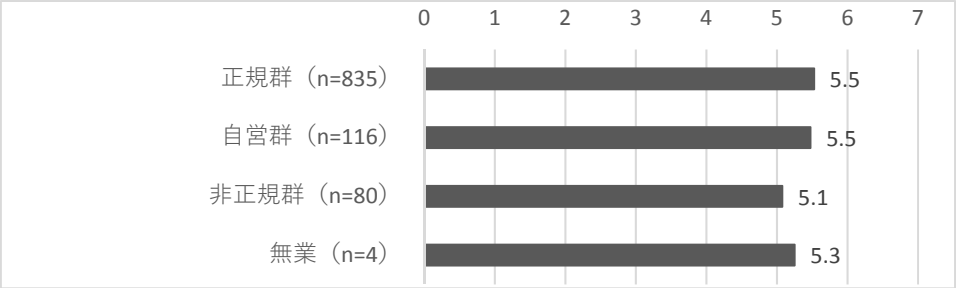

図 166. 就労状況別に見た、支えてくれる人得点

就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見たところ、「正規群」（5.5）、および「自営群」（5.5）で高く、これらに比して、「非正規群」（5.1）と「無業」（5.3）が低かったが、いずれも差は大きくない。

困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）（保護者票問 22-1）

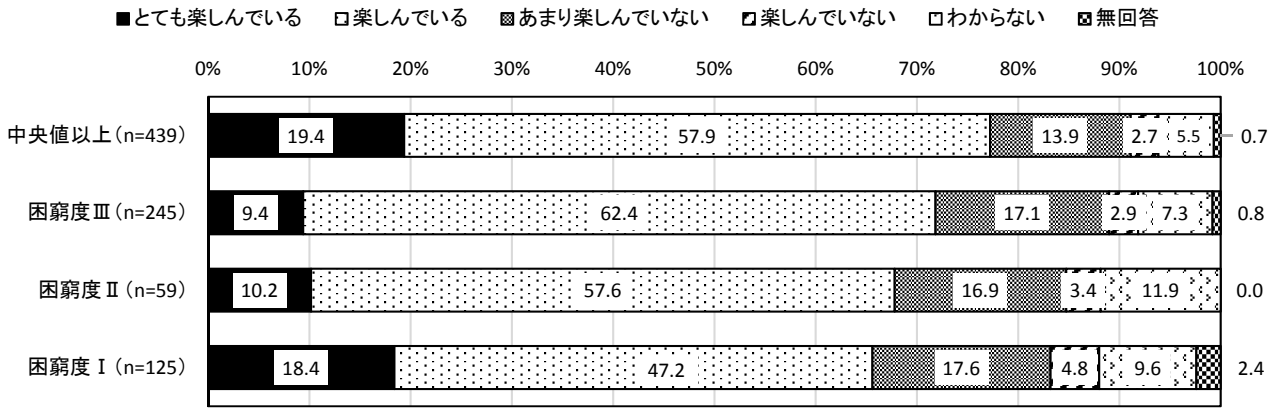

図 167. 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群で 77.3%、困窮度Ⅲ群で 71.8%、困窮度Ⅱ群で 67.8%、困窮度Ⅰ群で 65.6%であり、困窮度が高まるにつれて、低くなる傾向があった。

困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）（保護者票問 22-2）

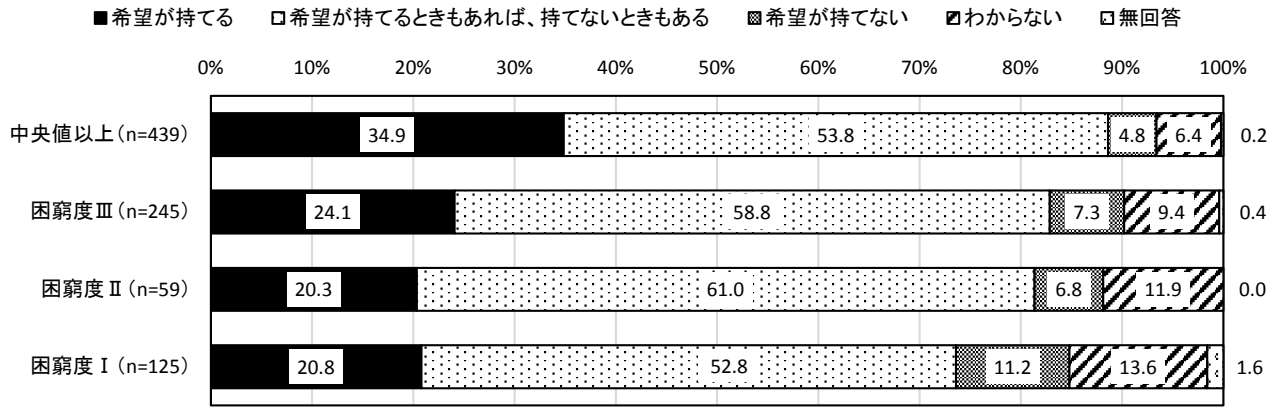

図 168. 困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）

困窮度別に将来への希望を見ると、「希望が持てる」と回答した割合は、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ～Ⅲ群では低くなっている。一方、「希望が持てない」と回答した割合は、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ～Ⅲ群では高くなっている。

困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）（保護者票問 22-3）

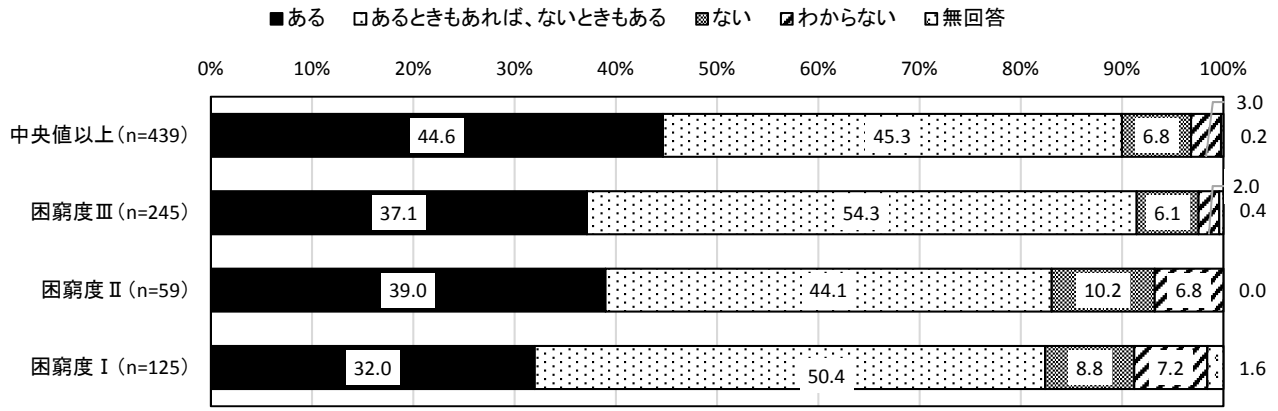

図 169. 困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）

困窮度別にストレスを発散できるものについて、ストレスが発散できるものが「ある」と回答した人の割合は、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ～Ⅲ群では低くなっている。

困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）（保護者票問 22-4）

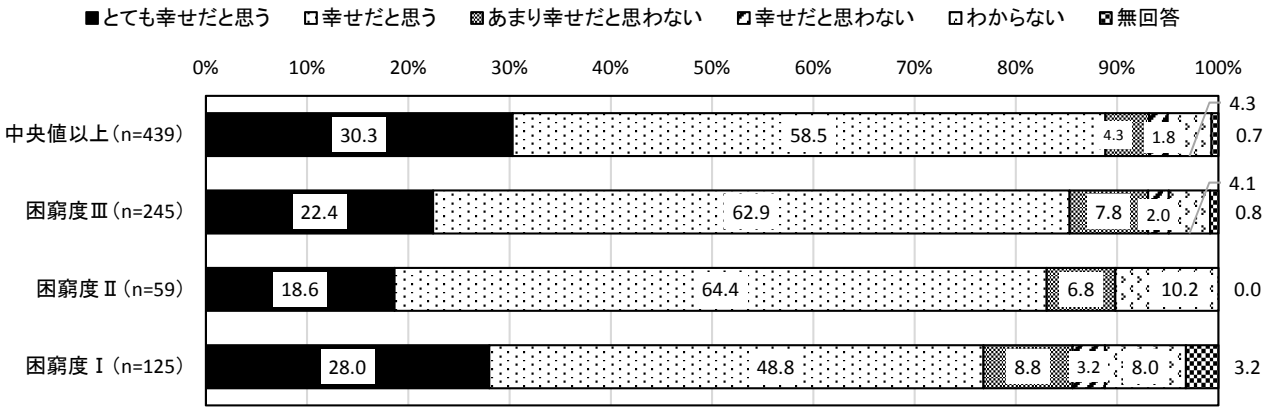

図 170. 困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）

困窮度別に幸せだと思うかを見ると、「とても幸せだと思う」および「幸せだと思う」を合わせた割合は、困窮度が高まるにつれて低くなる傾向があった。

困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと（保護者票問 24）

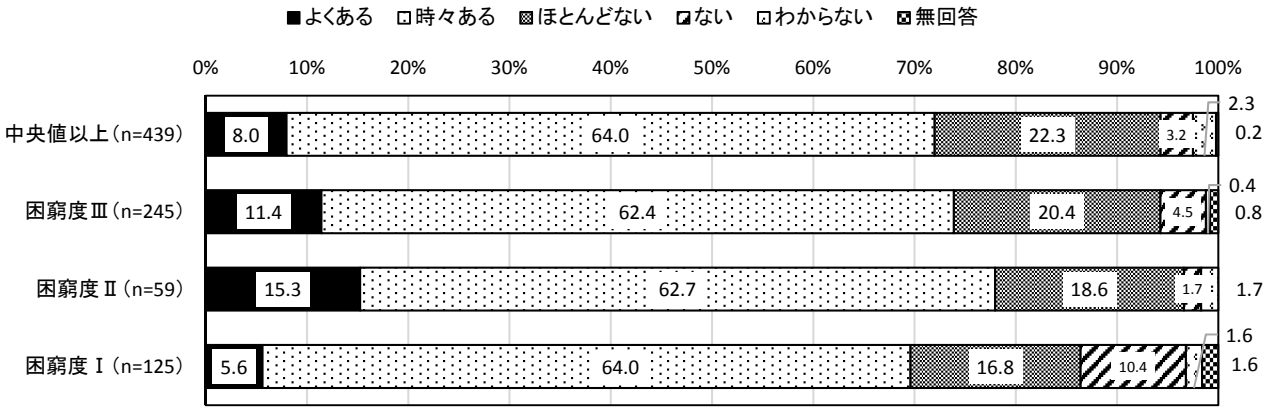

図 171. 困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

困窮度別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、困窮度による大きな差は見られなかった。「ない」と回答した人の割合は、その他の群では 5%未満であるが、困窮度Ⅰ群では 10.4%と高かった。

困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診（保護者票問 25）

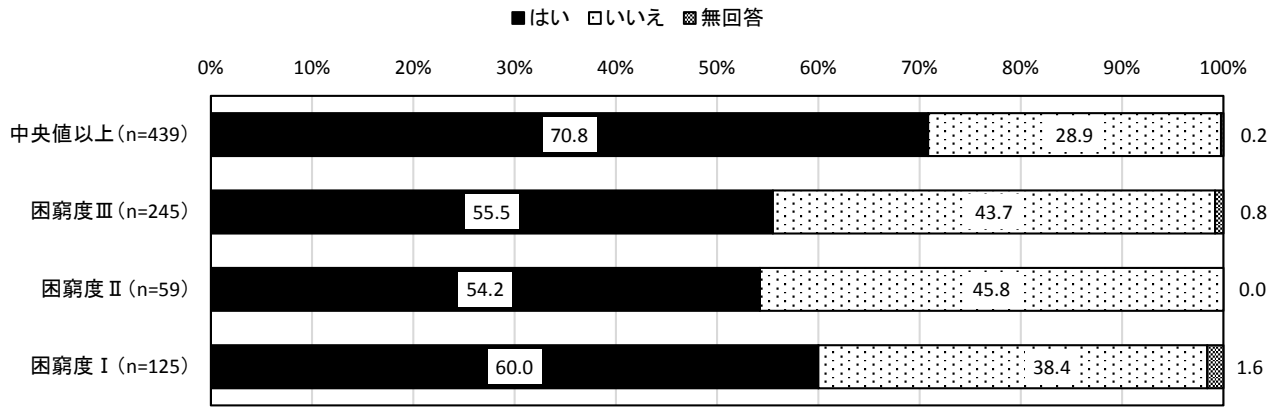

図 172. 困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診

困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、受診している割合は中央値以上群が最も高かった。

定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）
（保護者票問 25×保護者票問 27-4 より）

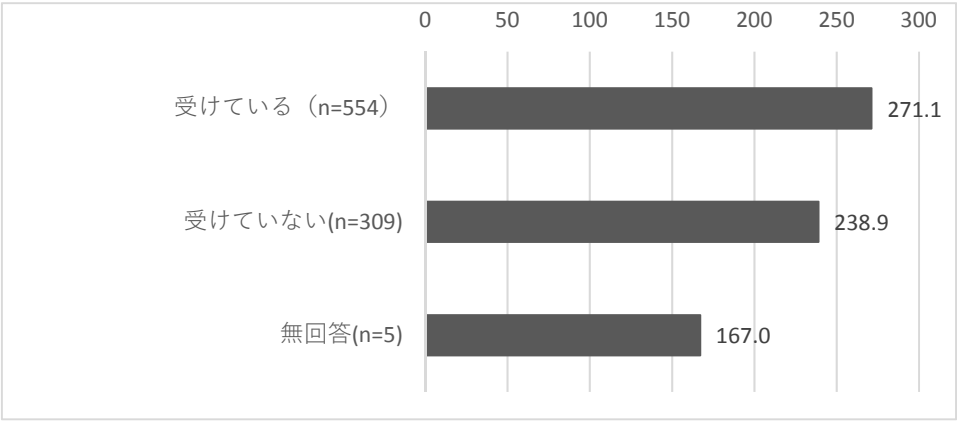

図 173. 定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値

定期的な健康診断の受診別に等価の可処分所得額の平均値を算出すると、「受けている」では 271.1 万円、「受けていない」では 238.9 万円であった。

＜健康に関する考察＞

困窮度別に子どもの朝食の頻度を見たところ、困窮度が高くなるにつれ、「毎日またはほとんど毎日」朝食を食べる割合が減少しており、他方、困窮度Ⅰ群では、「週に1回程度」および「食べない」割合が合わせて6.4%と、他群に比べて高い。このことから、困窮度の高まりが、子どもの朝食の頻度の低下と関連している可能性が示された。就労状況に関わらず、1~2割弱の子どもは朝食を食べない頻度が高い傾向があり、人数は少なくとも、子どもの健康にかかわる朝食を食べない子どもがいるということに注意が必要である。

朝食の頻度は、直接的な身体の健康だけでなく、心理的・精神的側面からも重要である。例えば、朝食の頻度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）について見ると、子どもが「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている世帯においては、保護者の約半数（52.5%）が子どもを「とても信頼している」と回答しているのに対し、子どもの朝食の頻度が「週5回以下」の世帯では、保護者が子どもを「とても信頼している」とする割合は38.0%にとどまる。さらに、子どもの朝食の頻度が「毎日またはほとんど毎日」である群では、保護者が子どもとよく会話している傾向がある。逆に、平日、子ども～と一緒にいる時間が1日0～1時間未満の割合は、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている子どものいる世帯では23.4%であるのに対し、「週5回以下」の世帯では32.1%と高い値を示しており、子どもの朝食の頻度が低い群では、保護者と子どもの会話の機会が少ない場合がある可能性が懸念される。そのほか、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）は、子どもが「毎日またはほとんど毎日」朝食をとっている群が「週5回以下」の群と比してやや高く、さらには、休日の昼食について、「必ず食べる」群のほうが、そうでない群より高かったことから、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）と食の頻度の関係がうかがえる。

子どもが自分の体や気持ちで気になることについて、困窮度別に見ると、困窮度Ⅰ群では、「ねむれない」、「よくかぜをひく」、「よくかゆくなる」といった項目が、中央値以上群に対して、1.3倍となっており、一方、中央値以上群は、「とくに気になるところはない」が困窮度Ⅰ群に対して、1.4倍であった。こうした心身の状況の問題が学習状況に影響を与えている可能性は否定できない。さらに、経済的な理由による保護者の経験の該当数別に見ると、こうした経験に該当したことがない群と比して、7個以上という多くに該当した群で、「ものを見づらい」や「まわりが気になる」といった不調を子どもが呈している。

一方、保護者が自分の体や気持ちで気になることについて、困窮度別に見ると、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になる項目の数値が高まる傾向が複数の項目について見られた。例えば、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ群では、「歯がいたい」、「よくかぜをひく」等といった身体的な不調や、「不安な気持ちになる」といった心理的・精神的な不調をきたしていた。さらには、経済的な理由による経験の該当数別にみると、7個以上に該当する人は、該当しない人より、例えば、「聞こえにくい」、「歯がいたい」といった身体的な症状、および、「不安な気持ちになる」といった心理的・精神的不調も生じていた。こうした心理的・精神的不調は、仕事と子育ての間で多忙な保護者の自由記述でも多く見られた。心理面・精神面に関連することとして、将来への希望を困窮度別に見ると、中央値以上群と比して、困窮度Ⅰ～Ⅲ群は「希望が持てない」と考える割合が高い傾向がある。また、身体的な健康に関連することとして、困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、身体的な不調を訴える傾向にある困窮度Ⅰをはじめ、中央値以下群では、中央値以上群と比して、定期的な健康診断を受診している割合が低いことから、定期的な健康診断が容易な雇用環境、心理的・時間的余裕等が受診率の差に表れていると考えられ、困窮層が定期的な健康診断を受診しやすい取り組みも必要であると考えられる。

３－４．家庭生活、学習

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）（子ども票問 10-1）

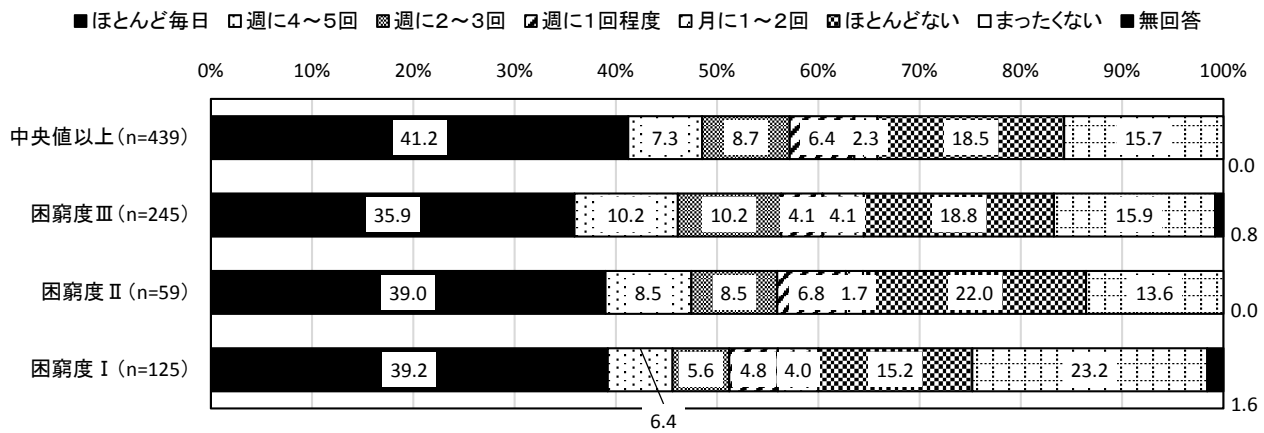

図 174. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）を見ると、「まったくない」と回答した割合は、中央値以上群が 15.7%に対し、困窮度Ⅰ群では 23.2%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）（子ども票問 10-2）

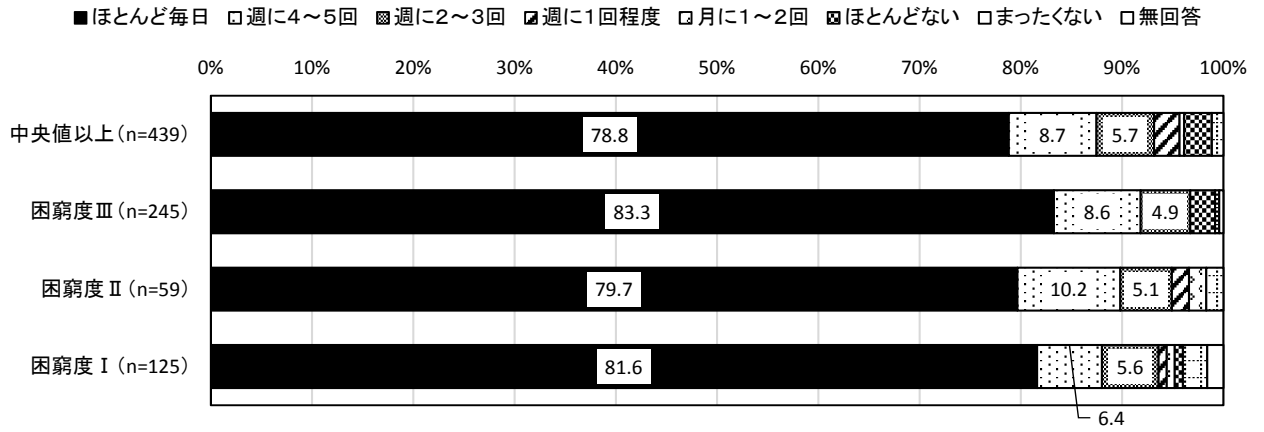

図 175. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、中央値以上群では 78.8%、困窮度Ⅲ群では 83.3%、困窮度Ⅱ群では 79.7%、困窮度Ⅰ群では 81.6%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）
（子ども票問 10-5）

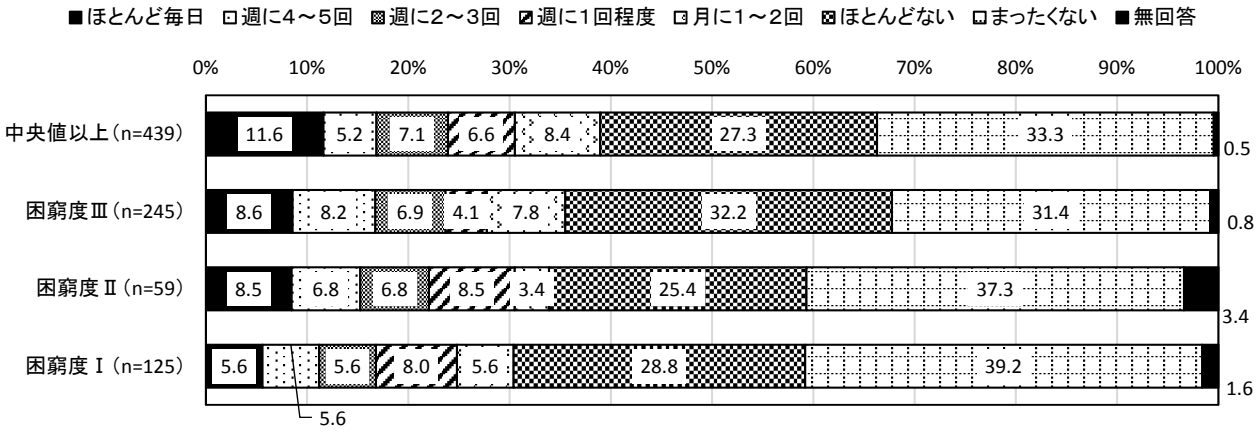

図 176. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、中央値以上群では 11.6%、困窮度Ⅲ群では 8.6%、困窮度Ⅱ群では 8.5%、困窮度Ⅰ群では 5.6%であった。また「まったくない」と回答した割合は、中央値以上群では 33.3%に対し、困窮度Ⅰ群では 39.2%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）（子ども票問 10-9）

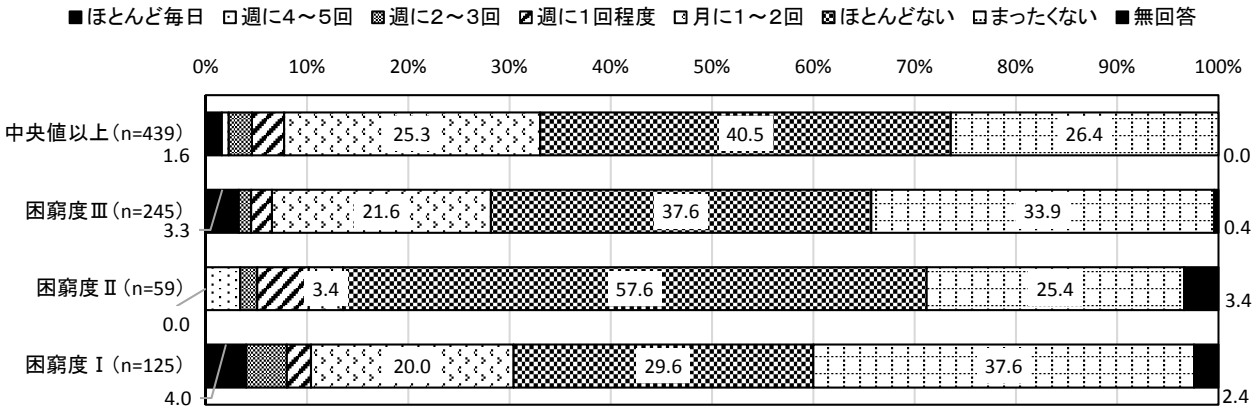

図 177. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）を見ると「まったくない」と回答した人の割合は、中央値以上群では 26.4%に対し、困窮度Ⅰ群では 37.6%であった。

困窮度別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票問 14）

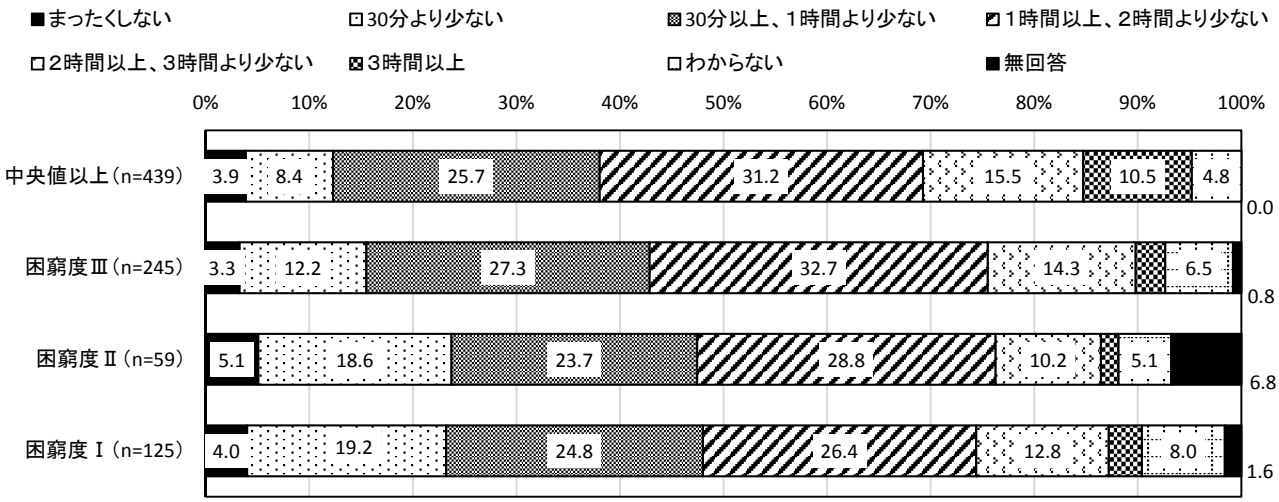

図 178. 困窮度別に見た、授業以外の勉強時間

困窮度別の授業以外の勉強時間を見ると、「まったくしない」「30 分より少ない」「30 分以上、1 時間より少ない」と回答した人の割合の合計は、中央値以上群では 38.0%、困窮度Ⅰ群では 48.0%であった。

困窮度別に見た、授業以外の読書時間（子ども票問 16）

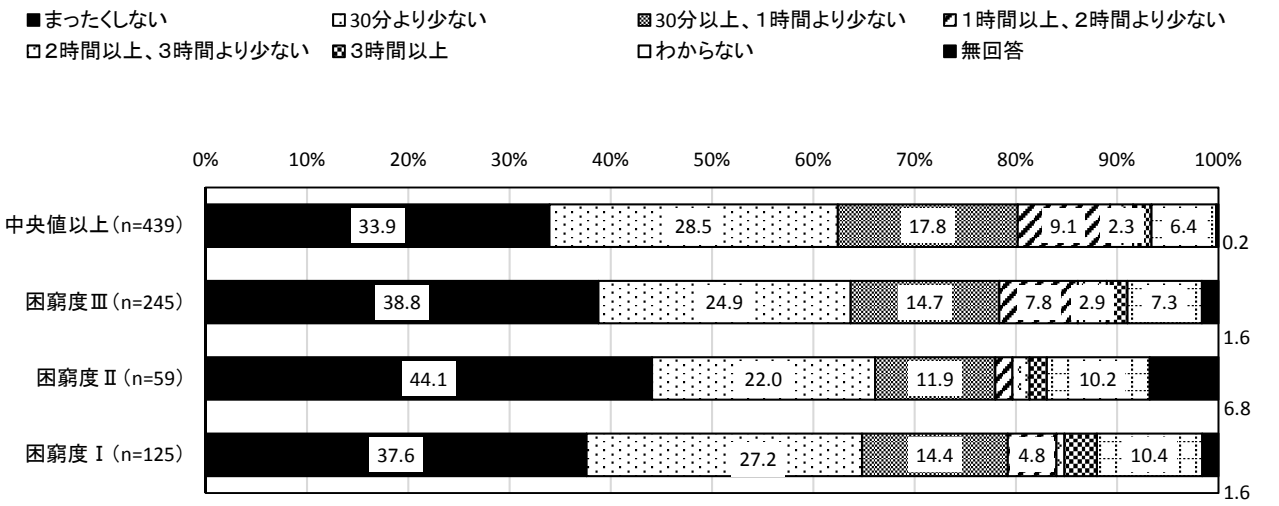

図 179. 困窮度別に見た、授業以外の読書時間

困窮度別の授業以外の読書時間を見ると、「まったくしない」と回答した人の割合は、中央値以上群では 33.9%に対し、困窮度群はいずれも高く、困窮度Ⅱ群では 44.1%と最も高かった。

困窮度別に見た、学習理解度（子ども票問 15）

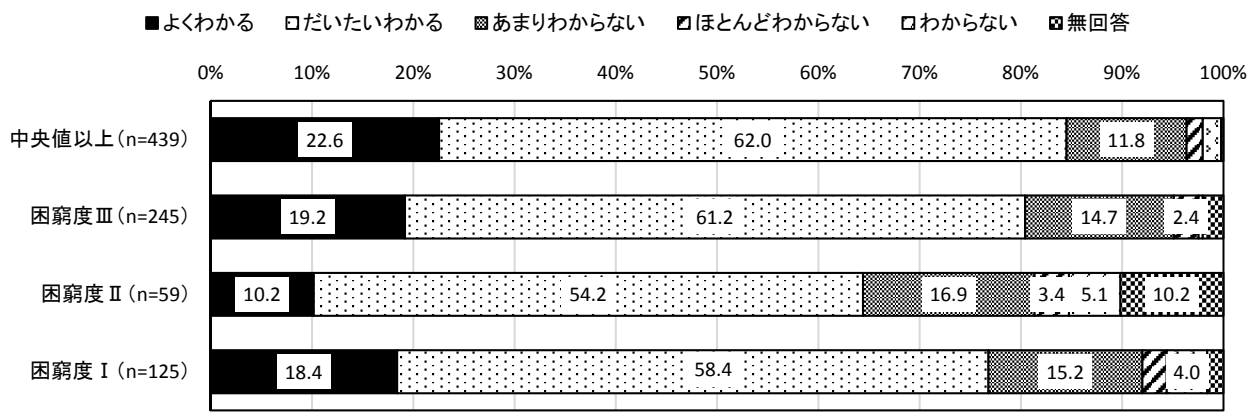

図 180. 困窮度別に見た、学習理解度

困窮度別の学習理解度を見ると、「よくわかる」「だいたいわかる」と回答した人の割合の合計は中央値以上群で 84.6%であったのに対し、困窮度Ⅰ群では 76.8%であった。

子ども部屋の有無別に見た、勉強時間の平均値（子ども票 22×子ども票問 14）

※勉強時間について、「1. まったくしない」「2. 30 分より少ない」「3. 30 分以上、1 時間より少ない」「4. 1 時間以上、2 時間より少ない」「5. 2 時間以上、3 時間より少ない」「6. 3 時間以上」の 6 つの時間枠からひとつを選択させた（「7. わからない」は除く）。項目番号を勉強時間の得点とみなし、得点が高いほど、勉強時間が長いことを表す。

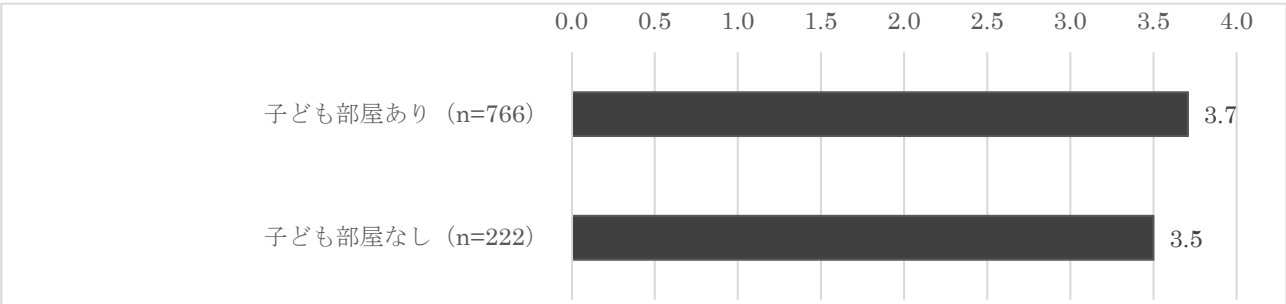

図 181. 子ども部屋の有無別に見た、勉強時間の平均値

子ども部屋がある子どもの方が、勉強時間がわずかに長かった。

起床時間の規則性別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票問 2×子ども票問 14）

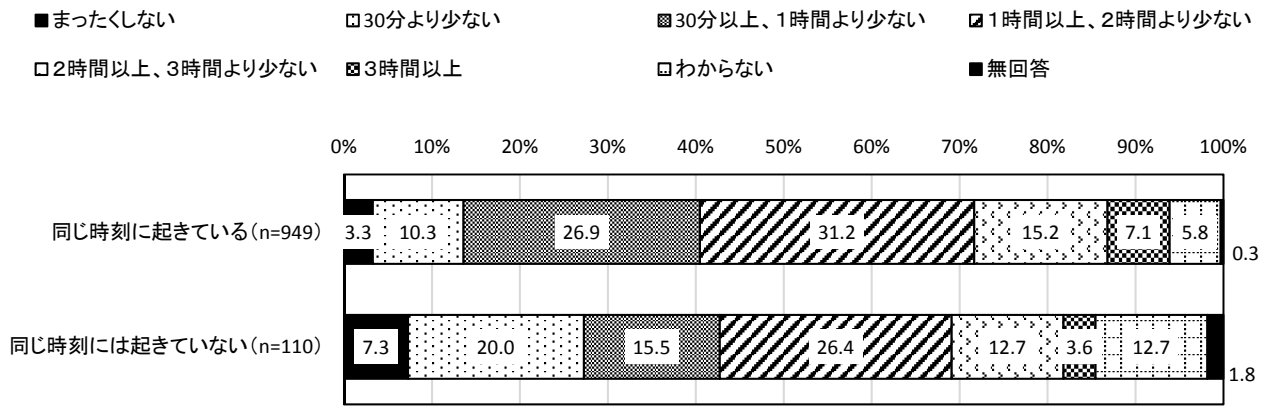

図 182. 起床時間の規則性別に見た、授業以外の勉強時間

ここでは、子ども票問２において「起きている」「どちらかと言えば、起きている」と回答した子どもを「同じ時刻に起きている」、「あまり、起きていない」「起きていない」と回答した子どもを「同じ時刻には起きていない」としている。

起床時間の規則性別に授業以外の勉強時間を見ると、「同じ時刻には起きていない」子どもの方が、「まったくしない」、「30 分より少ない」と回答した人の割合が高く、合計した割合は「同じ時刻には起きていない」子どもは 27.3%であったのに対し、「同じ時刻に起きている」子どもは 13.6%であった。

朝食の頻度別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票問 5-1×子ども票問 14）

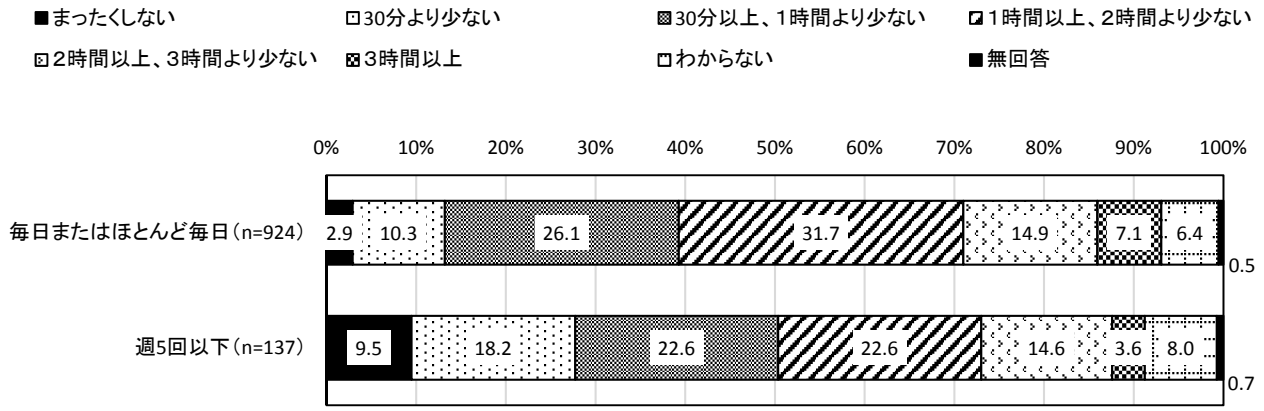

図 183. 朝食の頻度別に見た、授業以外の勉強時間

ここでは、子ども票問５において「毎日またはほとんど毎日」と回答した子どもを「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる、それ以外を選択した子ども（無回答除く）を「週５回以下」としている。

朝食の頻度別に授業以外の勉強時間を見ると、「週 5 回以下」の子どもの方が、「まったくしない」、「30 分より少ない」と回答した割合の合計は「週 5 回以下」の子どもは 27.7%であったのに対し、「毎日またはほとんど毎日」の子どもは 13.2%であった。

起床時間の規則性別に見た、授業以外の読書時間（子ども票問 2×子ども票問 16）

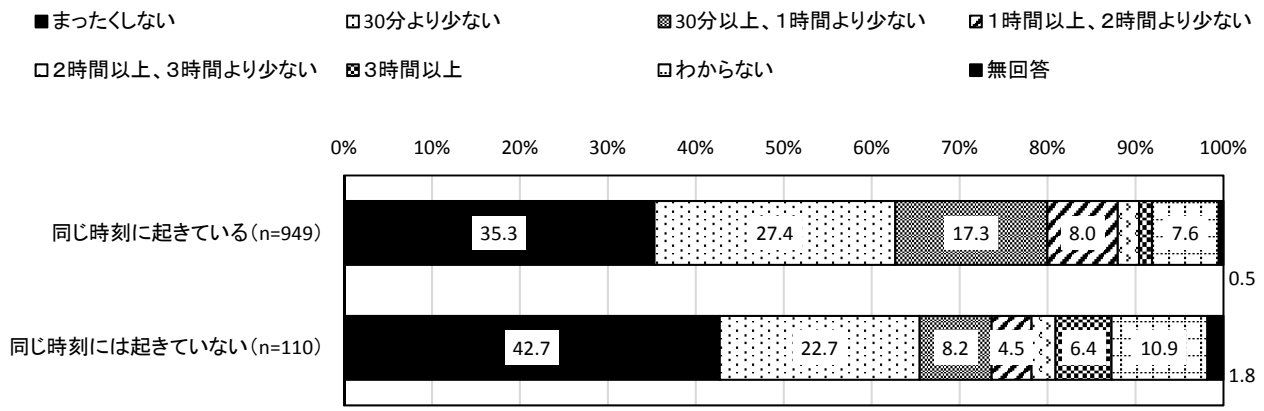

図 184. 起床時間の規則性別に見た、授業以外の読書時間

起床時間の規則性別に授業以外の読書時間を見ると、「まったくしない」と回答した人の割合は、「同じ時刻には起きていない」子どもは 42.7%であったのに対し、「同じ時刻に起きている」子どもは 35.3%であった。

朝食の頻度別に見た、授業以外の読書時間（子ども票問 5-1×子ども票問 16）

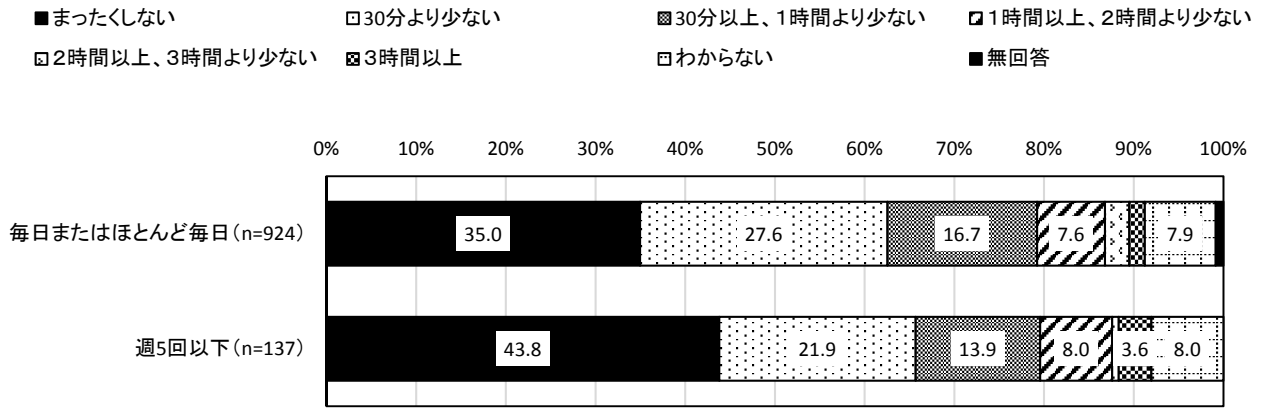

図 185. 朝食の頻度別に見た、授業以外の読書時間

朝食の頻度別に授業以外の読書時間を見ると、「まったくしない」と回答した人の割合は、「週 5 回以下」の子どもは 43.8%であったのに対し、「毎日またはほとんど毎日」の子どもは 35.0%であった。

困窮度別に見た、授業以外の勉強時間と学習理解度の関連（子ども票問 14&子ども票問 15）

※学習理解度について、「1. よくわかる」～「4. ほとんどわからない」まで 4 項目で評定させた。数値が低いほど、学習理解度が高いことを表す。

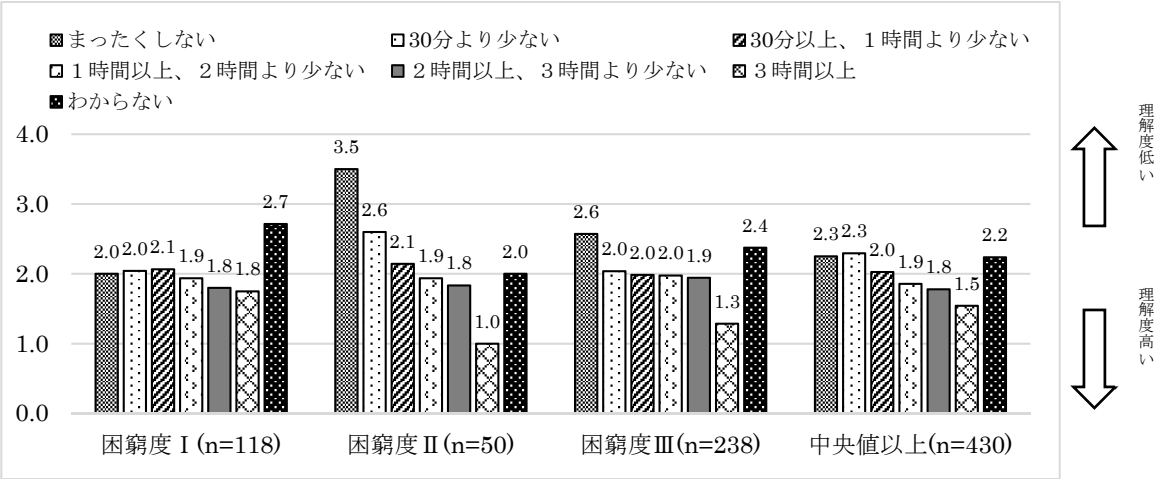

図 186. 困窮度別に見た、授業以外の勉強時間と学習理解度の関連

困窮度別の授業以外の勉強時間と学習理解度の関連を見ると、中央値以上群では勉強時間に比例して理解度が高まるが、困窮度Ⅰ群ではそのような傾向は見られない。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）
（子ども票問 9×保護者票問 14-1）

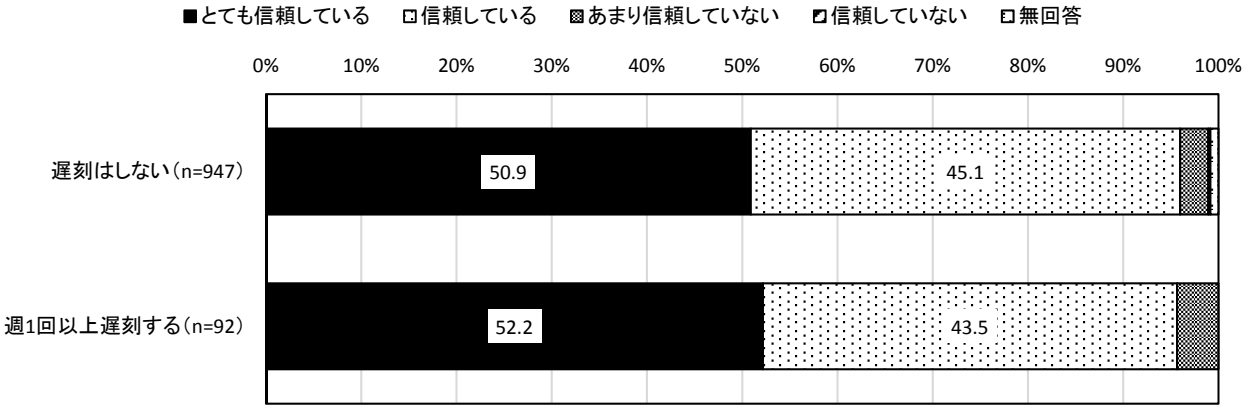

図 187. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

ここでは、子ども票問９において「遅刻はしない」と回答した子どもを「遅刻はしない」、それ以外を選択した子ども（無回答除く）を「週１回以上遅刻する」としている。

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、「とても信頼している」「信頼している」と保護者が回答した割合の合計は 96.0%、「週１回以上遅刻する」子どもにおいては 95.7%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）
（子ども票問 9×保護者票問 14-2）

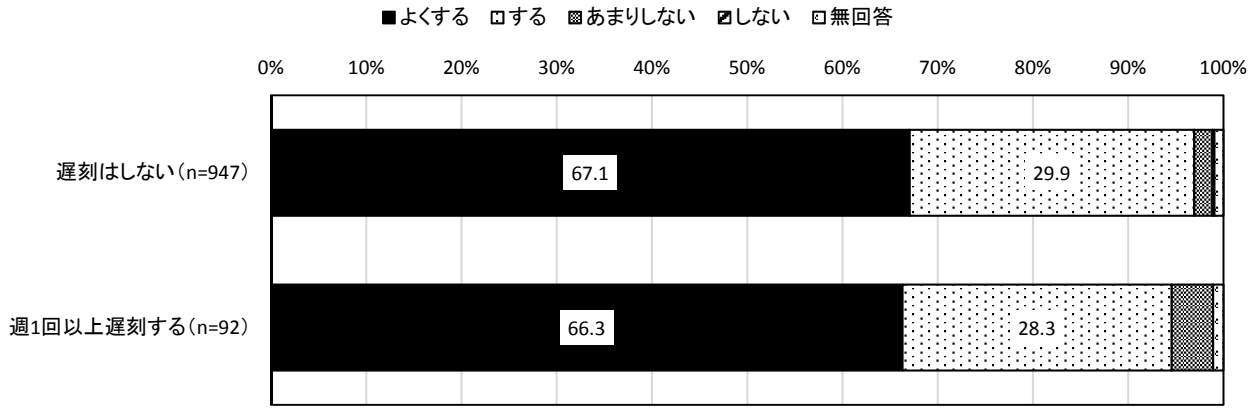

図 188. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

ここでは、子ども票問９において「遅刻はしない」と回答した子どもを「遅刻はしない」、それ以外を選択した子ども（無回答除く）を「週１回以上遅刻する」としている。

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、「よくする」「する」と保護者が回答した割合の合計は 97.0%、「週１回以上遅刻する」子どもにおいては 94.6%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））
（子ども票問 9×保護者票問 14-3）

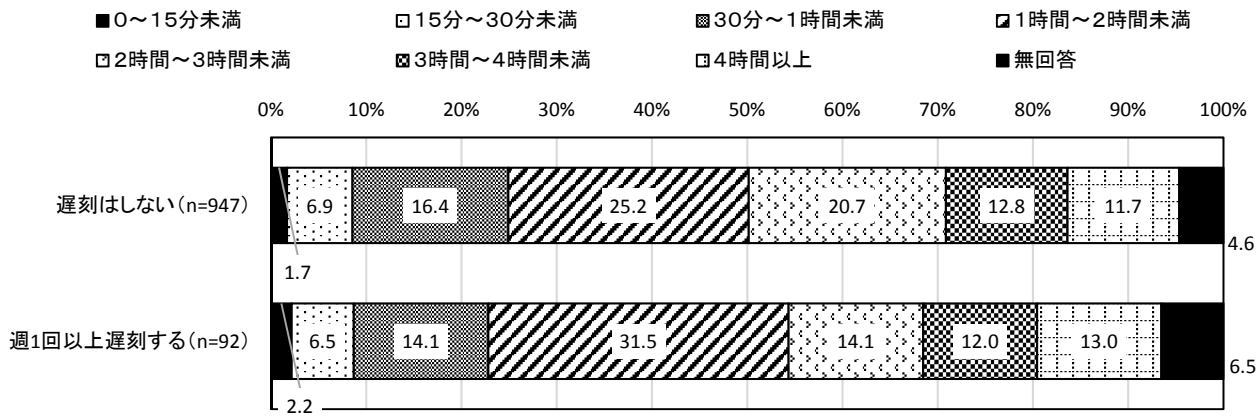

図 189. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、保護者との関わりは「30 分～１時間未満」「２時間～３時間未満」の割合が高く、それぞれ 16.4%、20.7%である。「週１回以上遅刻する」子どもにおいては、「１時間～２時間未満」の割合が高く、31.5%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））
（子ども票問 9×保護者票問 14-3）

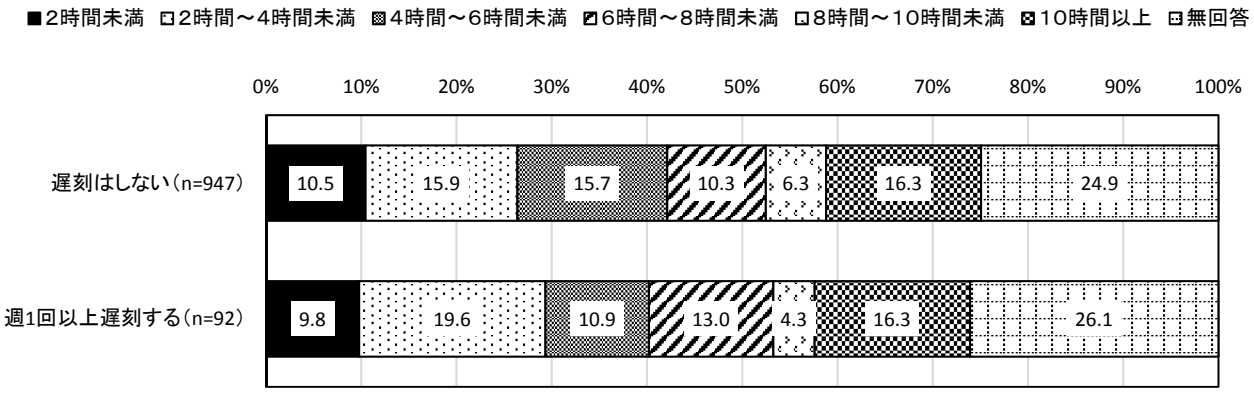

図 190. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、保護者との関わりは「４時間～６時間未満」の割合が高く 16.3%であった。「週１回以上遅刻する」子どもにおいては、「２時間～４時間未満」、「６時間～８時間未満」の割合が高く、それぞれ 19.6%、13.0%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）
（子ども票問 9×保護者票問 14-4）

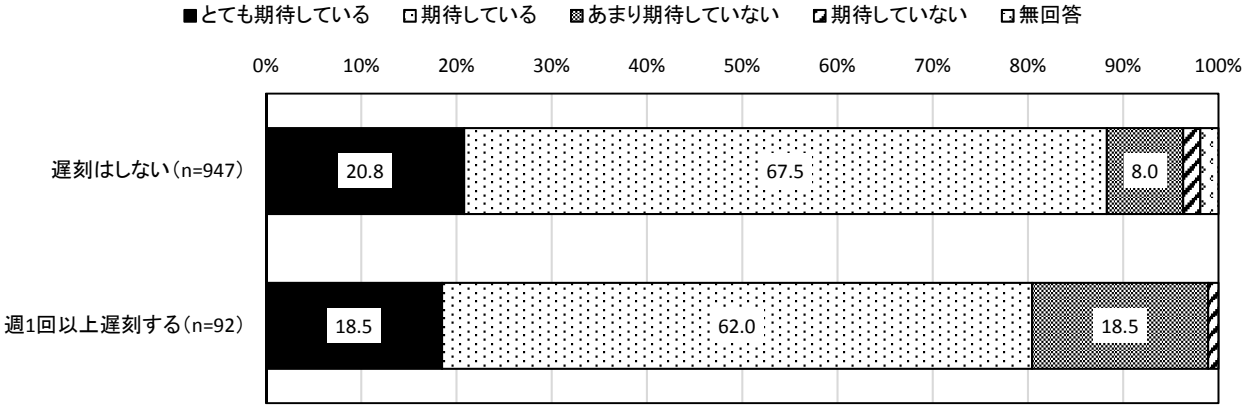

図 191. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、「遅刻はしない」子どもにおいては、保護者は子どもの将来に「とても期待している」と「期待している」の割合が高く、合計すると 88.3%であった。「週１回以上遅刻する」子どもにおいては、「あまり期待していない」の割合が高く、18.5%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）（保護者票問 14-4）

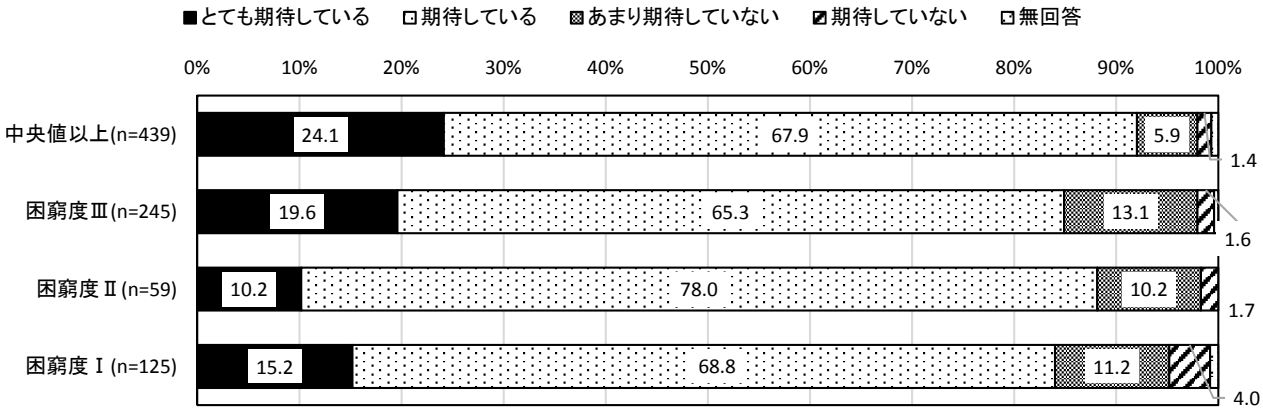

図 192. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「あまり期待していない」「期待していない」が増えている。

困窮度別に見た、希望する進学先（子ども票問 24）

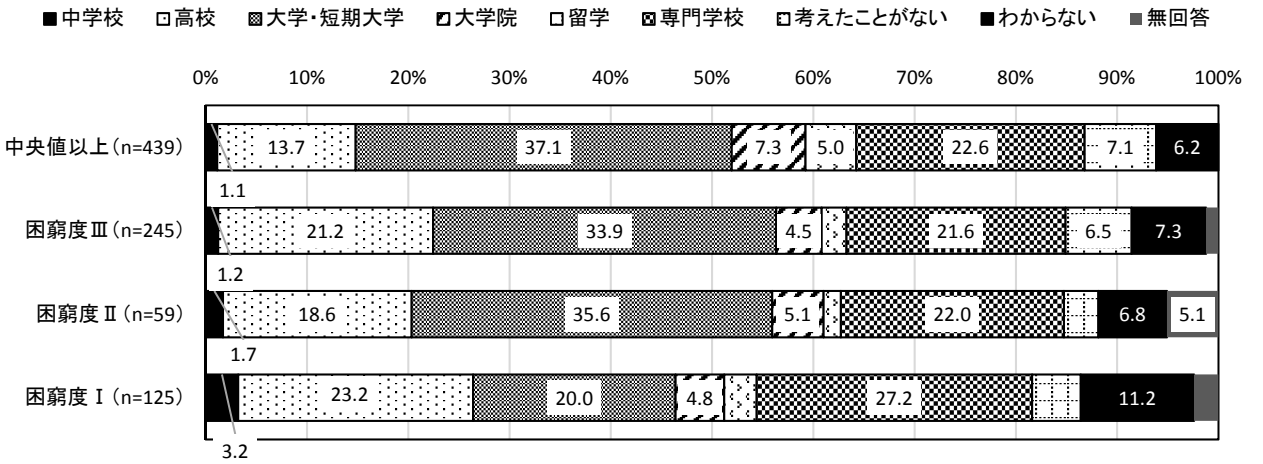

図 193. 困窮度別に見た、希望する進学先

困窮度別に子どもの希望する進学先を見ると、困窮度Ⅰ群では、「中学校」「高校」と回答した割合の合計は 26.4%、「大学・短期大学」と回答した割合は 20.0%、「専門学校」と回答した割合は 27.2%であった。一方、中央値以上群では、「中学校」「高校」と回答した割合の合計は 14.8%、、「大学・短期大学」と回答した割合は 37.1%、「専門学校」と回答した割合は 22.6%であった。

困窮度別に見た、子どもの進学予測（保護者票問 15）

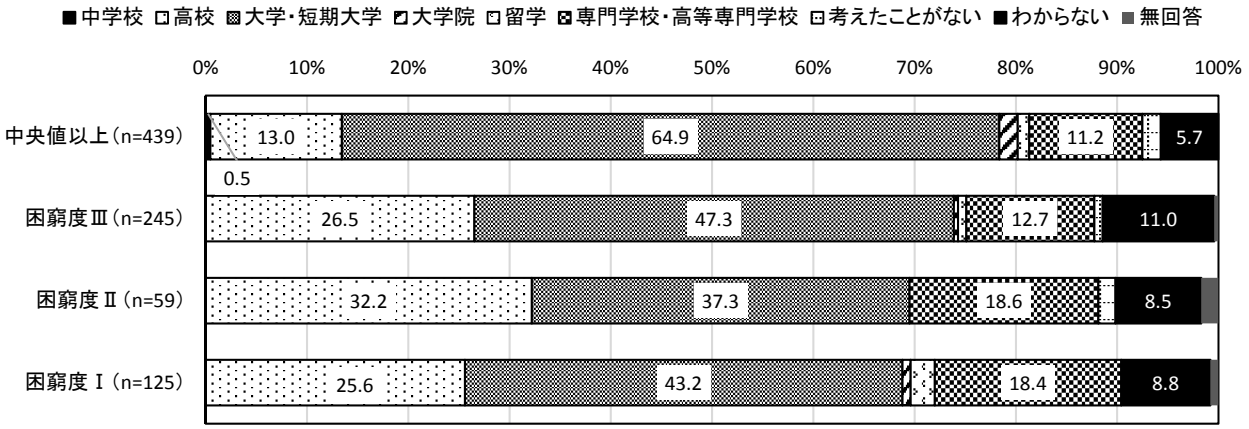

図 194. 困窮度別に見た、子どもの進学予測

困窮度別に子どもの進学予測（保護者による）を見ると、「大学・短期大学」と回答した割合は中央値以上群で 64.9%に対し、困窮度Ⅰ群では 43.2%であった。一方で「専門学校・高等専門学校」と回答した割合は中央値以上群で 11.2%に対し、困窮度Ⅰ群では 18.4%であった。

困窮度別に見た、子どもの進学達成予測（保護者票問 16）

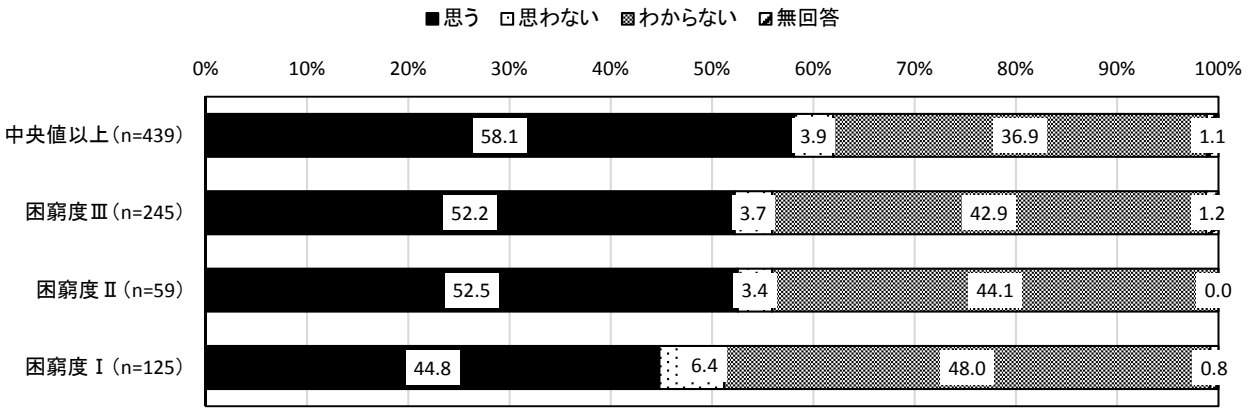

図 195. 困窮度別に見た、子どもの進学達成予測

困窮度別に子どもの進学達成予測（保護者による）を見ると、「思う」と回答した人は中央値以上群で 58.1%に対し、困窮度Ⅰ群では 44.8%であった。

困窮度別に見た、子どもの進学達成「思わない」理由（保護者票問 17）

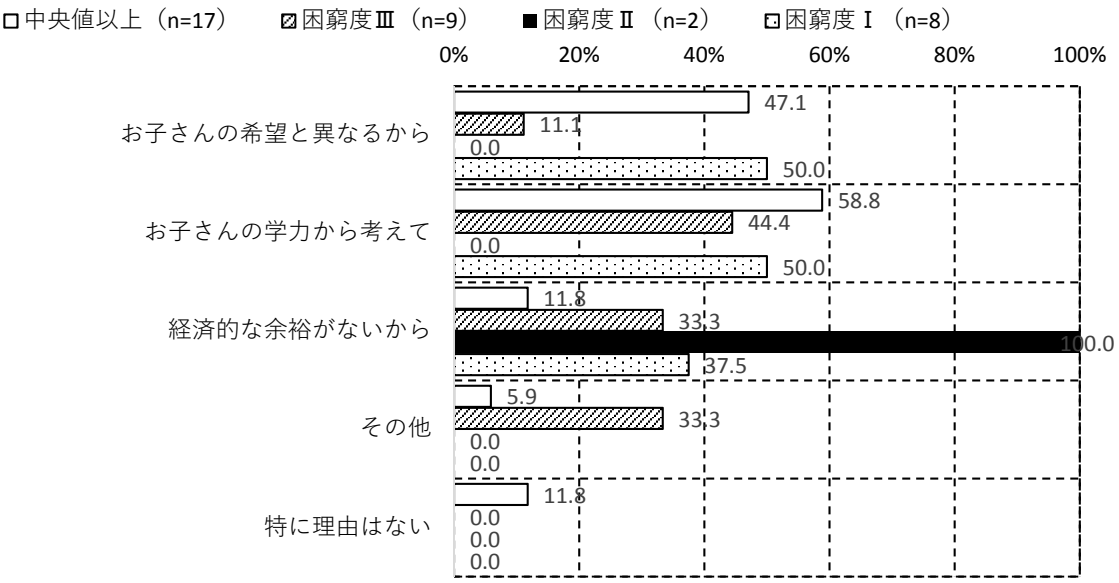

図 196. 困窮度別に見た、子どもの進学達成「思わない」理由

困窮度別に子どもの進学達成「思わない」理由（保護者による）を見ると、「経済的な余裕がないから」は 11.8%だったのに対し、「お子さんの学力から考えて」が 58.8%、「お子さんの希望と異なるから」が 47.1%であった。困窮度群については回答数が少数であり、傾向を述べることができない。

困窮度別に見た、学校への遅刻（子ども票問 9）

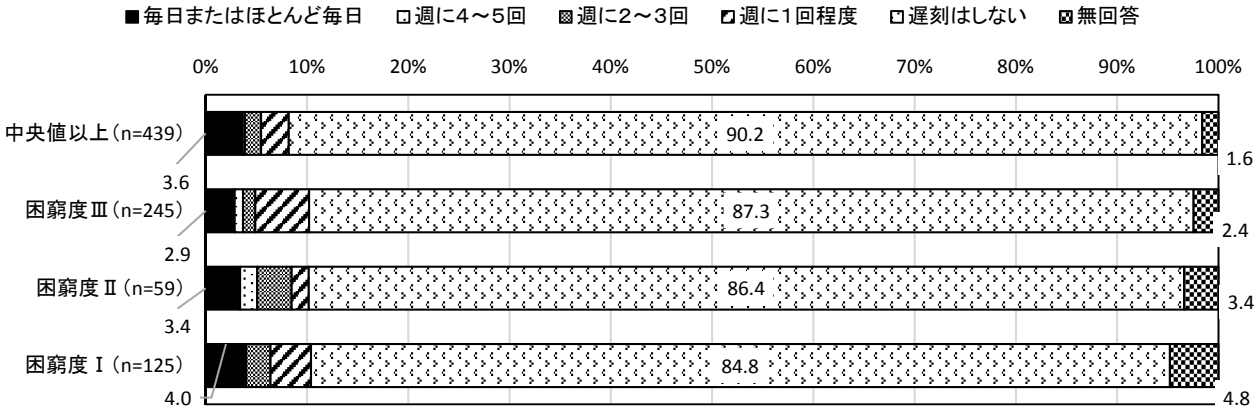

図 197. 困窮度別に見た、学校への遅刻

困窮度別に学校への遅刻を見ると、「遅刻はしない」と回答した割合は、中央値以上群で 90.2%、困窮度Ⅲ群で 87.3%、困窮度Ⅱ群で 86.4%、困窮度Ⅰ群で 84.8%であった。また「無回答」については、中央値以上群では 1.6%に対し、困窮度Ⅰ群では 4.8%であった。

困窮度別に見た、子どもの通学状況（保護者票問 18）

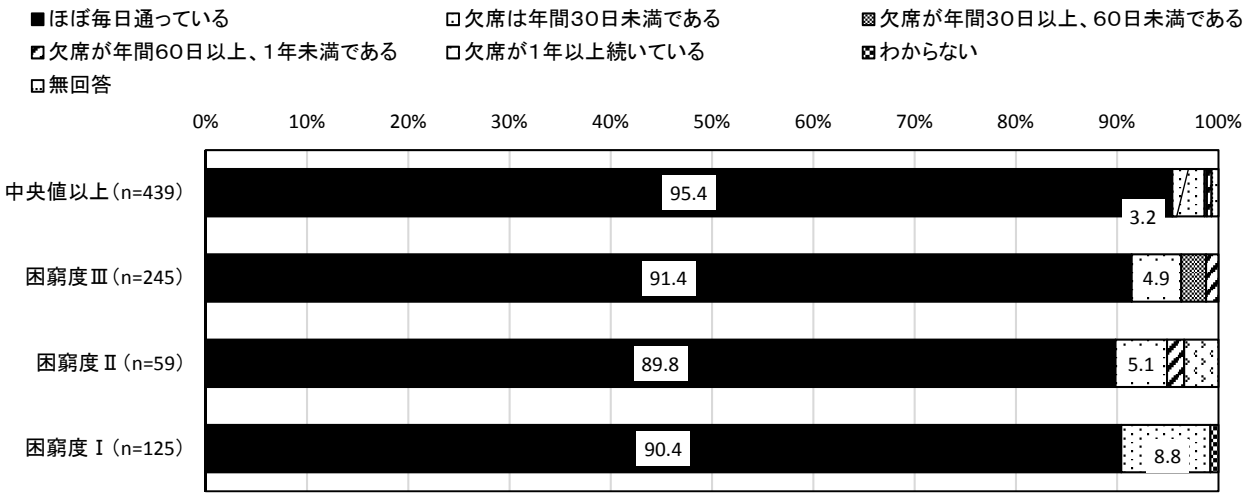

図 198. 困窮度別に見た、子どもの通学状況

困窮度別に子どもの通学状況を見ると、「ほぼ毎日通っている」と回答した割合は、中央値以上群では 95.4%、困窮度Ⅲ群では 91.4%、困窮度Ⅱ群では 89.8%、困窮度Ⅰ群では 90.4%であった。また「欠席は年間 30 日未満である」と回答した割合は、中央値以上群では 3.2%、困窮度Ⅲ群では 4.9%、困窮度Ⅱ群では 5.1%、困窮度Ⅰ群では 8.8%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）（子ども票問 9×子ども票問 10-1）

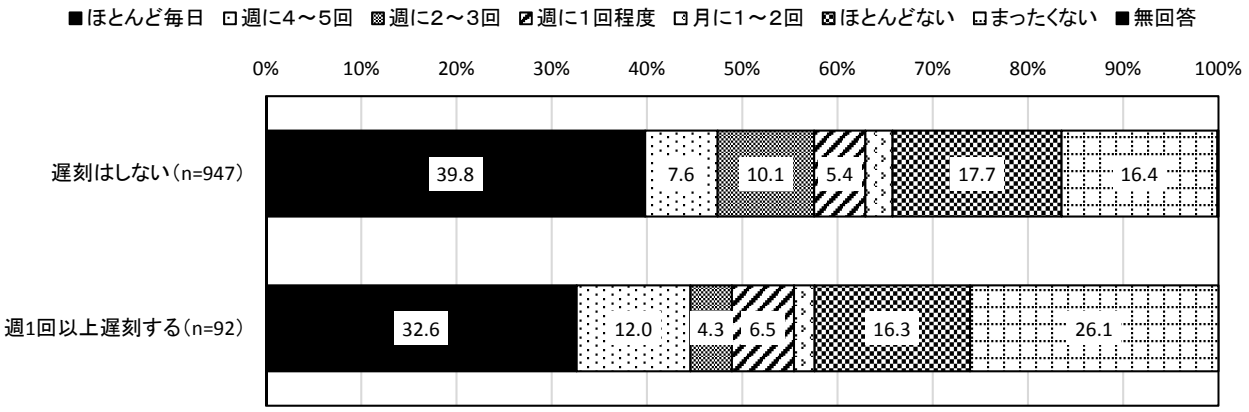

図 199. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 39.8%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 32.6%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 16.4%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 26.1%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-2）

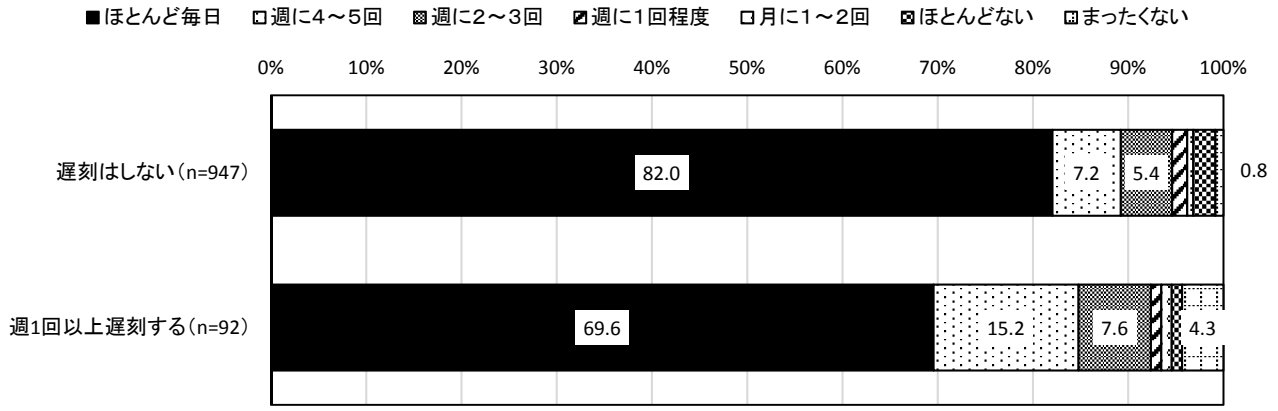

図 200. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 82.0%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 69.6%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 0.8%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 4.3%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-5）

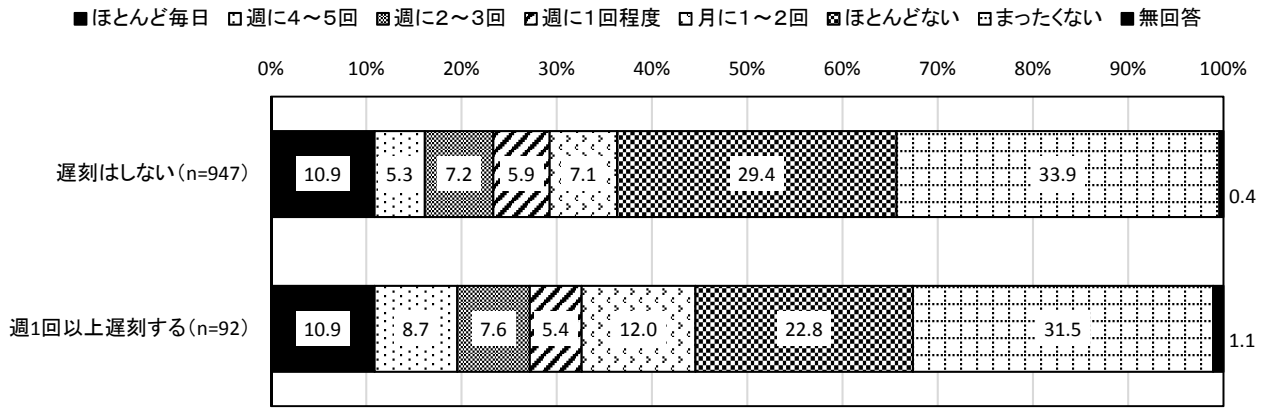

図 201. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 10.9 %に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでも 10.9%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 33.9%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 31.5%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-6）

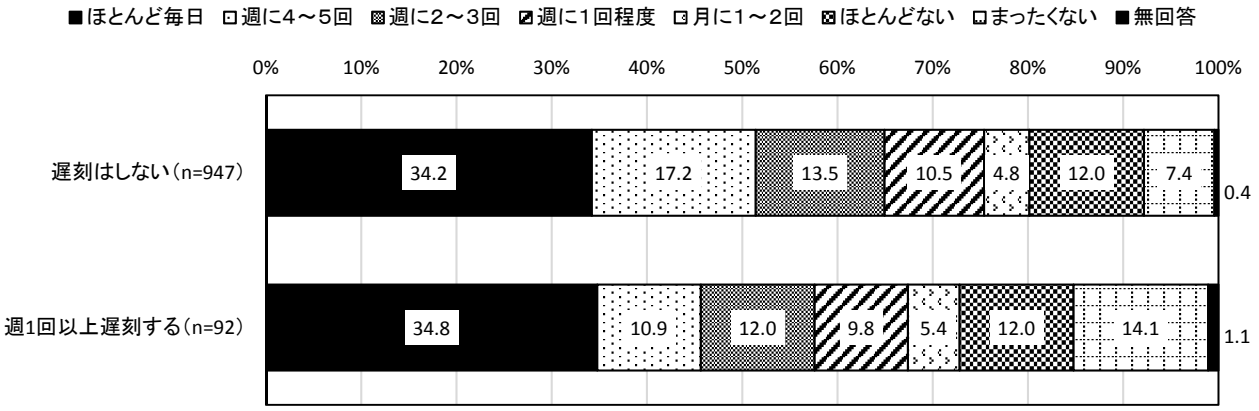

図 202. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 34.2%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 34.8%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 7.4%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 14.1%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-7）

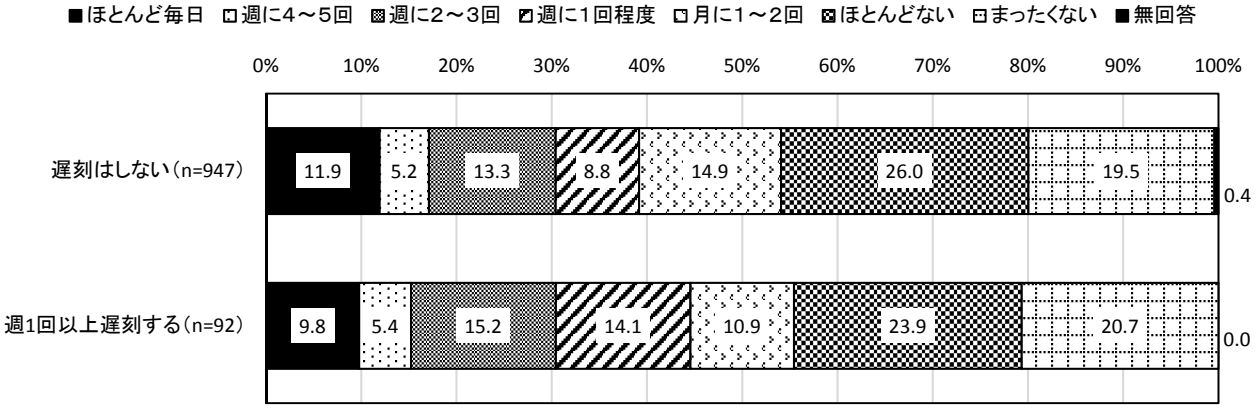

図 203. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 11.9%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 9.8%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 19.5%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 20.7%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-8）

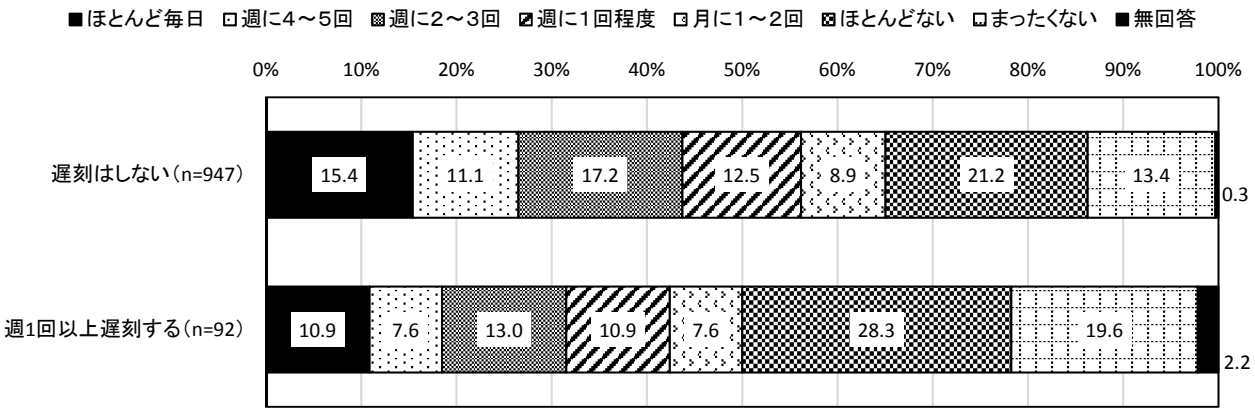

図 204. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 15.4%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 10.9%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 13.4%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 19.6%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-9）

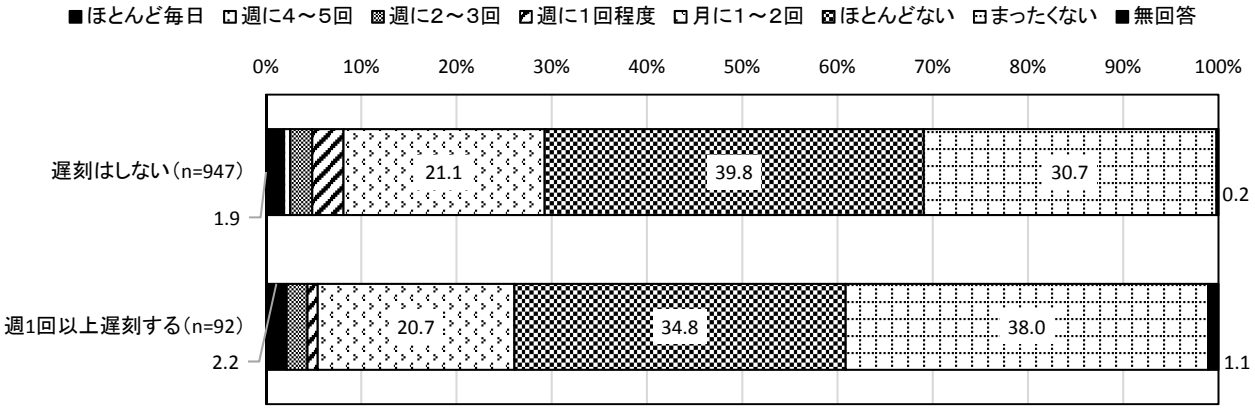

図 205. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 1.9%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 2.2%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 30.7%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 38.0%であった。

学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）
（子ども票問 9×子ども票問 10-10）

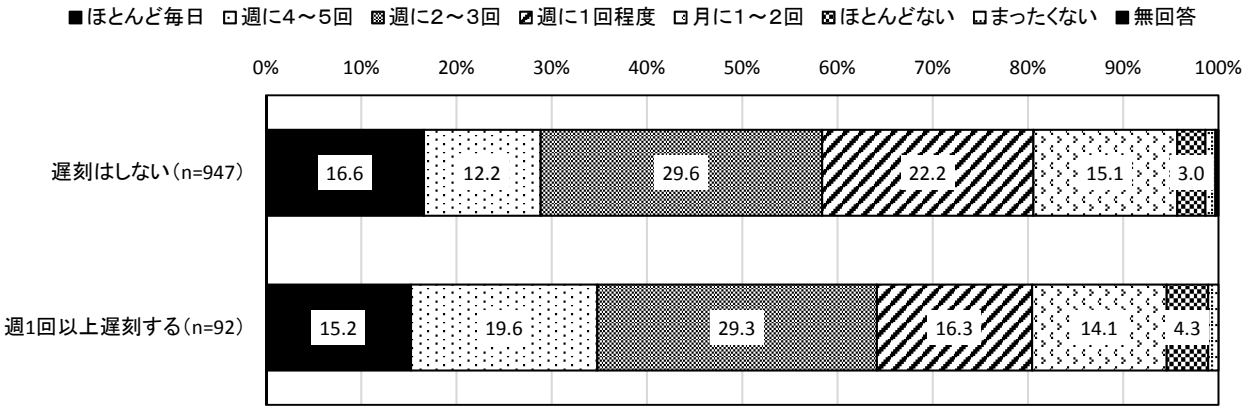

図 206. 学校への遅刻別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）

学校への遅刻別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「遅刻をしない」子どもでは 16.6%に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもでは 15.2%であった。

学校への遅刻別に見た、悩んでいること（子ども票問 9×子ども票問 18）

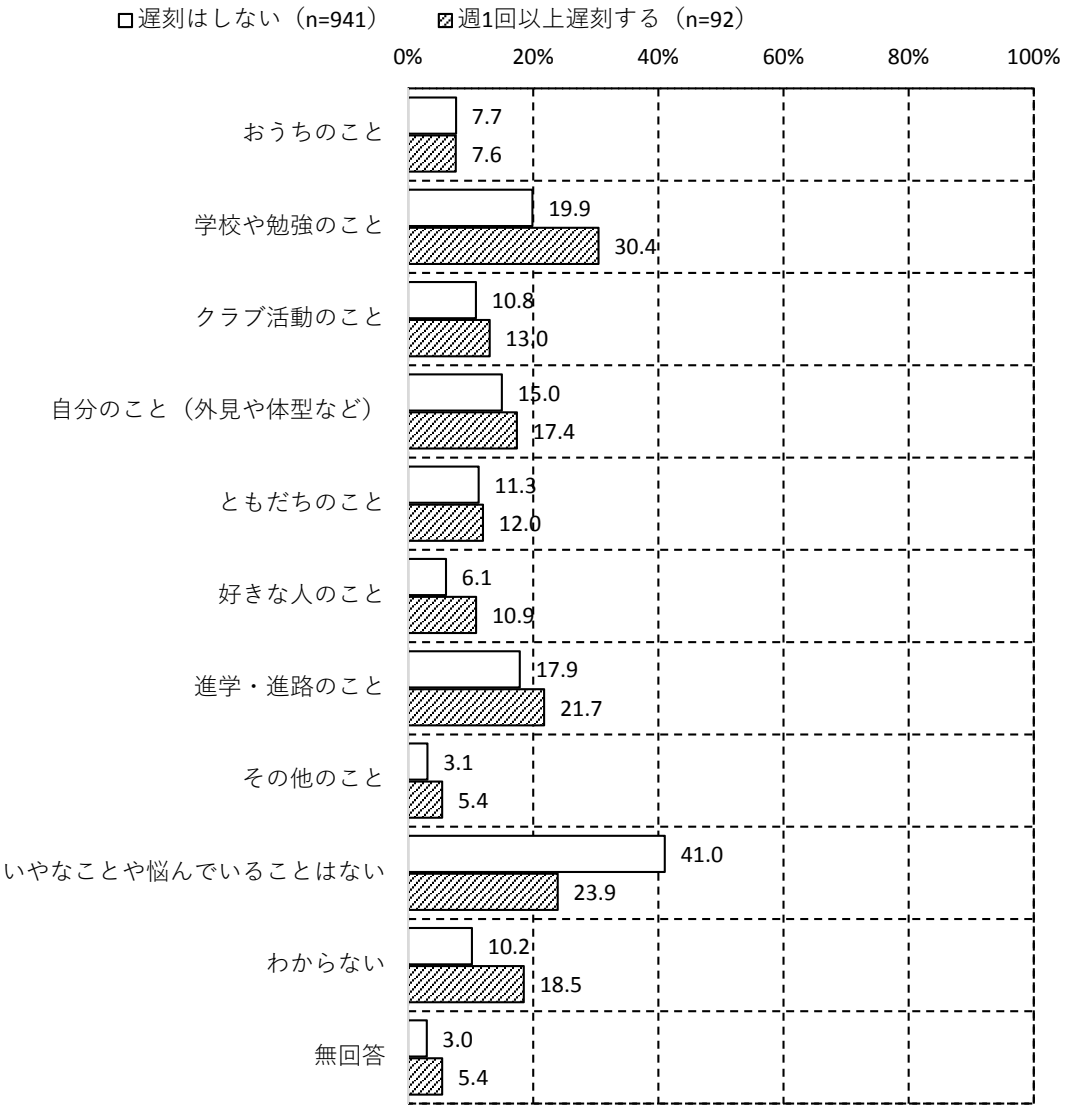

図 207. 学校への遅刻別に見た、悩んでいること

学校への遅刻別に子どもが悩んでいることを見ると、「週 1 回以上遅刻する」子どもの方が「遅刻はしない」子どもよりも、「学校や勉強のこと」では 10.5 ポイント、「わからない」では 8.3 ポイント、「好きな人のこと」では 4.8 ポイント、「進学・進路のこと」では 3.8 ポイント、回答した割合が高い。また、「遅刻はしない」子どもにおいては、「いやなことや悩んでいることはない」と回答した割合が 41.0%であった。

学校への遅刻別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数
（子ども票問 9×子ども票問 21）

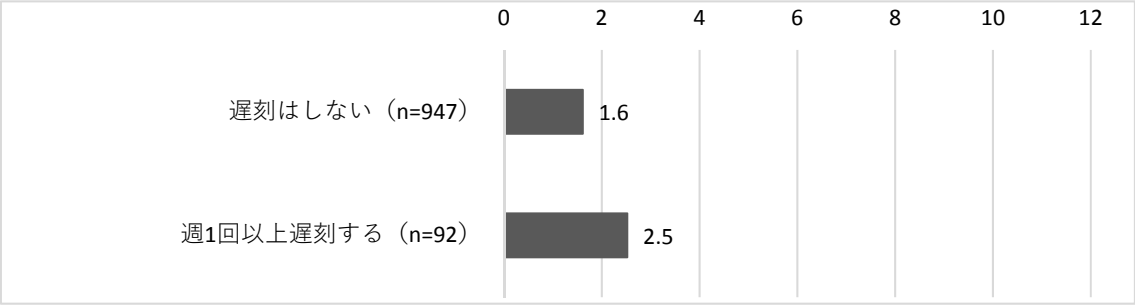

図 208. 学校への遅刻別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数

学校への遅刻別に子どもが自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「遅刻はしない」子どもは、平均 1.6 個該当するのに対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもは、平均 2.5 個該当していた。

学校への遅刻別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）
（子ども票問 9×子ども票問 23）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 155 上の説明参照。

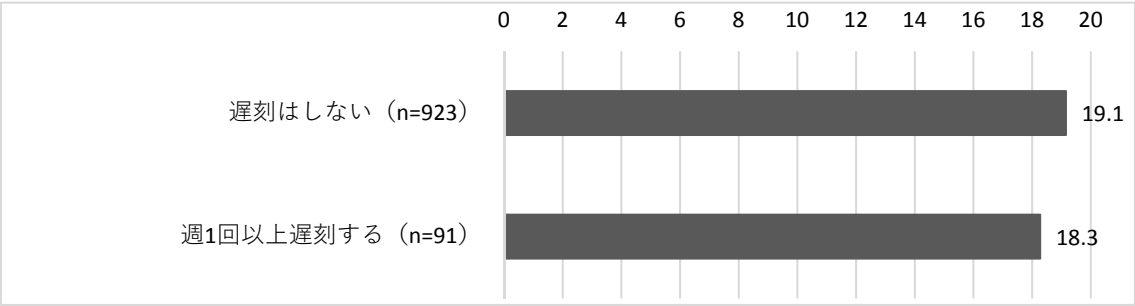

図 209. 学校への遅刻別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

学校への遅刻別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「遅刻はしない」子どもは、19.1 に対し、「週 1 回以上遅刻する」子どもは、18.3 であった。

学校への遅刻別に見た、希望する進学先（子ども票問 9×子ども票問 24）

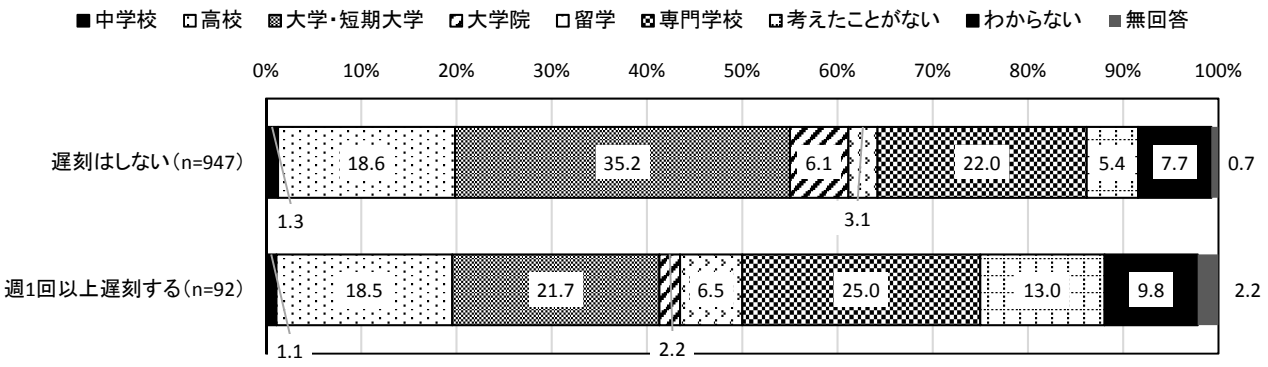

図 210. 学校への遅刻別に見た、希望する進学先

学校への遅刻別に子どもの希望する進学先を見ると、「大学・短期大学」と回答した割合は、「遅刻はしない」子どもでは 35.2%に対し、「週 1 回以上遅刻する」と回答した割合は 21.7%であった。また「考えたことがない」と回答した割合は、「遅刻はしない」子どもでは 5.4%に対し、「週 1 回以上遅刻する」と回答した割合は 13.0%であった。

学校への遅刻別に見た、学習理解度（子ども票問 9×子ども票問 15）

※学習理解度について、「1. よくわかる」～「4. ほとんどわからない」まで 4 項目で評定させた。数値が低いほど、学習理解度が高いことを表す。

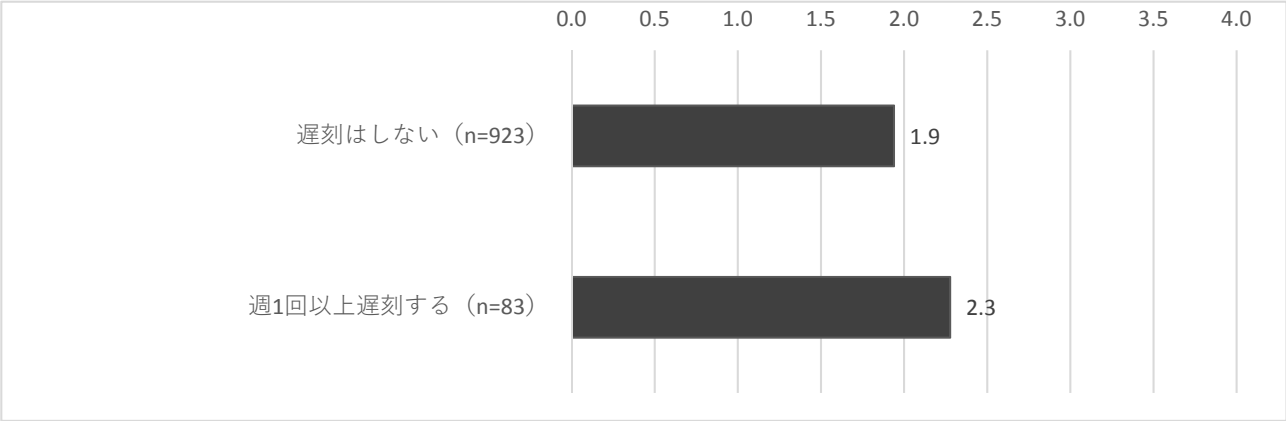

図 211. 学校への遅刻別に見た、学習理解度

学校への遅刻別に子どもの学習理解度を見ると、「遅刻はしない」子どもでは 1.9 に対し、「週 1 回以上遅刻する」子ども 2.3 であった。

登校状況別に見た、悩んでいること（保護者票問 18×子ども票問 18）

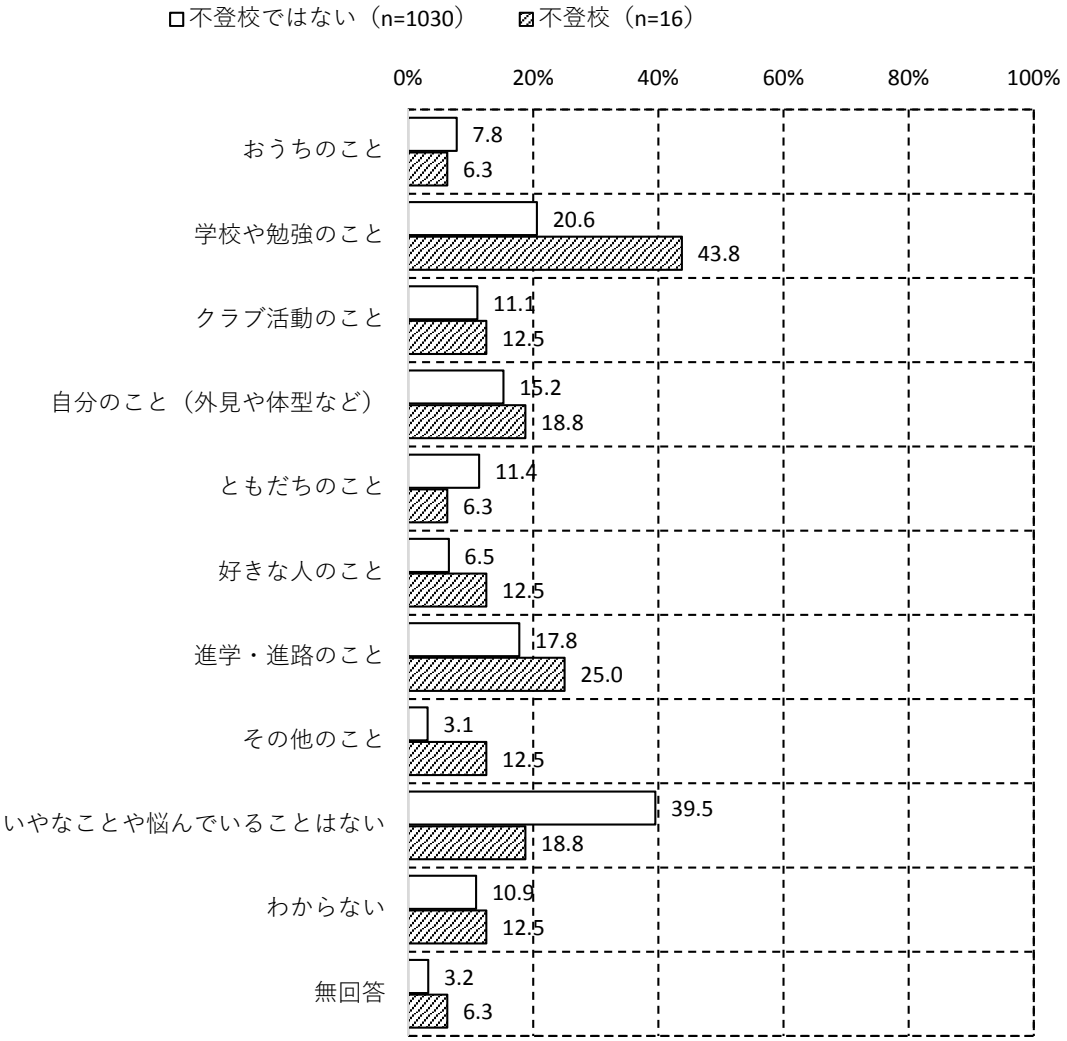

図 212. 登校状況別に見た、悩んでいること

ここでは、保護者票問 18 において「ほぼ毎日通っている」「欠席は年間 30 日未満である」を「不登校ではない」、「欠席が年間 30 日以上、60 日未満である」「欠席が年間 60 日以上、１年未満である」「欠席が１年以上続いている」を「不登校」としている。

登校状況別に子どもの悩んでいることを見ると、「学校や勉強のこと」に悩んでいる子どもは「不登校ではない」子どもにおいて 20.6%に対し、「不登校」の子どもは 43.8%であった。また、「不登校ではない」子どもでは、「いやなことや悩んでいることはない」と回答したのは 39.5%であった。

登校状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数（保護者票問 18×子ども票問 21）

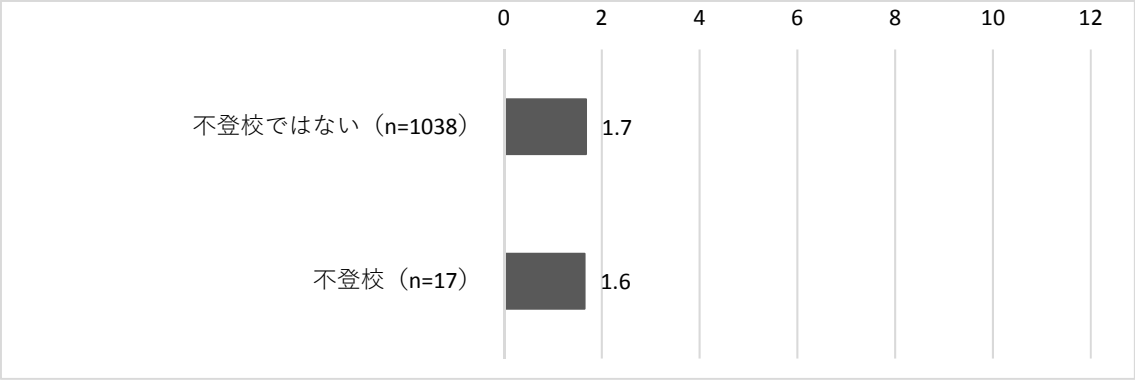

図 213. 登校状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数

登校状況別に子どもの自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「不登校ではない」子どもでは平均 1.7 個であり、「不登校」の子どもでは約 1.6 個であった。

登校状況別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）（保護者票問 18×子ども票問 23）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 155 上の説明参照。

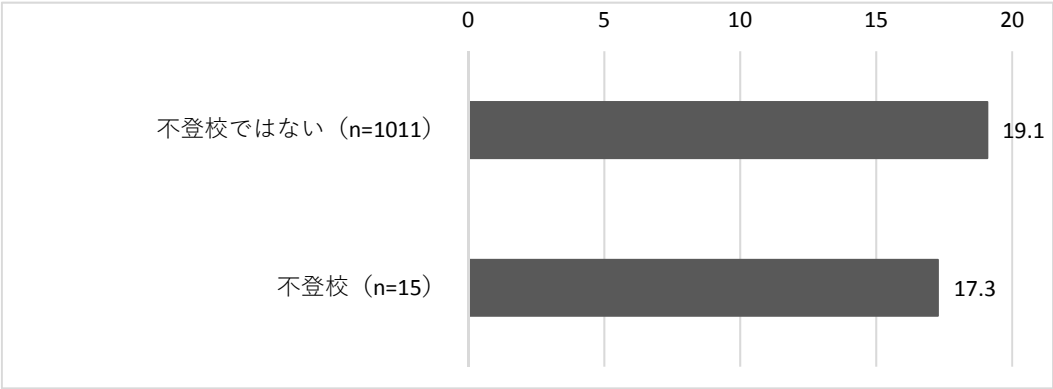

図 214. 登校状況別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

登校状況別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「不登校ではない」子どもは、19.1 に対し、「不登校」の子どもは、17.3 であった。

登校状況別に見た、希望する進学先（保護者票問 18×子ども票問 24）

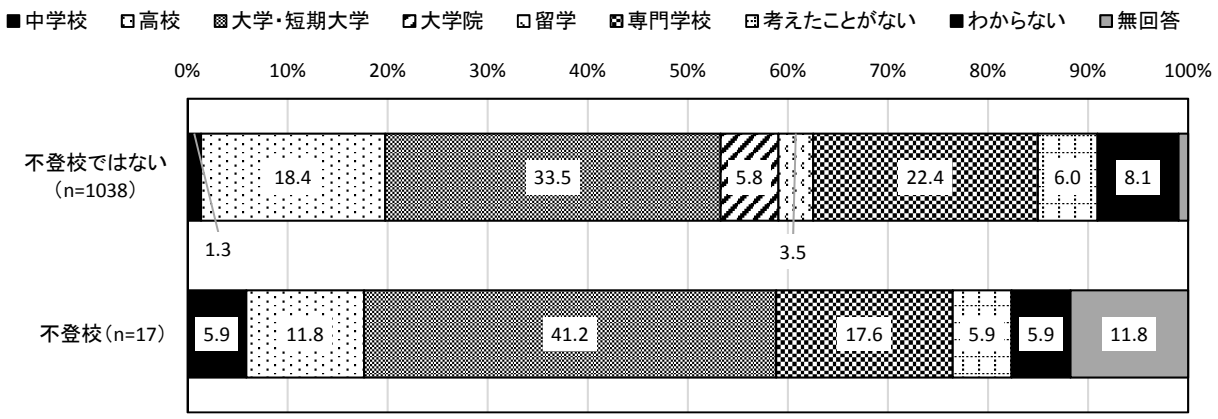

図 215. 登校状況別に見た、希望する進学先

登校状況別に子どもの希望する進学先を見ると、「大学・短期大学」と回答した割合が「不登校ではない」子どもでは 33.5%に対し、「不登校」の子どもでは 41.2%であった。

困窮度別に見た、保護者の在宅時間（保護者票問 10）

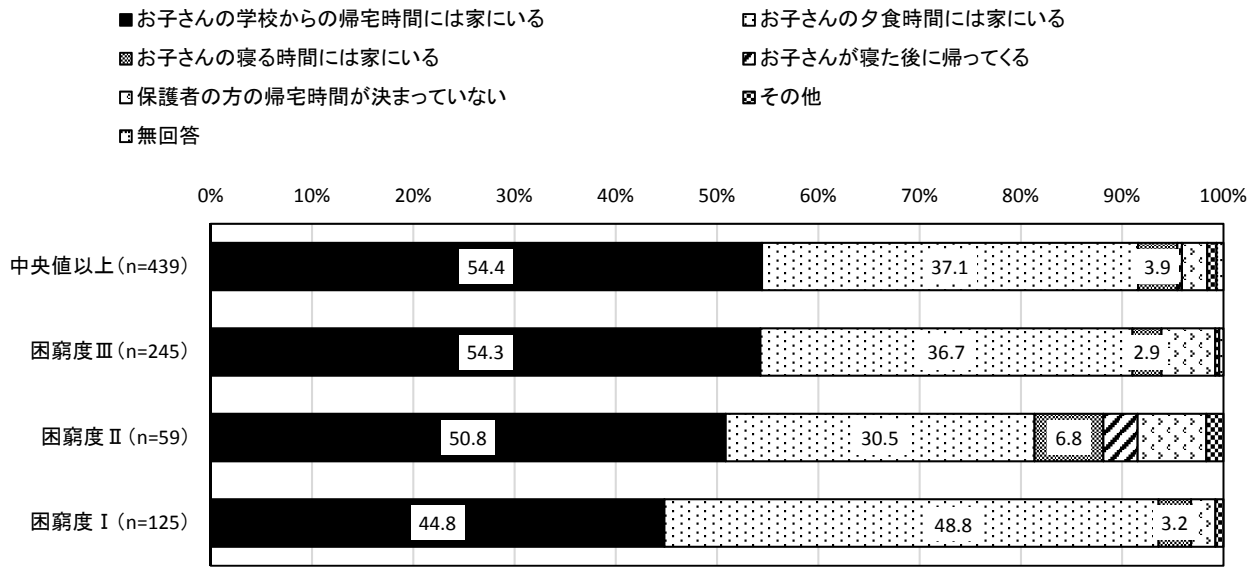

図 216. 困窮度別に見た、保護者の在宅時間

困窮度別に保護者の在宅時間を見ると、「お子さんの学校からの帰宅時間には家にいる」と回答した割合は中央値以上群では 54.4%、困窮度Ⅲ群では 54.3%、困窮度Ⅱ群では 50.8%、困窮度Ⅰ群では 44.8%であった。また、困窮度Ⅰ群では「お子さんの夕食時間には家にいる」と回答した割合が高く、48.8%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）（保護者票問 14-1）

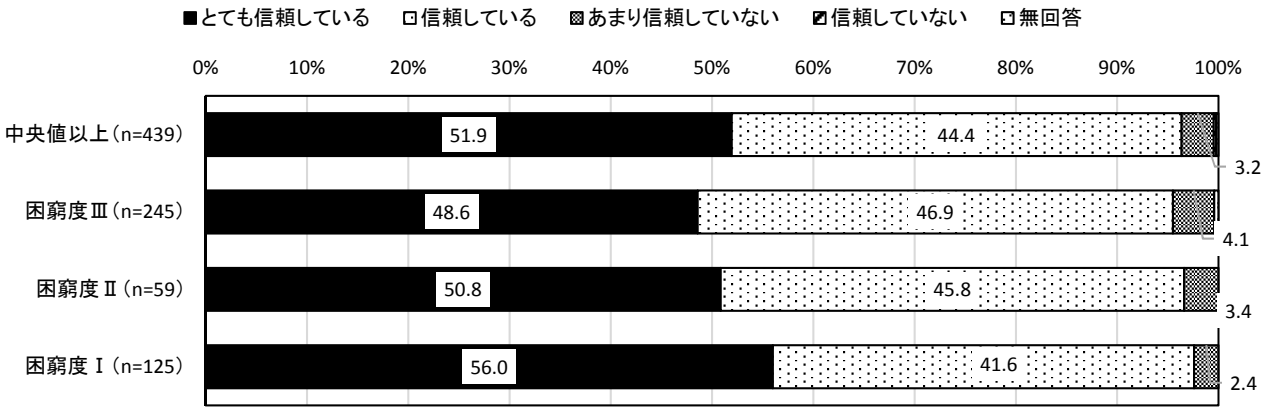

図 217. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもへの信頼度）を見ると、「とても信頼している」と回答した割合は、中央値以上群では 51.9%に対し、困窮度Ⅰ群では 56.0%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）（保護者票問 14-2）

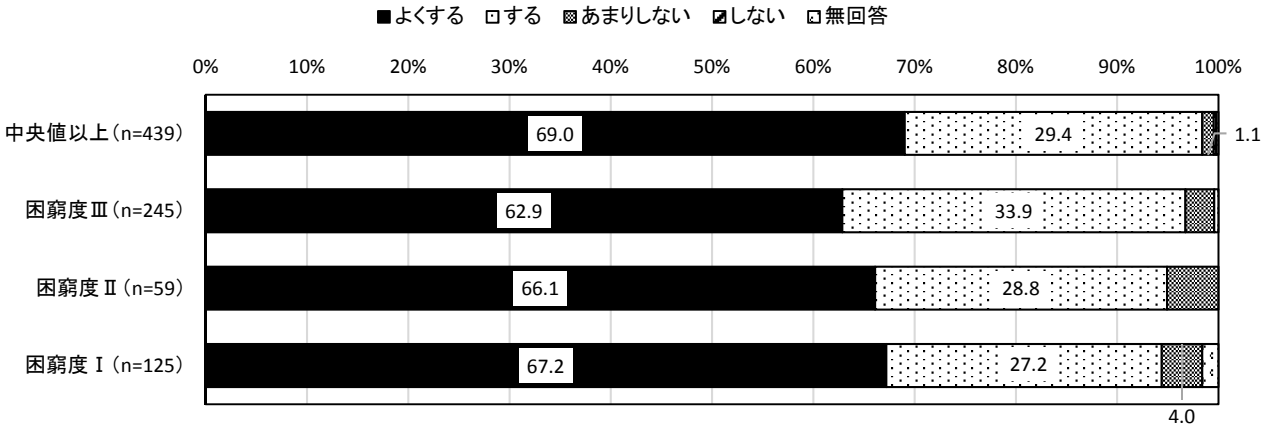

図 218. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと会話）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもと会話）を見ると、「あまりしない」と回答した割合は、中央値以上群では 1.1%に対し、困窮度Ⅰ群では 4.0%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））（保護者票問 14-3）

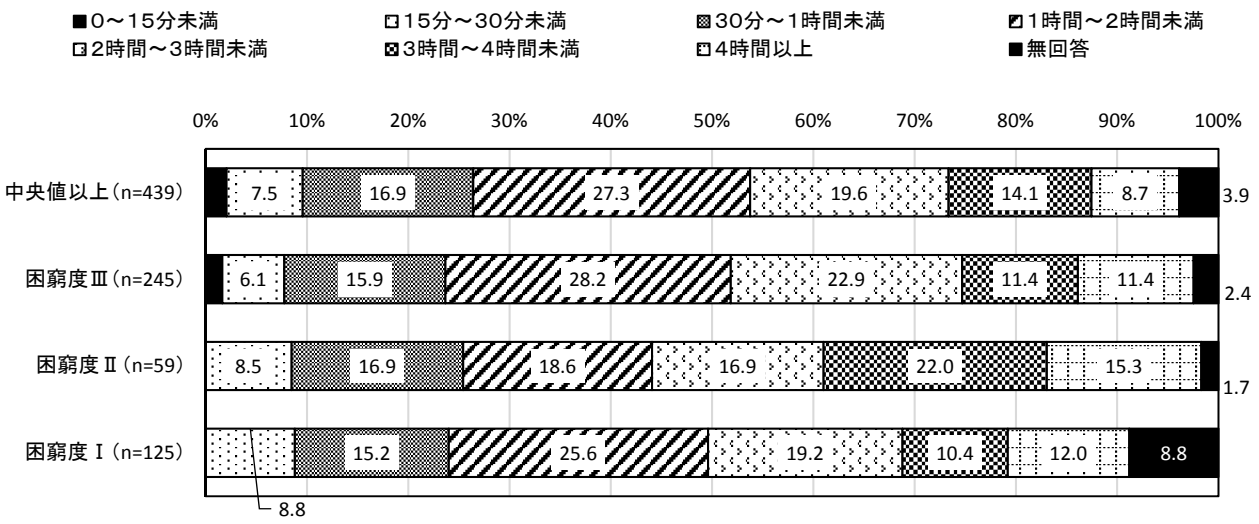

図 219. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（平日））を見ると、中央値以上群、困窮度Ⅰ群ともに「1 時間～2 時間未満」と回答した割合が高く、それぞれ 27.3%、25.6%であった。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））（保護者票問 14-3）

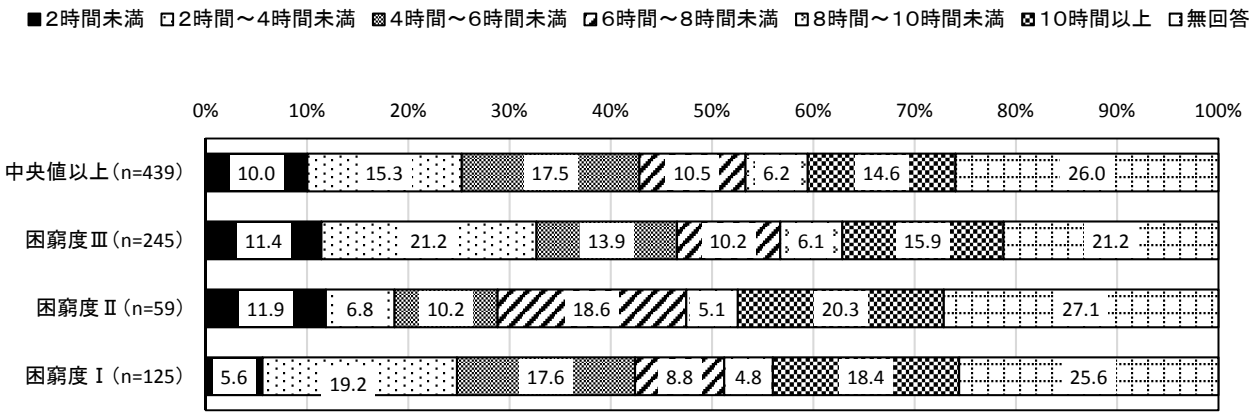

図 220. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））

困窮度別に保護者と子どもの関わり（子どもと一緒にいる時間（休日））を見ると、「２時間未満」と回答した割合は、中央値以上群で 10.0%に対し、困窮度Ⅰ群では 5.6%であった。またいずれの群も「無回答」が多かった。

＜家庭生活・学習に関する考察＞

家庭生活・学習について、困窮度の視点から考察する。まず、おうちの大人との関わりを見ると、困窮度Ⅰ群では、朝食を一緒に摂ることが「まったくない」と回答する割合が顕著に増加する。宿題をみてもらう、一緒に文化活動をするに関しても「まったくない」と回答する割合は同じ傾向を示した。次に子どもの学習については、困窮度が高まるにつれて、1 日当たりの勉強量が「まったくしない」「30 分より少ない」「30 分以上、1 時間より少ない」と回答する子どもの割合が増加し（中央値以上群では 38.0%、困窮度Ⅰ群では 48.0%）、それに関連して学校の勉強について「よくわかる」「だいたいわかる」と回答する子どもの割合が減少している（中央値以上群では 84.6%、困窮度Ⅰ群では 76.8%）。授業以外の読書時間は、困窮度を問わず「まったくしない」と回答した割合は 30%を越し困窮度Ⅱ群では 44.1%と最も高かった。また、生活習慣との関連で勉強と読書の習慣を見ると、起床時間が決まっていない子ども、朝食を摂るのが週５回以下の子どもにおいては、勉強・読書ともに「まったくしない」・「30 分より少ない」回答の割合が高く、特に朝食を摂るのが週５回以下の子どもにおいては、読書を「まったくしない」と回答した割合は 43.8%と高かった。困窮度別に勉強時間と学習理解度の関連を見ると、同じ勉強時間であっても困窮度が高くなると学習理解度が低くなることが示された。

子どもの将来に関して、困窮度が高まるにつれて「高校」までと答える子どもの割合が増加し（中央値以上群では 13.7%、困窮度Ⅰ群では 23.2%）、「大学・短期大学」までと答える割合が減少したが（中央値以上群では 37.1%、困窮度Ⅰ群では 20.0%）、この傾向は保護者の回答と同様で子どもの学力・経済的余裕に依拠している。

子どもの遅刻状況について「遅刻はしない」と答えた割合は、困窮度が高まるにつれて下がる傾向にあった。週 1 回以上遅刻する子どもに着目すると、保護者と子どもの関わりにおいて、一緒に朝食を食べたり、社会の出来事を話したり、文化活動をしたりすることが「まったくない」と回答する割合が高かった。また、遅刻をしている子どもは、していない子どもに比べ、学校や勉強のこと、進学や進路のことで悩んでいることがうかがえる。

通学状況を見ると、不登校の子どもはそうでない子どもよりも、学校や勉強、進学・進路、自分のことに悩む割合が高かった。自己効力感（セルフ・エフィカシ―）も低かった。

自由記述では、保護者の仕事による多忙から、子どもとの関わる時間が十分にもてていない回答が多く見受けられた。また、母親が働いているため、夕食が遅くなってしまい、結果として就寝が遅くなることや、子どもの宿題をきちんとみることができないといった声が挙げられた。

３－５．対人関係

困窮度別に見た、放課後に過ごす場所（子ども票問 13）

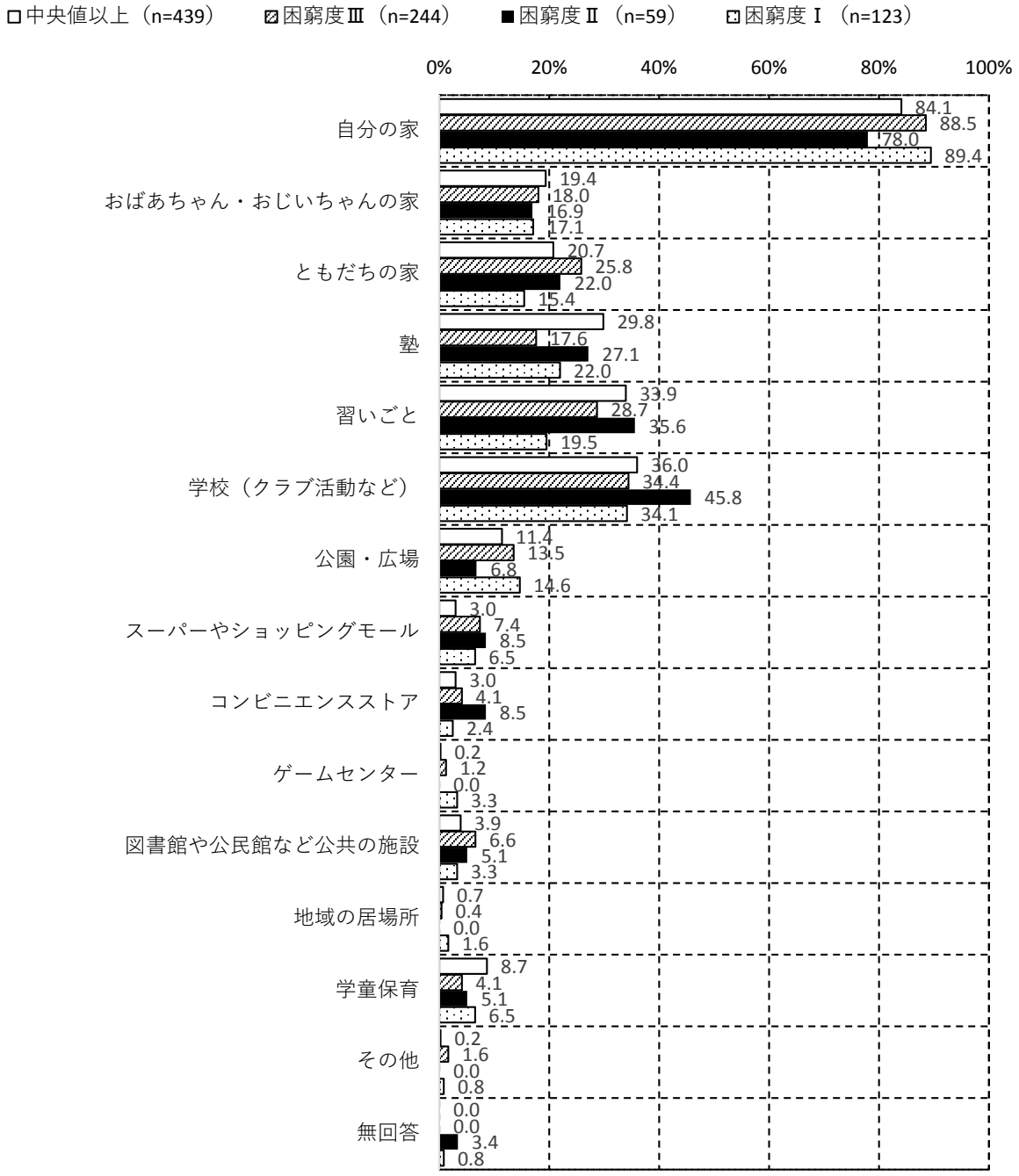

図 221. 困窮度別に見た、放課後に過ごす場所

困窮度別に子どもが放課後に過ごす場所について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると「ゲームセンター」3.3%（中央値以上群に対して、14.3 倍）、「その他」0.8%（中央値以上群に対して、3.6 倍）、「スーパーやショッピングモール」6.5%（2.2 倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られた。また、中央値以上群では「習い事」33.9%（困窮度Ⅰ群に対して、1.7 倍）、「塾」29.8%（1.4 倍）が高かった。

困窮度別に見た、放課後一緒に過ごす人（子ども票問 12）

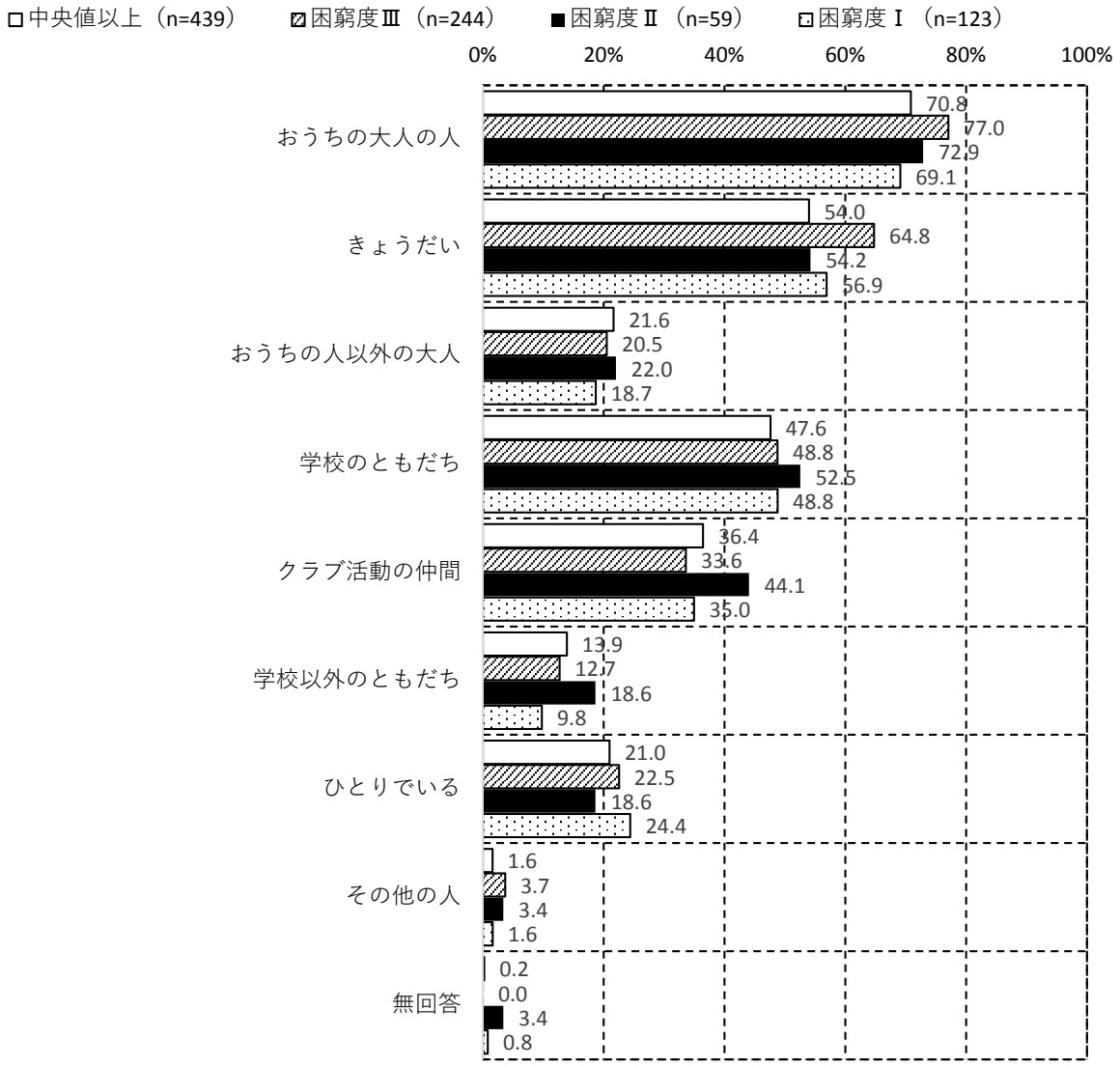

図 222. 困窮度別に見た、放課後一緒に過ごす人

困窮度別に子どもが放課後一緒に過ごす人について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目すると、中央値以上群では「学校以外のともだち（地域のスポーツクラブ、近所のともだちなど）」13.9%（困窮度Ⅰ群に対して、1.4 倍）、「おうちの人以外の大人（近所の大人、塾や習いごとの先生など）」21.6%（1.2 倍）が高かった。

困窮度別に見た、子どもと過ごす時間が長い人（保護者票問 11）

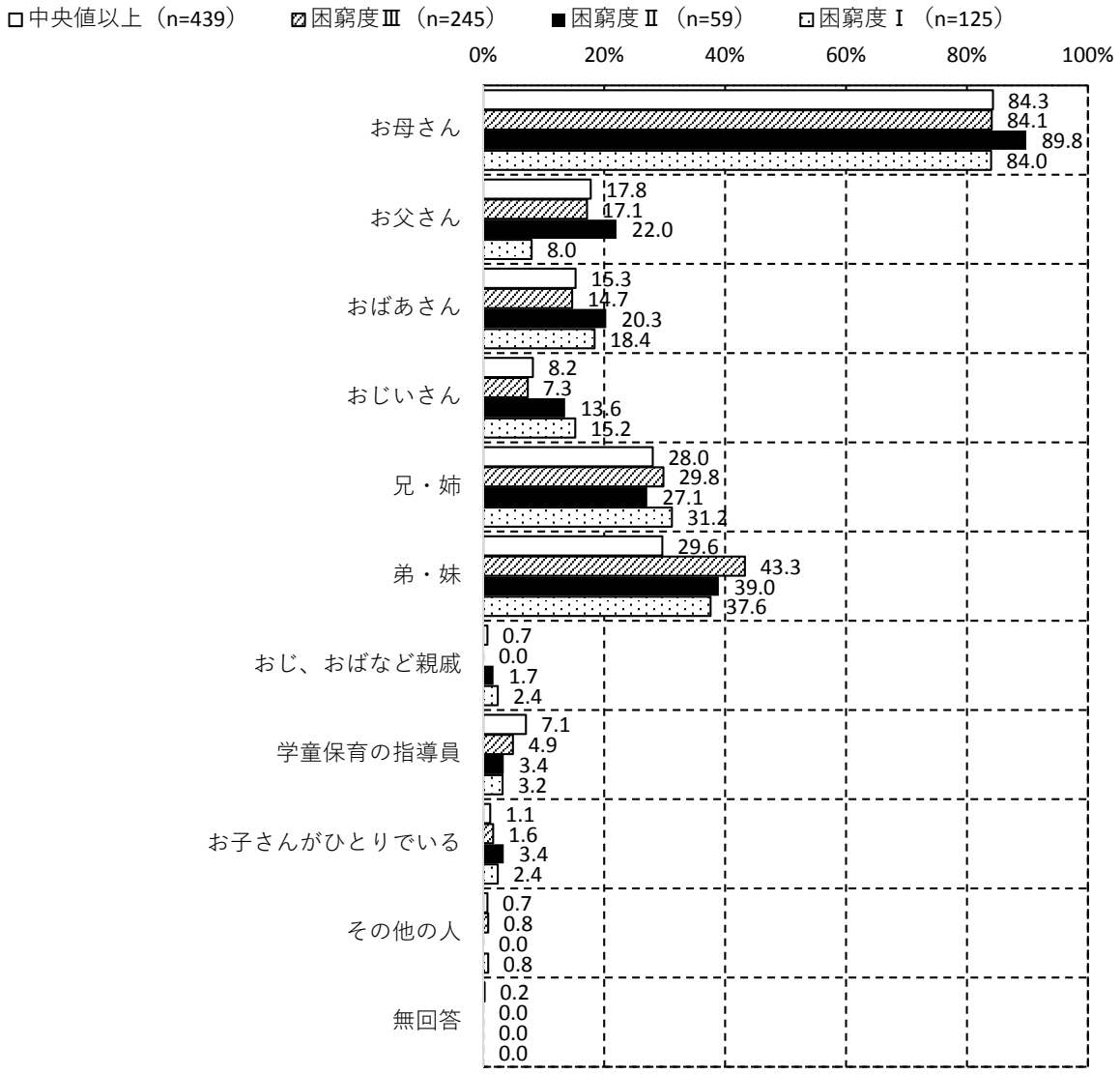

図 223. 困窮度別に見た、子どもと過ごす時間が長い人

困窮度別に保護者が放課後に子どもと過ごす時間が長い人について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「おじ、おばなど親戚」2.4%（中央値以上群に対して、3.5 倍）、「お子さんがひとりでいる」2.4%（2.1 倍）、「おじいさん」15.2%（1.9 倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られた。

困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと（子ども票問 11）

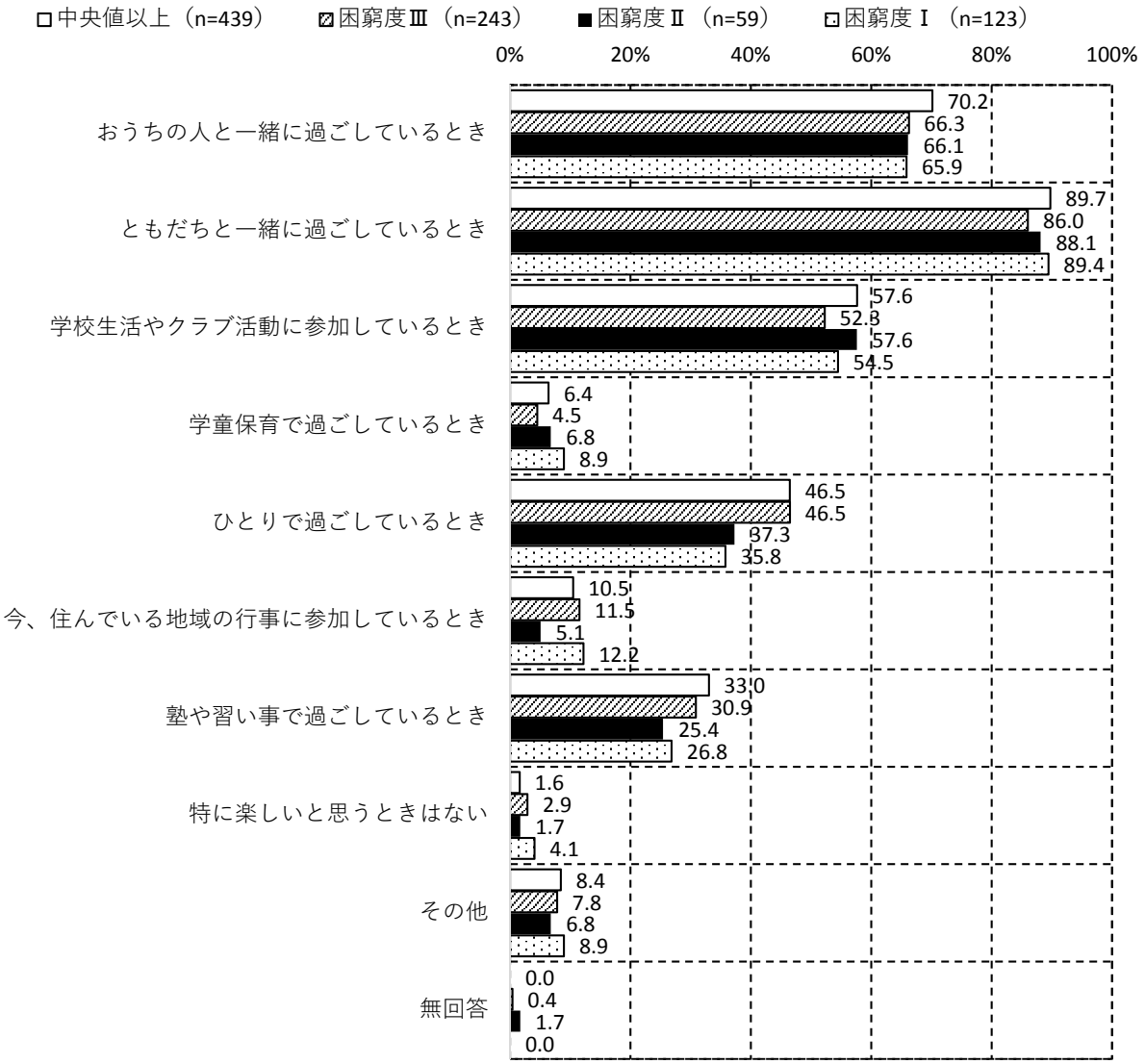

図 224. 困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと

困窮度別に子どもが毎日の生活で楽しいことについて、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、中央値以上群の数値を挙げると、「ひとりで過ごしているとき」46.5%（困窮度Ⅰ群に対して、1.3 倍）、「塾や習い事で過ごしているとき」33.0%（1.2 倍）が高かった。

困窮度別に見た、悩んでいること（子ども票問 18）

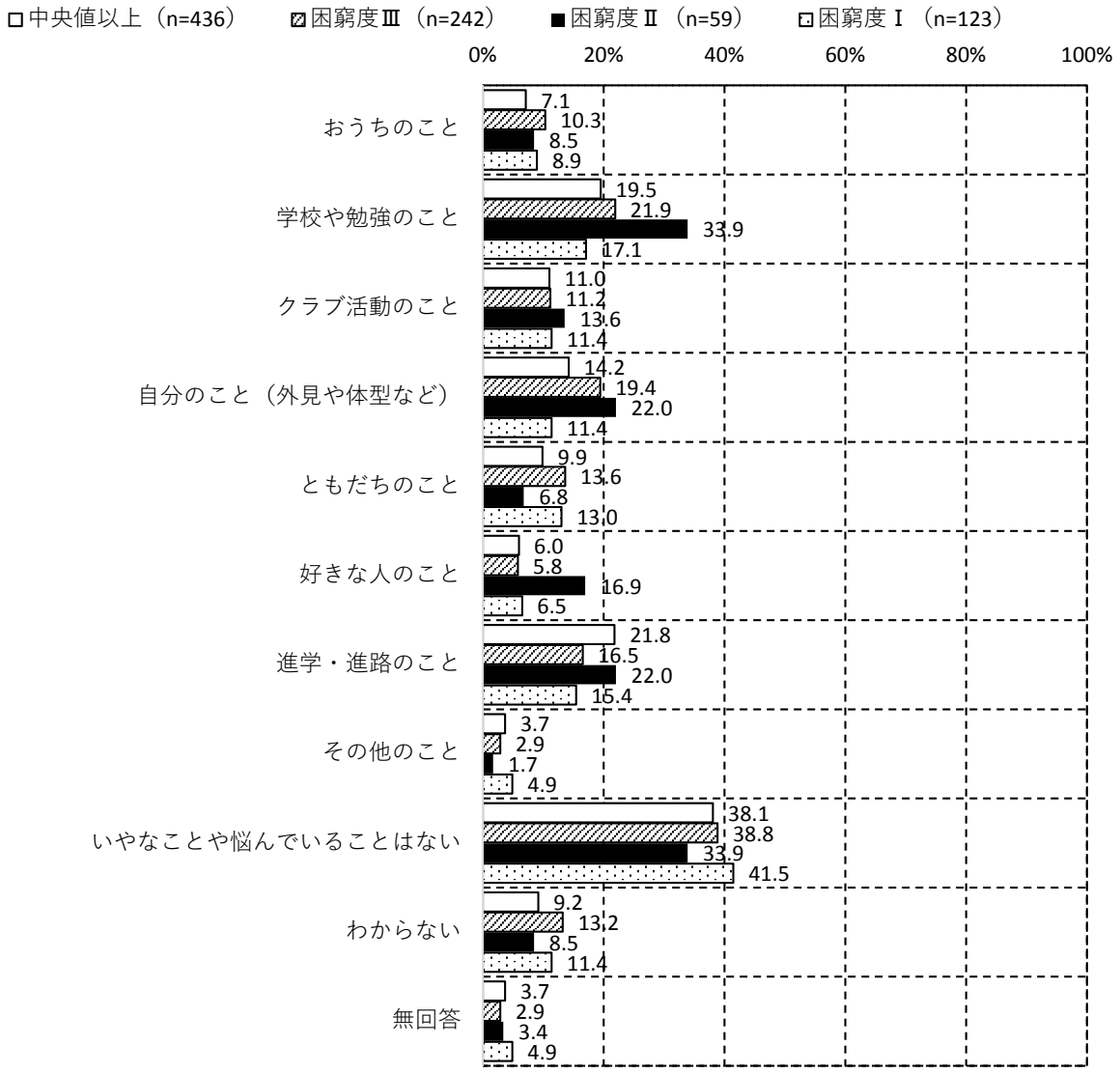

図 225. 困窮度別に見た、悩んでいること

困窮度別に子どもが悩んでいることについて、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目すると、困窮度Ⅰ群では、「その他のこと」4.9%（中央値以上群に対して、1.3 倍）、「無回答」4.9%（1.3 倍）、「ともだちのこと」13.0%（1.3 倍）、「おうちのこと」8.9%（1.3 倍）が高かった。

困窮度別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手（子ども票問 19）

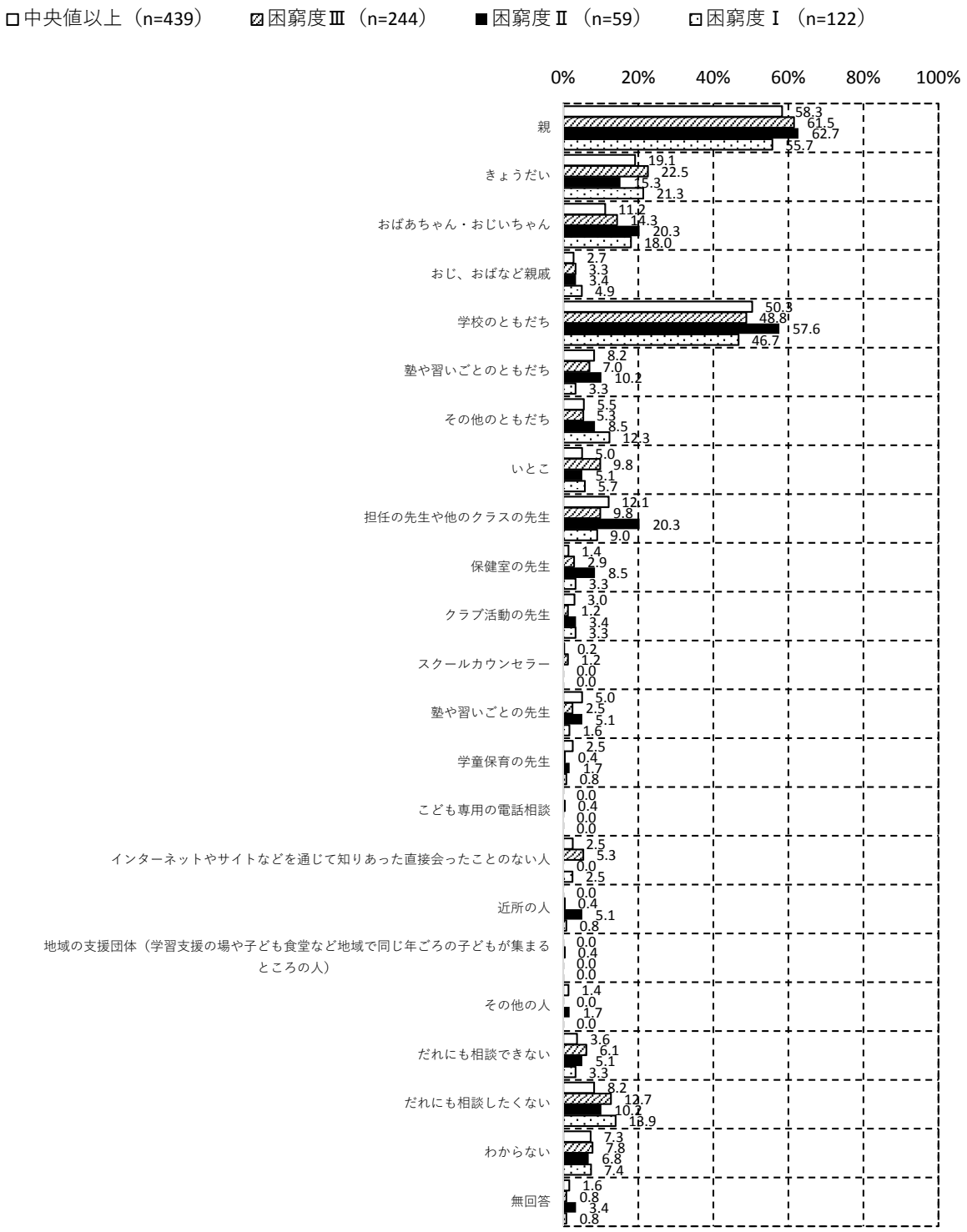

図 226. 困窮度別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手

困窮度別に子どもの嫌なことや悩んでいるときの相談相手について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「保健室の先生」3.3%（中央値以上群に対して、2.4 倍）、「その他のともだち」12.3%（2.2 倍）、「おじ、おばなど親戚」4.9%（1.8 倍）、「誰にも相談したくない」13.9%（1.7 倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られた。

困窮度別に見た、困ったときの相談先（保護者票問 21）

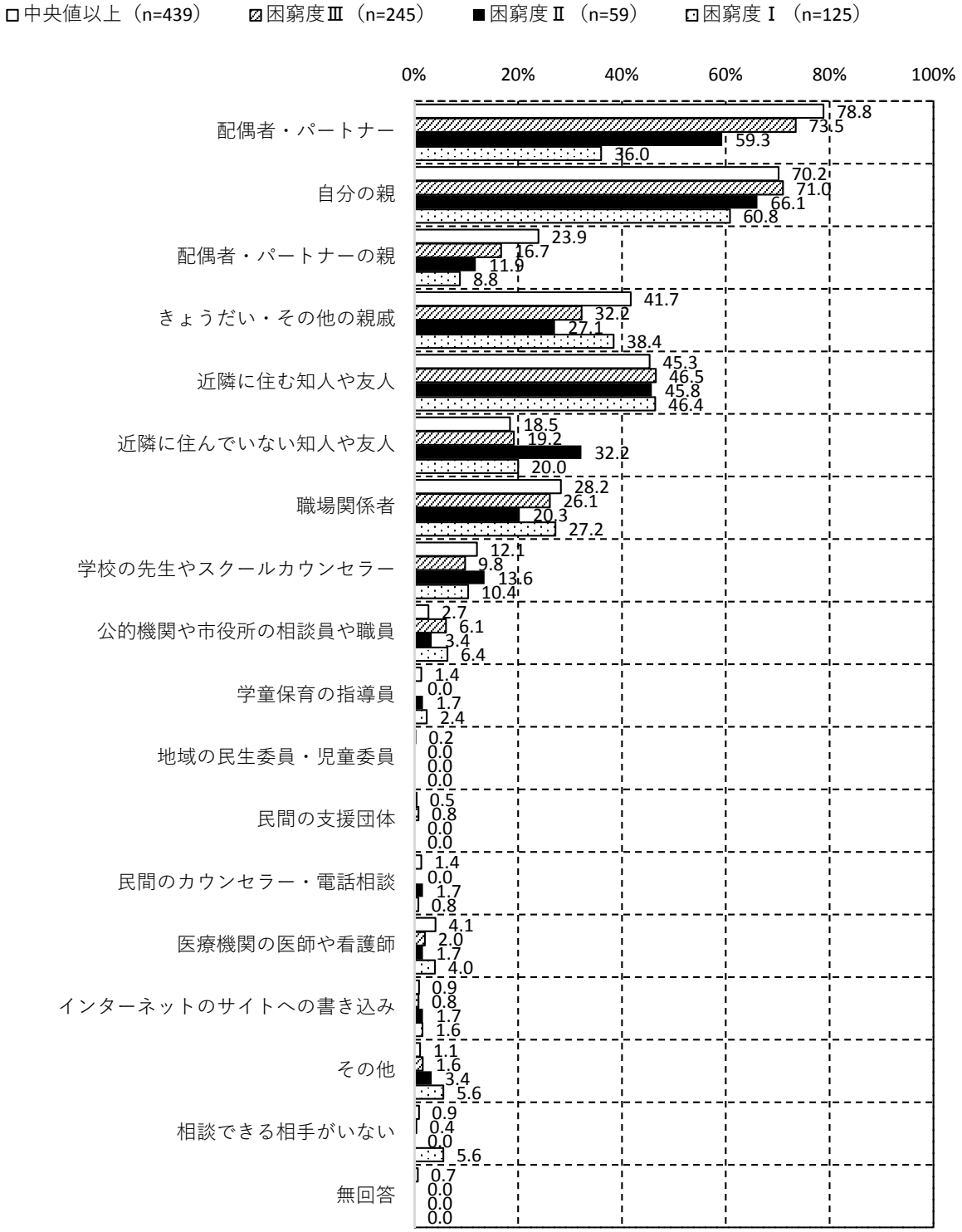

図 227. 困窮度別に見た、困ったときの相談先

困窮度別に保護者の困ったときの相談先について、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「相談できる相手がいない」5.6%（中央値以上群に対して 6.1 倍）、「その他」5.6%（4.9 倍）、「公的機関や市役所の相談員や職員」6.4%（2.3 倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数見られた。中央値以上群では「配偶者・パートナー」と回答した割合が 78.8%だったのに対して、困窮度Ⅰ群では 36.0%だった。

世帯構成別に見た、保護者の困ったときの相談相手のいない割合（保護者票問 21）

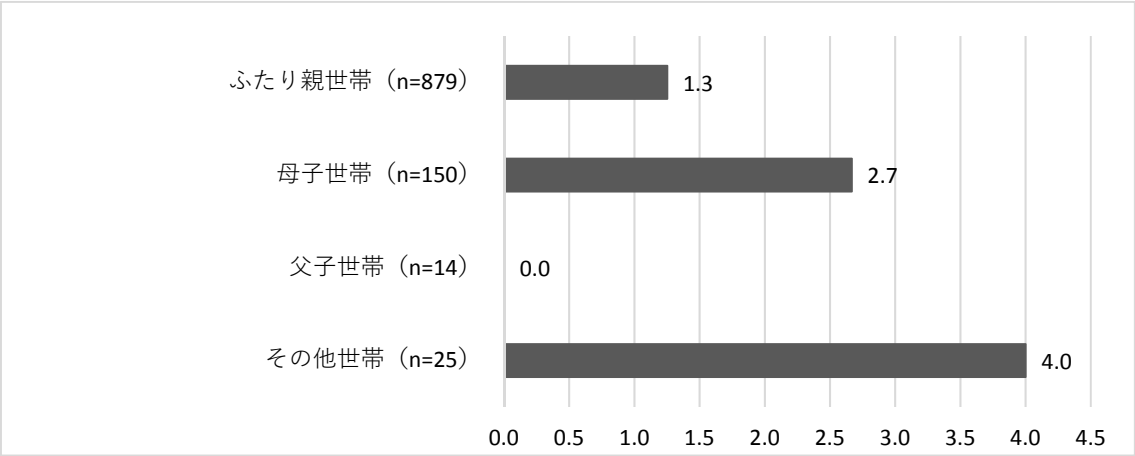

図 228. 世帯構成別に見た、保護者の困ったときの相談相手のいない割合

世帯構成別に保護者の困ったときの相談先を見ると、「相談相手がいない」と回答した人は、ふたり親世帯では 1.3%に対し、母子世帯では 2.7%であった。

困窮度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）（子ども票問 23）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 155 上の説明参照。

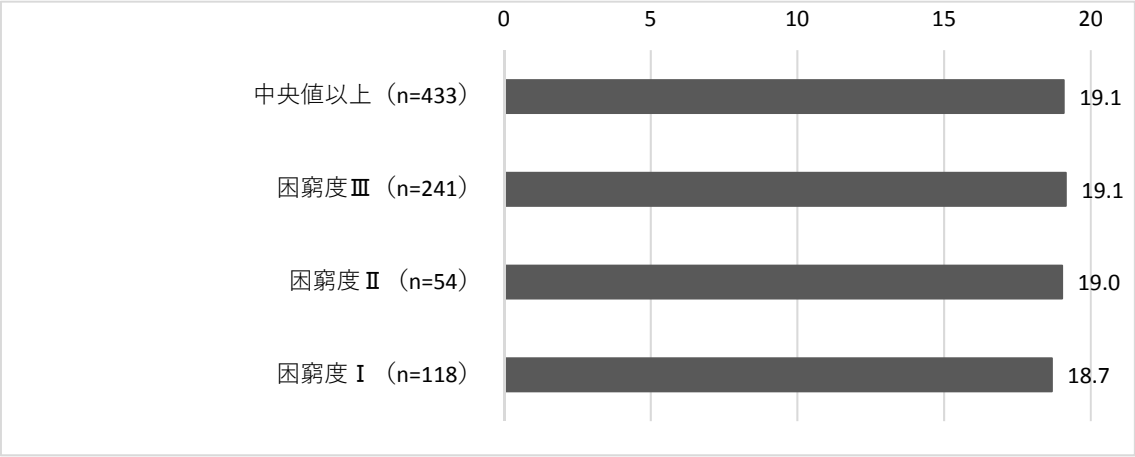

図 229. 困窮度別に見た、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

困窮度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、中央値以上群では 19.1 に対し、困窮度Ⅰ群では 18.7 であった。

子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）（子ども票問 12×子ども票問 23）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 155 上の説明参照。

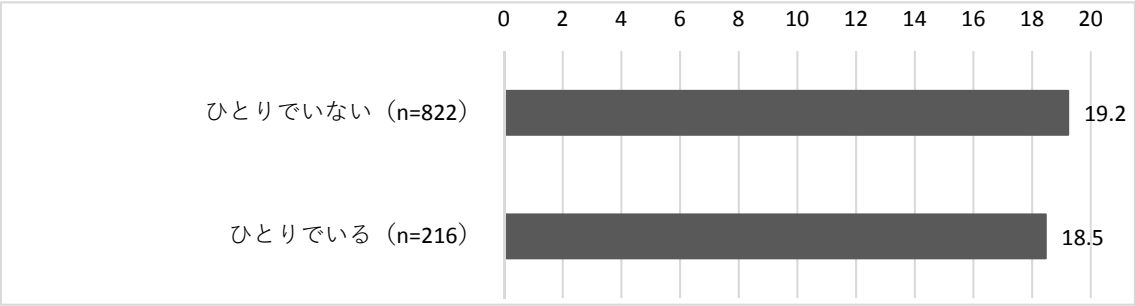

図 230. 子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）

子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかによって子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、放課後ひとりで過ごす子どもの方がそうでない子どもよりも自己効力感（セルフ・エフィカシー）が低かった。

困窮度別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票問 26）

※保護者の自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 165 上の説明参照。

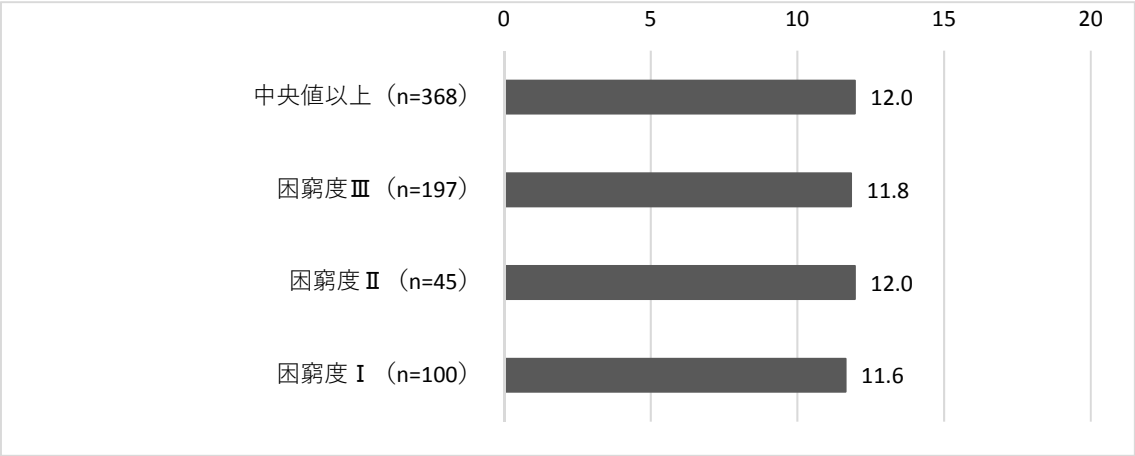

図 231. 困窮度別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

困窮度別に保護者のセルフ・エフィカシーを見ると、中央値以上群では 12.0 に対し、困窮度Ⅰ群では 11.6 であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（家の手伝いをするか）
（保護者票問 21×子ども票問 10-4）

※「あなたが本当に困ったときや悩みがあるとき、相談相手や相談先はどこですか」という問に対し、「学校の先生やスクールカウンセラー」「子育て講座（小・中学生を持つ保護者を対象）等を担当するリーダーや職員等」「公的機関や役所の相談員」「学童保育の指導員」「地域の民生委員・児童委員」「民間の支援団体」「民間のカウンセラー・電話相談」「医療機関の医師や看護師」のうち少なくとも１つを選択した人を、「地域社会に相談相手がいる」とした。

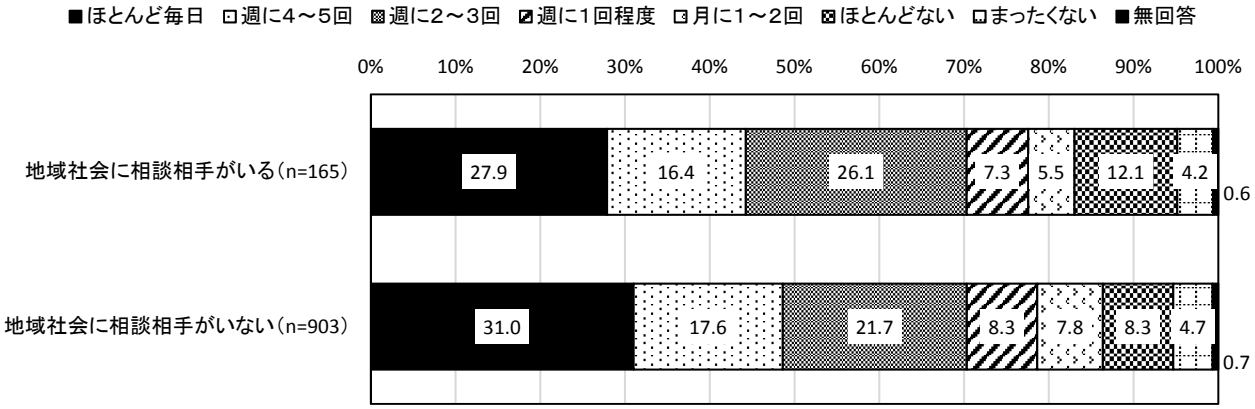

図 232. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（家の手伝いをするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（家の手伝いをするか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 27.9%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 31.0%であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）（保護者票問 21×子ども票問 10-5）

※「地域社会に相談相手がいる」については、図 231 上の説明参照。

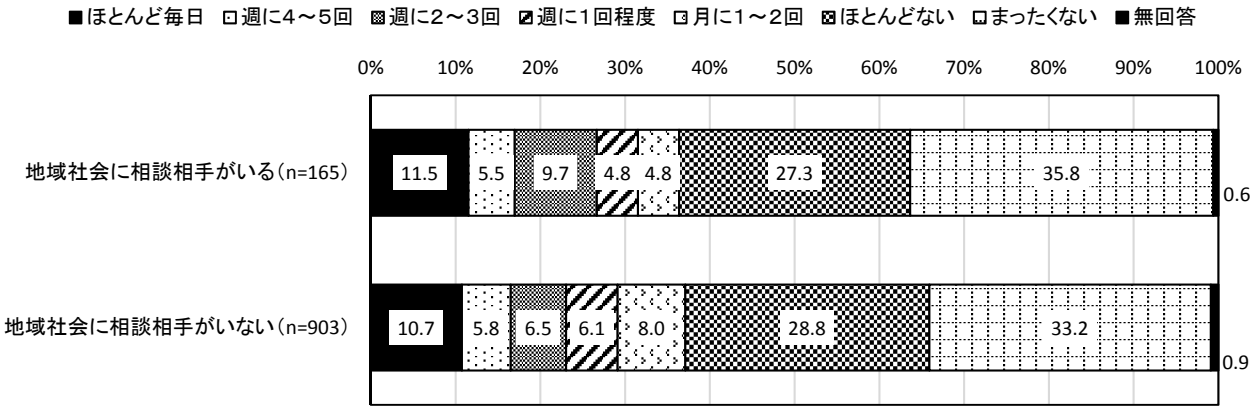

図 233. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 11.5%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 10.7%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 35.8%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 33.2%であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）（保護者票問 21×子ども票問 10-6）

※「地域社会に相談相手がいる」については、図 231 上の説明参照。

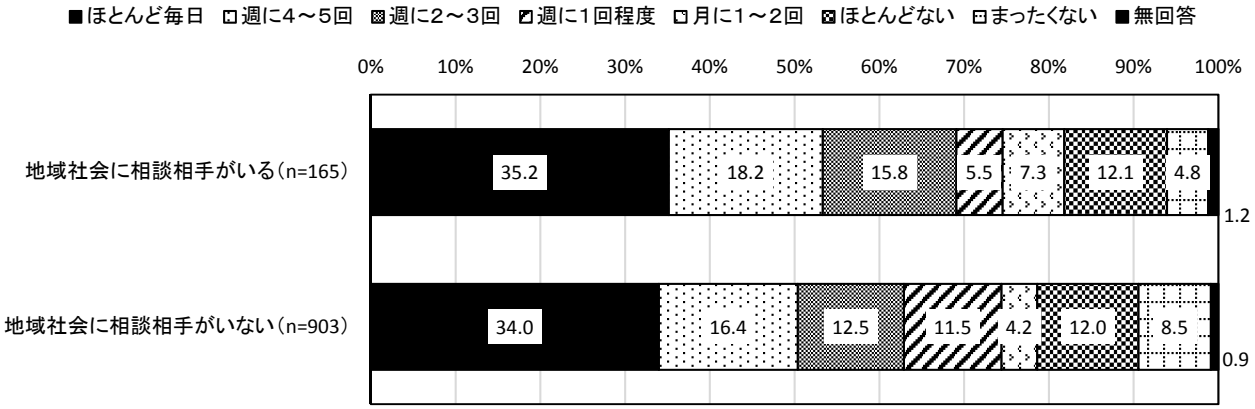

図 234. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 35.2%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 34.0%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 4.8%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 8.5%であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）（保護者票問 21×子ども票問 10-7）

※「地域社会に相談相手がいる」については、図 232 上の説明参照。

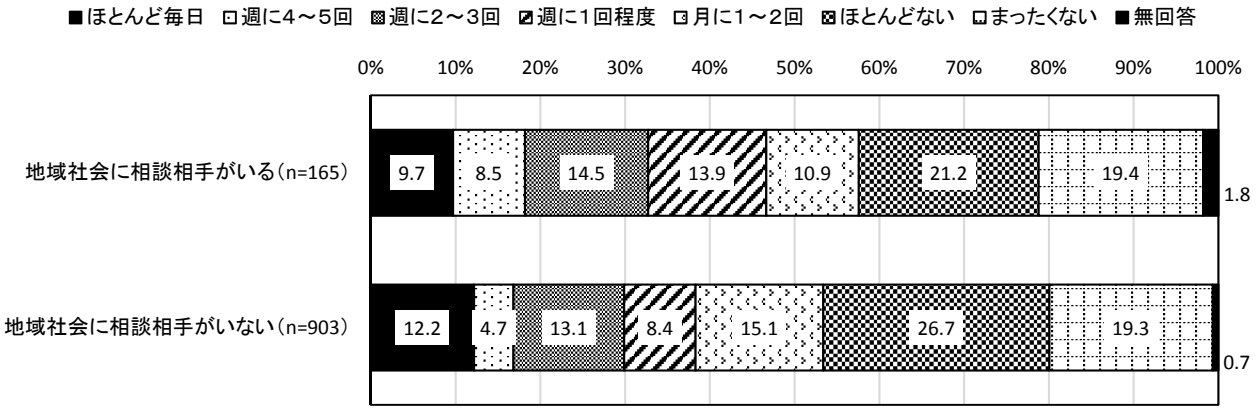

図 235. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 9.7%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 12.2%であった。「まったくない」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 19.4%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 19.3%であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）（保護者票問 21×子ども票問 10-8）

※「地域社会に相談相手がいる」については、図 231 上の説明参照。

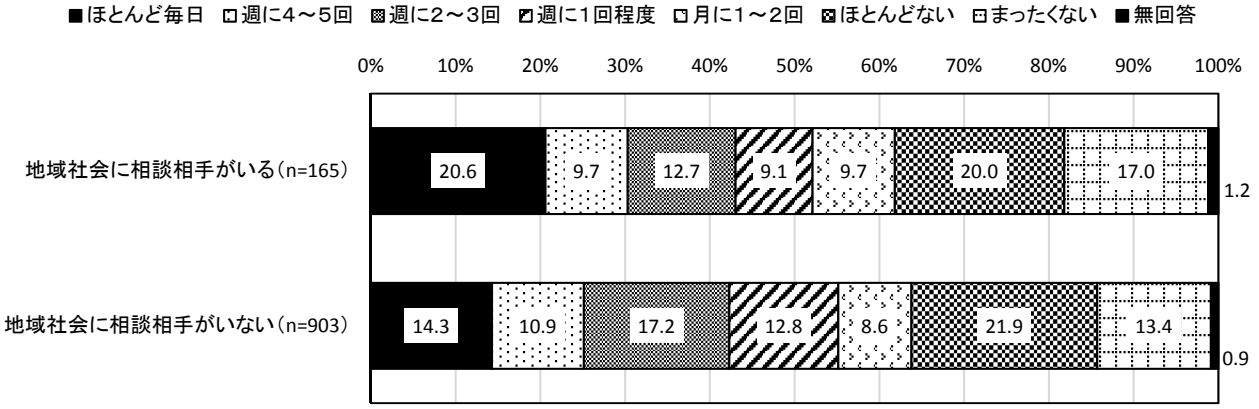

図 236. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 20.6%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 14.3%であった。また「まったくない」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 17.0%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 13.4%であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）
（保護者票問 21×子ども票問 10-9）

※「地域社会に相談相手がいる」については、図 231 上の説明参照。

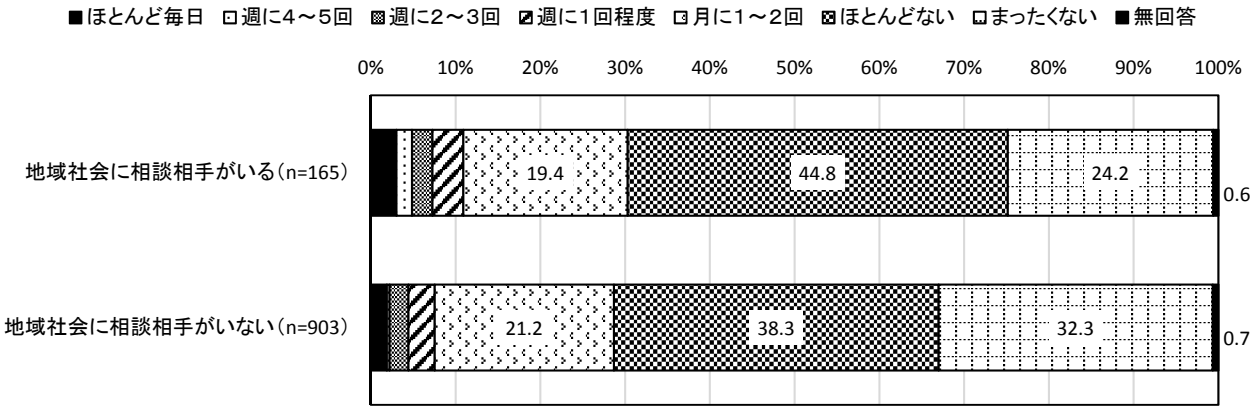

図 237. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）を見ると、「まったくない」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 24.2%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 32.3%であった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）
（保護者票問 21×子ども票問 10-10）

※「地域社会に相談相手がいる」については、図 232 上の説明参照。

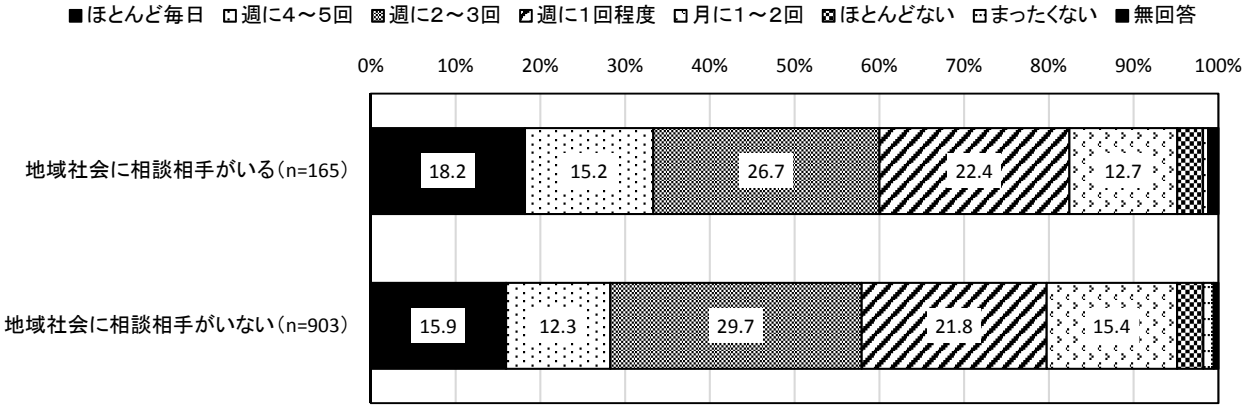

図 238. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）を見ると、「ほとんど毎日」と回答した割合は、「地域社会に相談相手がいる」人では 18.2%に対し、「地域社会に相談相手がいない」人では 15.9%であった。

＜対人関係に関する考察＞

子ども・保護者の社会的な対人関係について、困窮度や世帯構成などの視点から結果を述べる。子どもが放課後に過ごす場所に関し、困窮度Ⅰ群は中央値以上群に比べ「塾」「習い事」の割合が減少した一方、「スーパーやショッピングモール」「ゲームセンター」と答える子どもは、回答数は少ないもののその割合が増え、一人でも楽しめる場所で過ごす傾向が強まることが示唆された。
続いて子どもが誰と放課後を過ごすかを見てみると、困窮度Ⅰ群は中央値以上群に比べ「ひとりでいる」と回答する子どもの割合が高まり（中央値以上群では21.0%、困窮度Ⅰ群では24.4%）、一方、自分の子どもが放課後ひとりで過ごしていると考えている保護者は困窮度を問わず概ね1.1%～3.4%であった。すなわち放課後の過ごし方で保護者の認識と実態とがかい離している状況が確認された。また困窮度の高まりに沿って「おうちの人以外の大人（近所の大人、塾や習いごとの先生など）」「学校以外のともだち（地域のスポーツクラブ、近所のともだちなど）」と回答する子どもの割合が低くなる傾向にあった。

悩んでいることを困窮度の視点から見ると、困窮度Ⅰ群は中央値以上群に比べ「その他のこと」4.9%（中央値以上群に対して、1.3倍）、「無回答」4.9%（1.3倍）、「ともだちのこと」13.0%（1.3倍）、「おうちのこと」8.9%（1.3倍）の項目が高かった。そしてそのいやなこと・悩んでいることを相談する相手として、困窮度Ⅰ群は中央値以上群に比べ「だれにも相談したくない」と回答する子どもの割合は増加していた（中央値以上群では8.2%、困窮度Ⅰ群では13.9%）。困窮により嫌な事や悩みを抱えたまま生活することを強いて、精神的な衛生状態に影響を与えていることが推測される。

保護者の相談相手や相談先においては、困窮度が高まるにつれて「配偶者・パートナー」「配偶者・パートナーの親」と回答する割合が減少し、逆に「公的機関や市役所の相談員や職員」と回答する割合が増加した（中央値以上群では2.7%、困窮度Ⅰ群では6.4%）ことから、気軽に相談できる人が周りにおらず、公共的な機関に助けを求める割合が高まることが明らかになった。また世帯種別に関しては「保護者の困ったときの相談相手のいない割合」が、ふたり親世帯では1.3%に対し、母子世帯では2.7%と気軽に相談できる知人・友人が少ないことが明らかになった。
子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については、困窮度が高まるにつれて若干ながらも低下する傾向が見受けられ、また保護者についても困窮度Ⅰ群が最も低かった。また放課後ひとりで過ごす子どもの方がそうでない子どもよりも自己効力感（セルフ・エフィカシー）が低かった。

自由記述の回答をみると、「子どもが不登校ですが、平日に不登校の子ども達と親が集まれる場所があれば良いなと思う」や、「児童館が徒歩圏にあれば家で遊べなくても居場所があるのにと思います。学校や集会所など子どもたちが自力でいける所で子ども対象の事業を増やして欲しいです」といったように、子どもの居場所に関するものが見られた。一方、子育ての悩みも多く見られ、保護者への心的サポートも求められている。

４．市独自追加設問

子どもー困窮度別にみた、夕食は何時頃食べますか（子ども票問 6－2）

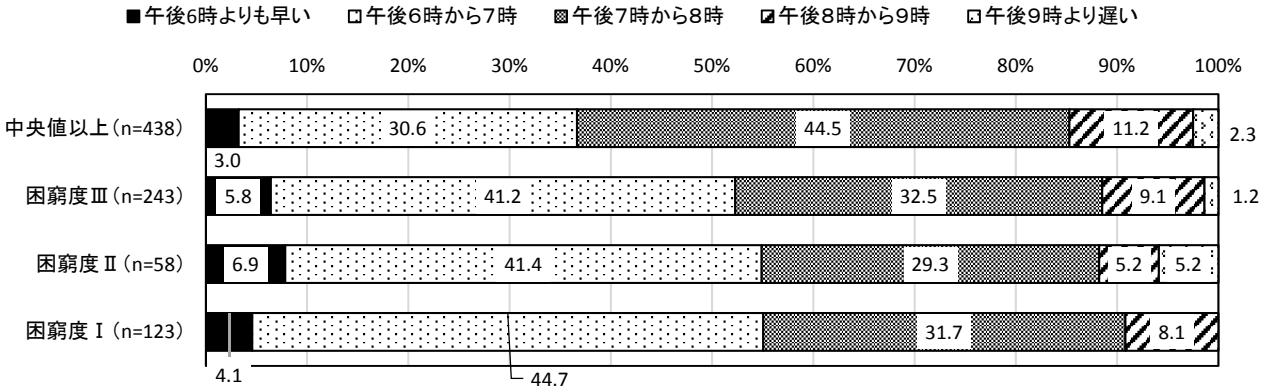

図 239　困窮度別にみた、夕食の時間

困窮度別に夕食の時間を見ると、「午後６時から７時」と回答した割合は、中央値以上群では 30.6%、困窮度Ⅲ群では 41.2%、困窮度Ⅱ群では 41.4%、困窮度Ⅰ群では 44.7%であった。

困窮度別にみた、地域に子ども食堂があれば、お子さんに利用させてみたいですか。（保護者票問 28）

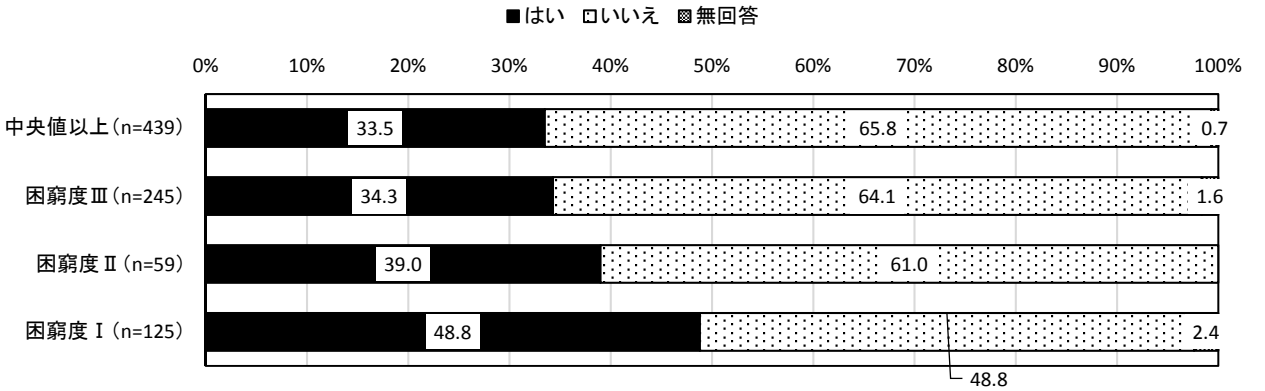

図 240　困窮度別にみた、地域に子ども食堂があれば、お子さんに利用させてみたいですか

困窮度別に地域の子ども食堂を利用する希望を見ると、「はい」と回答した割合は、中央値以上群では 33.5%、困窮度Ⅲ群では 34.3%、困窮度Ⅱ群では 39.0%、困窮度Ⅰ群では 48.8%であった。

困窮度別にみた、地域に子ども食堂があれば、利用してみたいですか。（子ども票問 27）

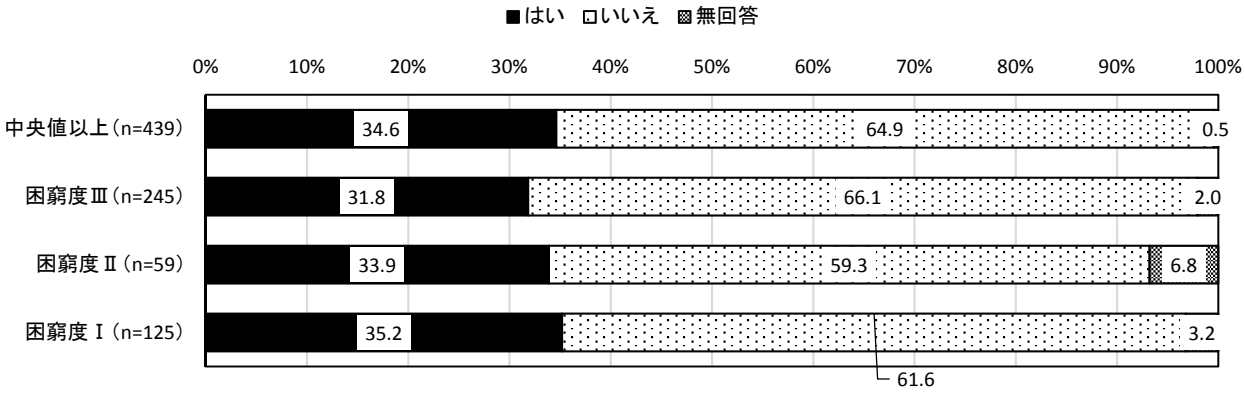

図 241　困窮度別にみた、地域に子ども食堂があれば、利用してみたいですか。

困窮度別に地域の子ども食堂を利用する希望を見ると、「はい」と回答した割合は、中央値以上群では 34.6%、困窮度Ⅲ群では 31.8%、困窮度Ⅱ群では 33.9%、困窮度Ⅰ群では 35.2%であった。

世帯構成別にみた、地域に子ども食堂があれば、お子さんに利用させてみたいですか。（保護者票問 28）

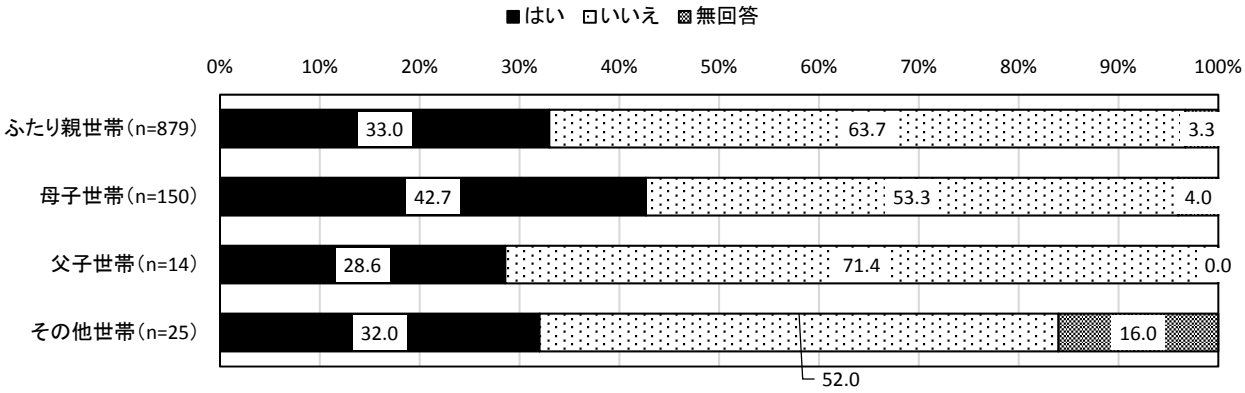

図 242　世帯構成別にみた、地域に子ども食堂があれば、お子さんに利用させてみたいですか。

世帯構成別に地域の子ども食堂を利用する希望を見ると、「はい」と回答した割合は、ふたり親世帯では 33.0%、母子世帯では 42.7%、父子世帯では 28.6%、その他の世帯では 32.0%であった。

世帯構成別にみた、地域に子ども食堂があれば、利用してみたいですか。（子ども票問 27）

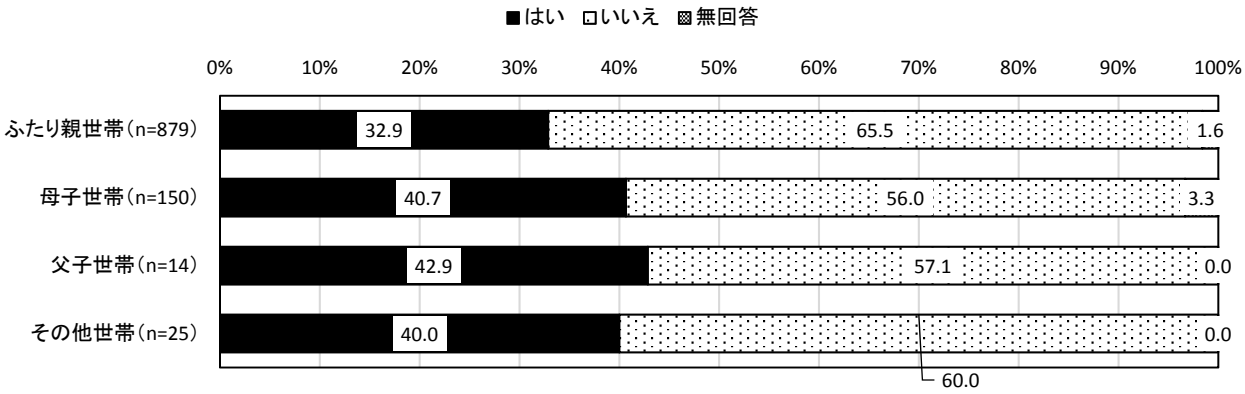

図 243　世帯構成別にみた、地域に子ども食堂があれば、利用してみたいですか。

世帯構成別に地域の子ども食堂を利用する希望を見ると、「はい」と回答した割合は、ふたり親世帯では 32.9%、母子世帯では 40.7%、父子世帯では 42.9%、その他の世帯では 40.0%であった。